哈剌合孫列傳に曰く、曾祖啓昔禮始め王可汗脱斡鄰に事ふ、王汗太祖と約して兄弟と爲る太祖衆を得るに及び之を陰忌す、太祖を害するを謀る、啓昔禮潛かに其謀を以て來り告ぐ太祖乃ち二十餘人と遁れ去る、還つて王罕を攻滅す、其衆を幷せ擢し千戸と爲る、達爾罕の號を賜ふ、啓昔禮は即ち乞失里傳敍する所即ち此事也、邱筵機西遊記に曰く、上東山にす、馬例れ獵を能む、邱處機に宜しく出獵を少ふすべしと諫む、上顧みて吉息利苓剌汗に謂つて曰く神仙我に勸むる以後都べて也吉息利に依る、即ち乞失力の對音、答剌汗亦即ち達爾罕の對音なり。

我れ再び往いて探偵すべしと、家に到る時正に也客扯連の子納鄰客迤の箭を磋ぐを見る、曰く今我等話したる事家人堅く口外を許さずと、又乞失里黑に對して曰く白馬と栗色の二匹の馬を繫ぎ置くべし我明日早く上馬せんと欲すと、乞失里此の語を聽き遂に往いて巴歹に對して曰く、只今汝か體審したる言語は實なり今我等両人往いて帖木眞に告ぐべしと、即ち二匹の馬を持ち來り自己の家に至り子羊一匹を殺し之を煮、每人一匹に騎す、其夜帖木眞の帳房の後に到り也客扯連父子の語りし話を盡く告げ知らせ且つ曰く疑惑すべからず汝を捕へんとする事眞なりと。

後文十卷巴歹二人を賞する張本たり。

元朝秘史卷七

成吉思巴歹乞失里の言ふを聽き其夜時近にある倚附すべき件當に告知し家内の物件を棄て遂に往いて卯温都兒山陰に躲く。

行く時勒蔑をして後哨となす、明日午後に至り合剌合勒只惕額列惕地面に歇息す。

合剌合勒只惕は即ち後文の合泐合河にして、秘史凡ろ言ふ主惕或は只惕は皆海子を指す合泐合は即ち今の喀爾喀河にして源蒙古特爾根山に出で具爾池に流入す、其上地あり額列也と名づく、元史畏答兒傳に曰く太祖克烈王罕と哈剌眞に對陣す即ち此の合剌合勒只なり矣。

中間阿勒赤歹放馬の赤吉歹等あり來り報ず。

阿勒赤歹は太祖の弟合赤温の子なり世系表按只吉歹と作す。

卯温都兒山前より忽剌安不剌合惕地面を望見するに塵起る。

忽剌安不剌合は下文忽剌安不兒合と作す。

敵人來到するや成吉思馬に上りて行く、此時王罕札木合と來る、机木合に問ふて曰く帖木眞の處に厮殺する誰か有ると、札木合曰へ兀魯兀惕忙忽惕ありと。

兀魯兀惕は今の額魯將其後也、忙忽は即ち蒙古の對音二部皆宇端察兒魯孫納臣の後に出づ。

彼の二種の百姓能く厮殺す、混戰の時と蠅も亂れず、小鎗刀裏彼の旄纛に慣る或は花或は黑時を見て隄防すべしと、王罕曰く然らば只兒斤勇士合答黑吉をして彼を衝かしむべしと。

只兒斤は金の部族にして王罕部落に在る者なり、即ち宋里眞の對音宋人の女眞と稱する者也、元史本紀に朱力斤と作す、宇文懋昭大金國志に曰く金國本と朱里眞と名づく、蕃語舌音訛して女眞と爲る、或は慮眞と曰ふ即ち此の只兒斤なり矣。

續ひて再び土綿、土別干姓。

前文五卷禿別干有り、土綿二字無し、此に土別干と作すは即ち禿別干也。

阿赤里失侖、斡蠻黃合亦惕

黃合は本紀に黃衰と作す。

勇士豁里失列們太子。

本紀に火力失烈門と作す。

をして一千の護衛を飲せしめ應援せしむ、最後に仍ほ其大中軍をして衝らしむ、王罕又曰く我が此の軍馬は札木合弟汝ぢの整治すべきものなりと、是に於て札木合出で行く札木合彼

の件當に對して曰く、我れ前に常に帖木眞に敵する能はず、今王罕我をして彼の軍馬を整治せしむ、看來れば彼れ又我れに及ばず、以て帖木眞安答に報知すべしと、是に於て札木合暗に人を遣し、前言を以て成吉思に告げて曰く此等必ず、汝に勝つ能はず汝怕るるを休めよ、只謹慎すべしと成吉思此話を知りて曰く、主兒扯歹伯父我れ汝をして先鋒と做さんと欲す、汝が意如何と、主兒扯歹答ふるに及び忽亦勒答兒曰く、我れ先鋒を做さん久しき後我が孤兒を括擧せんと。

主兒扯歹兀は兀魯兀惕部人納臣に出づ故に伯父を以て稱す、忽亦勒荅兒は前文四卷に忽余勒荅兒と作す忙忽部人也。

主兒扯歹曰く皇帝面前我が兀魯兀惕忙忽惕先鋒と做り厮殺すと、言ひ罷む時彼の両姓成吉思の前に陣を排して立つ、方に有り王罕の先鋒只兒斤衝き進み來る、兀魯惕忙忽惕迎ひ衝き彼を敗る、追ふ時王罕の後援土綿土別干の阿赤黑失侖衝き來り忽亦勒荅兒刺馬より落つ、忙忽惕軍復た翻回し忽亦勒荅兒の落馬する處に立つ。

姚燧牧庵文集に平章忙兀公傳羅驩碑有り云ふ、公畏荅而は公の魯孫、始め畏荅而、兄畏翼と事を俱にす、太祖名を屑塵と易ふ、約して按荅と爲る、帝王罕と曷剌眞に陣す、彼衆く我れ寡し、兀魯一軍に敕して先づ發せしむ、其將求徹帶玩馬鼎に鞭ちて應せず、屑塵請ふて

曰く、戰は猶鑿の如き也、斧に匪ざれば入らず、吾れ先づ鑿と爲らんと、帝を顧みて訣別し曰く、臣萬一還らずとも三黃頭兒將に聖慮を軫せんと、即ち疾戰す、大に其軍を敗り、北に逐ふ敕して之を止めしむ、乃ち帥を旋し胄を免ぎて殿を爲す、流矢腦に中る帝親しく傅約を爲す、寢ぬるに同帳を以てす、月を踰にて卒す、帝曰く曩さに只里吉敵將爲り實は屑蘆を禦ぐ、其只里吉氏百戶を以て屑蘆の子に屬し世世賜して、絕ゆる勿らしむ、其族散亡する者之を收完し即ち北方萬家に封す、元史畏荅兒傳即ち此文を采る、秘史を以て之を考するに其畏荅兒と云ふは即赤忽亦勒荅兒也、屑蘆は即ち餅禪両字也、曷剌眞は即ち忽剌安也、兀魯一軍は即ち兀魯兀惕也、求徹帶は即ち主兒扯歹也、只里吉は即ち土罕の只兒斤也、子世々絕にず、即ち後文十卷孤獨賞賜を受くる者也。

主兒扯歹兀魯兀惕を領して衝き進む、又彼を敗る追ふ間、斡蠻董台亦惕衝き來る、主兒扯歹又勝つ失列門太子一千の護衛軍を領して衝き來る、主兒扯歹又勝つ、是に於て王罕の子桑昆彼の父に知らしめず衝き來る、主兒扯歹桑昆の腮を射る、中つて倒る。

本紀に曰く、帝折里麥を遣して前鋒と爲す、先づ朱力斤部と遇ふ、次ぎに董哀部と遇ふ、又次ぎに火力失烈門部と遇ひ皆之を敗る、最後汪罕親兵と遇ふ、又之を敗る、亦剌合勢急なるを見突然來りて陣を衝く之を射頰に中る、即ち兵を斂めて退く、即ち此事也、惟ふに此

役功主兒扯歹に在り、者勒篾非す、紀誤る。

罘客列赤惕種の軍桑昆の射倒さるゝを見即ち翻回して桑昆の處に立つ、成吉思既に王罕に勝つ日を見るに已に晚し、軍を敗め傷きたる忽亦勒荅兒を以て回り來る其夜厮殺の處を離れて宿す、次日天明軍馬を點視するに斡闊台。

元史本紀に曰く、太宗英文皇帝、諱窩闊台、と云ふ、輟耕錄同じく又曰く、太祖皇帝六子曰く求赤察、曰く合台太子、曰く太宗皇帝、曰く兀魯赤太子曰く果里干太子、即ち列堅を缺く、蒙韃備錄に曰く、成吉思子有り甚だ多し、長子比因金國を破り西京雲中を改打する時陣亡す第二子即ち大太子と爲る、約直と名づく、三太子名は阿戴、四太子天婁と名づく、五太子名は龍孫皆正后の生む所、其下又十數人あり乃ち庶生也、按ずるに窩闊台阿戴は皆太宗の名後文或は斡闊台と作さず而して斡歌歹と作す者均しく音字たる耳、孛羅忽勒。

前文孛羅兀勒と作す、即ち元史博爾忽傳あり。

孛斡兒三人を少ふす、成吉思曰く斡闊台孛羅忽勒孛斡兒出は一同生死し必ず相離、るるを肯んせず、其夜成吉思敵の來つて追襲せんを恐れ軍馬を整治し厮殺を準備す、日明くるに及び後より一人有りて來るを見る、到る時是孛斡兒出なり成吉思胸を椎して天に告ぐ、畢つ

て孛斡兒出曰く敵人の爲めに我馬を射倒され步行して行く時客列亦惕種翻回し來り桑昆の處に立つを見る、彼の機會に彼の物を駄したる馬駄歪するを見即ち彼の駄を割斷し騎して走り出づと。

元文類廣平王碑に曰く、篋里期の戰風雪迷陣、再び敵中に入り太祖を求むれども見ず、急に輜金に趨く則ち御勒已に還る、車中に臥憩す、博爾朮至るを聞く、曰く此れ天我を賚す る也と。

頃くして又一人有りて來る、近づき見る時人下る、又兩脚ありて垂る、到るに及び之を看るに斡闊台孛羅忽勒一個の馬に疊騎す、孛羅忽勒口上血を帶ぶ、斡闊台は項上箭に中るに因り孛羅忽勒凝血を以て呟ひ去る成吉思之を見涙を流く心深く悲む、即ち火を用ひて斡闊台の箭瘡を烙し渴を止むる物を喫せしむ、孛羅忽勒曰く離人の塵土高く揚る、卯温都兒山前忽剌安不兒合惕地面に往くを見ると。

忽剌安不兒合は上文不剌合と作す、同一地なるも譯文偶ま殊にする耳。

是に於て成吉思軍馬を整治し語泐灰涇魯格兒只惕と名づくる河水を逆り荅闌揑木兒格思地面に入る。

故の塔塔兒の地也初時塔々兒部落全く荅闌揑木兒格思に居る、其東南哈爾渾河あり、西

北流す名づけて合勒合河と曰ふ、今の喀爾喀河也、西南し瀦して巨澤と爲る、今名づけて布伊爾湖と曰ふ、所謂涇魯格泐只なる者、其地此の湖に傍す矣、前文六卷太祖盡く塔々兒人を誅す蓋し移つて此に居る、又札木合往時豁兒豁納に居る、太祖札木合を破る後札木合遂に王罕に依る、所謂泰赤烏塔々兒両部降るに非ざれば則ち殺す、蓋し已に奇渥温の地と成る矣。

其後合荅安荅勒都兒罕あり、彼の妻と離れ成吉思の處に來つて曰く（王罕の處より來る）王罕の子桑昆箭に中る時王罕曰く惹鬪すべからざるの人惹鬪す、彼惜むべし、兒子の腮上を釘づけにす即ち我が兒子性命有る時再び咱を銜かしむべしと、阿赤黑失侖曰く皇帝よ皇帝休めよ、未だ兒子を生まざる時祈るらくは嗣子を求めよ、此の既に生またる兒子桑昆を寵愛すべし、咱達々多半は百姓なり、咱の處に帖木眞と反し出でたる百姓あり、毎人一匹の馬に騎し夜は必ず樹下に在りて宿す、彼れ若し來らざらんか我等行きて馬糞を拾ひ來る如し。

王罕是時其勢尙盛にして太祖の能く敵する所に非ず此言を觀て以て强弱を知るべし。

王罕應許す、曰く、此の兒子を搖動するを休めよ、能く寵愛すべしとて回り去る。

成成吉思荅闌揑木兒格思地面より合泐合河に順ふて動く時軍馬を點視するに二千六百有り。下文合泐合河捕魚海子に流入す、則ち合泐合河は乃ち今の喀爾喀河にして貝爾池に流

入する者也、蓋し答闌揑木兒格思其地卽ち河上に在り。

成吉思一千三百を領して河の西邊に依りて起つ、兀魯兀惕忙忽惕一千三百を領し河の東邊より起つ。

主兒扯歹及び忽亦勒答兒二人共に其半を領す。

即ち獵して行糧を作る、獵する時忽亦勒答兒の金瘡未だ痊癒せず、成吉思止めて從はざらしむ、野獸を追ふて馬を走らすに因り金瘡重發して死す、彼の骨を以て合兒合水幹崛訥屹山の半崖に葬る。

今地圖喀爾喀河南岸呼恰烏爾山有り、即ち此れに似たり、云ふ所の斡兒訥屹山也。

合勃合河捕魚兒海子に流入する處。

按ずるに今の地圖喀爾喀河、源特爾根山下に出で貝爾池に流入す、水道提綱に曰く、克魯倫河潴して枯倫湖と爲る、烏里順河有り、東南布伊爾湖より喀爾喀河諸水を合し北流して來り會す、正に湖面の正東に當る、布伊爾は卽ち捕魚兒の對音、喀爾喀は卽ち合勃合の對音也。

帖兒格等翁吉利有り。

帖兒格等翁吉刺は今の車臣汗左翼前旗及中右旗に當る是れ其故址也。

成吉思主兒扯歹をして兀魯兀惕忙忽惕を領して行かしむ、翁吉利百姓に從前の姻親を想ふて投降するものと言はしむ。

本紀宏吉刺部本と哈荅斤等阿雷泉に會し白馬を斬つて同誓し以て帝と王罕を襲ふ、是に至つて帝先づ脅して之を降す也、姻親は訶額侖及び孛兒帖を謂ふ皆宏吉刺氏也。

若し投降を肯んぜざらんか便ち厮殺せんと、將に言はしめんとする時翁吉刺都べて來り降る。

成吉思彼投降するに因り諸般會て彼を動かさず、成吉思既に翁吉刺を取り新ち起つて統格黎ふ河東邊に去る、成吉思阿兒孩合撒兒。

本紀に曰く汪罕既に敗れて歸る、帝亦兵を還して董哥澤に至りて駐す、此文を以て之を校するに董哥は即ち統格の對音たるを知る、黎は助辭にして澤は即ち小河なり矣、紀又曰く阿里海を遣して責を王罕に致す、按ずるに阿兒孩合撒兒六字を名と爲す、札剌亦兒族也、太祖の弟と是れ兩人なり。

雪格該者温。

即ち前文四卷速客該者温亦速客該と稱す可し。

二人王罕の處に往いて曰く我れ統格黎小河東邊に在りて下營すと

統格黎河は即ち通克拉河下流鄂爾坤河に入る。

草好く馬亦肥ゆ、父親よ我れ何事かあり我を怪む、若し我を怪まば何ぞ安きを得ん、斯くの如く怪責せんか我か家業破壞す、或は人ありて離間するにも非ざるべし、初め我等勺兒合勒崑山の忽剌阿訥亢山に於て。

前文六卷を按するに王罕太祖と再び父子を結ぶ、即ち土兀剌河黑林に在り然るに此黑林は山也、訥兀は山也上文斡亟訥亢山赤山を以て訥亢と稱す、此れ亦其例也、忽剌は即ち虎忽剌乃ち土兀剌の對音なり輟耕錄に云ふ、和林山二水出づ焉、其一は即ち虎忽剌と又勺兒合勒崑は即ち和林山なるを悟るべし、仍ほ是れ前卷の土兀河黑林なり矣。

曾つて言はずや、若し人ありて離間するも信ずべからず相對して話す時方に信ずべしと、今父親我も相對して話すに非ずや我れ少しと雖多きと同じ惡しと雖も好きと同じ、且つ我と汝は車の両轅の如く一轅折るれば牛拽くを得ず、又車の両輪の如く一輪壞るれば車行くを得ず。

元史木華黎傳に曰く太祖木華黎博爾求に命じ左右萬戸と爲す、從容謂つて曰く國内平定する汝等の力多きに居る、我れ汝と猶車の轅あるが如く身の臂あるか如き也、輔車相依るの語を見るに足る、蒙古人亦此義有り。

我れ豈に一條の轅一個の輪と比せんや曰く、前に汝が父忽兒察忽思不亦魯黑皇帝四十人の子あり内只汝ぢ最も長ず、立てて皇帝と做す所以なり、後汝ぢ台帖木兒不花帖木兒二弟を殺せり、汝ぢ又汝か弟額兒各合剌を殺さんとす、彼れ遂に走つて乃蠻に去る、汝ぢ弟を殺さんとしたる爲め、汝が叔父古兒罕來つて汝を征す。

按ずるに古兒罕は即ち本紀の菊兒罕解卷五に見ゆ王罕既に遼後に非ず、安んぞ西遼を以て叔父と爲すを得ん、想ふに是れ大石轉戰の時當つて忽兒察忽思不亦魯罕と兄弟と爲る故に土罕叔父を以て之を稱する耳。

汝ぢ止めて一百人有り、逃れて合剌温山の挾處に入る、汝ぢ其時女子忽札兀兒兀眞(兀眞蒙古語の娘子也)を以て蔑兒乞的脫黑脫阿に献ず、ろれより、來つて我父に救を求む。

按ずるに脫黑脫阿の弟婦は也速該の奪ふ所爲り、則ち蔑兒乞と也速該は讎也、此舉女を献ず、想ふに假道にして情を說くに非ず。

我父軍を領し汝が叔父を以て合申地面に趕入す。

合申解卷五に見ゆ。

汝ぢ百姓を以て還し、土語剌河邊黑林内に於て。

元史地理志に云ふ、王罕始めて謙州に居る、然るに後土兀剌黑林に遷る、蓋し烈祖の力を

得るなり、前文に云ふ蔑兒乞に春碓を擄去せらるるは蓋し未だ黑林に遷らざる以前の事。

我父と安と荅儆る、汝ぢ曾つて知感して曰く、此思汝ずの子孫の前に必ず報いん、天地知也と本紀阿里海の辭を述べて曰く、君叔父菊兒の爲めに逐ふ所となり因迫して來り歸す、我父卽ち菊兒を攻め之を河西に敗る、其土地人民盡く收めて君に與ふ、此れ大に君に功ある一也

嗣で後汝が弟額兒合剌乃蠻の處にて軍馬を借り、及來つて汝を征す、汝ぢ走つて乞塔種古兒罕の回回地面に入る。

乞塔は卽ち契丹二字の對音、卽ち西遼の葛兒罕耶律大石也、亦大實と作す。

一年に及ばず又反して出で委兀河西地面を經過す。

委兀は卽ち畏吾兒河西は卽ち上文の合申なり、解前に見ゆ。

窮乏し五個の羊を擠し、駝を刺して血を喫し、瞎沙の馬に騎して來る、汝と我父契交の故を以て我れ人を差して迎へて我營内に來らしむ。

前文五卷勇士速客語をして迫へて忽巴合牙に至らしめ冬を過ぐ。

又稅を科して汝を養ふ。

太祖紀に又曰く君乃蠻の爲めに攻むる所となり、西日沒するの處に奔る、君が弟札阿紺孛金境に在り、我れ亟かに人を遣して召還す、至るに及び又篾里乞部人の逼る所と爲り我れ

我か兄斡徹別及我弟大丑に請ひ往いて之を殺す、此れ大に君に功あるの二也、史文を案ずるに秘史と情事稍異る。

汝ぢ後蔑兒乞百姓を擄とす、頭口家業盡く都べて汝に與ふ。

是時太祖塔々兒を征す、王罕卽ち蔑兒乞を攻むる事前文六卷に在り、本紀に曰く、君困迫して來り歸す、時我れ哈丁里を過き諸部羊馬訾財を歷掠し盡く以て君に奉ず、半月ならざる間、君をして饑ゆる者は飽き瘠する者は肥にしむ、此れ大に君に功有るの三也、君我に告げず、往いて篾里乞を掠め大に獲て而して還る、未だ曾て毫髮を以て我に分たず、我れ以て意と爲さず、我れ朶魯班塔々兒哈答斤散只兀宏吉剌五部を征す、海東鷙鳥の鵝雁に於けるが如く、見て獲ざるなし獲れば則ち必ず君に敏す、此れ大に君に切あるの五也。

後又共に不亦魯里を追ふ。

古出古敦不亦魯里は故の乃蠻部長。

拜答剌黑別勒赤列地面に於て。

前文六卷巴亦荅剌黑別勒赤兒と作す。

可克斡兀撒卜剌黑と對陣す、汝ぢ夜營内又火を放ちて退く、彼の可克斡兀撒卜剌黑卽ち汝を襲ひ桑昆妻子百姓を都づて擄とす、又汝か帖列格禿の百姓一半を擄す、汝又救を我に求む、

我れ四傑をして汝ぢ桑昆の妻子百姓家畜を都べて汝に救與す、又曾知つて感して來る。

本紀に曰く若乃蠻の傾覆する所となるや我れ四將を遣し爾が民人を奪還し重ねて爾を國家に立つ、此れ大に君に切有るの四也。

今の何理由にて怪責する事ありや人をして說かくむべしと。

王罕此の言詀を聽き嘆息して曰く、帖木眞の兒子好し離すべからざるの道理あり、我れ已に離る、是に於て心內艱難す刀を以て小指を刺破し流血を小樺皮桶に盛り心に曰く、我れ若し帖木眞兒子彼を害さるを見る此の血に似たりと。

成吉思札木合に對して曰く、皇帝父親我を嫉惡し分離せしむ、前に每日誰れか早起するもの父親の馬乳を青鍾にて飲みたり我れ常に早起したるが爲めに嫉妒せり、今皇帝父親の青鍾を滿飲せんか費を待つ幾何、又阿勒壇忽察兒二人に對して曰く。

二人軍令を犯し太祖の罰する所と爲る、因つて叛し王罕に投す、

汝等兩人知らず何故に我を棄てんとす、忽察兒汝は是れ揑坤太子の子なり、初め洎達々汝を して皇帝と做さんとす汝曾つて肯んぜず、阿勒壇汝が父忽禿剌皇帝曾つて達々百姓を管す此に因り汝をして皇帝と做す汝又肯んずず上輩に在りて巴兒壇の子撒察台出あり。

案ずるに撒察は即ち撒察別乞前文一卷に薛扯別乞と作す台出と均しく合不勒台罕の長房

孫たり、其父は即ち忽禿黑禿王兒乞乃ち巴兒壇の姪孫にして巴兒壇の子に非ざる也、二人則ち巴兒の姪孫なり、此に巴兒壇子と言ふは蓋し是れ駁文なり。

彼の両亦皇帝たるを肯んぜず、汝衆人我をして皇帝たらしむ、我れ已むを得ずして做る。

阿勒壇等推戴の事四卷に見ゆ。

汝今我を離れて王罕の處に在り、汝ぢ好く伴と作る始め有りて終り無く人をして議論せしむるを休めよ、汝ぢ全く帖木眞に倚る、帖木眞無くんば即ち用ゆるに中らず、汝ぢ彼の二阿源頭守と好を得。

三河は土拉河鄂爾昆色楞格河を謂ふ也、此れ黑林の王罕居る所を指す、本紀此語を釵逃して云ふ、三河は祖宗肇基の地他人の所有と爲る母しと語意同じからず、若し太祖居る所を以て之を言へば則ち斡難河客魯漣河兀剌河三河也。

別人をして營盤を作さしむる勿れと。

王罕の黑林他日太祖之を得、是れを和林と爲す。

成吉思再び脫斡鄰の弟に曰く、我れ汝を呼んで弟となす理由前に屯必乃察剌孩飲忽。

海都次子也屯必乃の叔父と爲す。

二人原と擄し來りたる奴婢斡黑答と名づく彼の子を速別該と名づく、速別該の子を闊々出

乞兒撒安と名づく、闊闊出乞兒撒安の子を也該晃脫合兒と名づく、也該晃合兒の子即ち汝なり、汝は太祖宗以來の奴婢たり我れ汝を喚んで弟と做す理由此くの如し。

成吉思再び桑昆に對して曰く、我れ汝が父の義子たり、汝は實子たり、父親曾つて我等を以て同樣寵愛す、汝ぢ我が汝の先を攙すを恐れ我を疾思す、今父親の心に艱辛を受けしむる勿れ、早晩出入して愁悶を消すべし、汝ぢ舊と嫉妒したる心を除がざる如き、父の在世に皇帝たらんするには非ざるべし、故に心苦しみを受けしむ、若し人を差し我が處に來る時兩人を差して來らすべしと、成吉思此の語を以て阿兒孩合撒兒速格該者温に吩付く。

彼の兩人桑昆に對して言ふ、桑昆曰く、彼れ幾たびか曾つて皇帝父親を言ふ、而かも好く人を殺す老子たり、又幾たびか曾つて我れて安答たらんことを說くも而かも只脫黑脫阿の師翁たるを言ふ。

脫黑脫阿幾んど太祖の族を滅す故に桑昆昆祖之を惡むを知る、只桑昆を以て脫脫の師父と爲す也。

羊に續き回羊尾子に行く。

洪皓松漠紀聞に曰く、羊達靼に生る、者大さ驢の如し尾巨にして而して厚く扇に類す、脊より尾に至る或は重さ五斤、明蕭大亨夷俗紀に曰く、羊乳を取る子羊能く草を喫する俟ち

驅りて他所に至る、牝羊二匹を以て其頭を相對して之を縛し動かざらしめ人羊尾の後に從ひ之を取る、取り畢り始めて其縛を解き母子をして相聚らしむ也、此の話を以て之を秘史の此文に求むるに則ち兩羊の頭を縛するは即ち羊に續くの謂に似たり、羊尾の後に從つて乳を取るは即ち回羊尾子の謂に似たる也、以て太祖日に王罕を謀殺するを以て事と爲す、猶ほ人の羊乳を奪ふ如きに喩ふる也、明張燧千百年眼に曰く尾大掉はずと此れ喩言に非ずる也。西域に獸あり羯と曰ふ、尾身の半より大、車を以て尾を載するに非ざれば則ち行く可からず、元白湛淵羯を詠ずるの詩あり、羯尾大舟の如し堅車載せて起たず、此れ以て滅ぶるに掉はず彼れ以て死するに掉はずと。

此の言語の計量有り、是れ厮殺時の言語たり、汝ぢ必勒格別乞朶延兩人施蠜を以て立て馬を騙りて放ち肥ゑたるを得ば疑惑有る無しと、時に阿兒孩合撒兒王罕の處より回り來れり、速格該者温彼の妻子脫斡鄰の處に在るに回り曾つて回り來らず、阿兒孩合撒兒此語を成吉思に告ぐ。

成吉思即ち起つて去り巴勒渚納海子に行き住す。

此れ即ち四卷云ふ所の答闌巴勒主惕の地也。本紀に曰く帝既にして使を汪罕に遣す、遂に兵を宏吉剌別部溺兒斤に遁め以て行く、班朱尼河に至るに河水方に渾す、帝之を飲み以て

衆に誓ふ時、汪罕形勢盛強にして、帝微弱勝敗未だ知る可からず、衆頗る危懼す。凡そ河水を飲む者之を渾水を飲むと謂ふ、其曾つて艱難を同ふするを言ふ也。史文班朱尼即ち秘史巴渚納三字の對音、但し秘史太祖と汪罕の戰を敍するに卯温郷兒山を以て最惡と爲す、巴渚納の戰未だ其創を被らず、惟ふに前文四卷札木合と此地に戰ひ其推動する所と爲り哲列捏に退くと實は大敗を爲す、且つ太祖汪罕を詰責するの言已に統格黎河に在りて下營するを云ふ、夫の統格黎なる者は鄂勒昆河より色楞格河に入り而して北海に達するの水なり、明に是れ王罕に勝つの後東より西するの證豈に湛ひて東邊巴勒納戰場の理有らんや、元史誤つて哲列捏の役を以て之を汪罕に移す。

終に未だ汪罕と巴渚納の戰を爲さず、秘史前後の文考す可き也、班朱尼阿の役に至つては列傳に見ゆる一にして足らず是れ宜しく前後を尋覽し列して之を論ずべし、札八兒大者列傳曰く太祖克烈王汗と隙有り、一夕王汗兵を潛して來る、倉卒備を爲さず、衆軍大に潰ゆ、太祖從行備かに十九人札八兒與る焉班珠爾河に至り餱糧俱に盡く、一野馬北より來るに會す、諸王哈札爾之を射て殪す、河水を汲みて煮て之を啖ふ、太祖舉手天を仰で誓つて曰く、我をして大業を克定せしむる當さに諸人と甘苦を同じうすべしと、苟しくも此言を渝ゆ此水の如からんと、將士感泣せざる莫し、又速不台傳に曰く、太祖初め都を班朱納海

に建つと、即ち龍居河也、又士土哈傳に曰く世祖召見し之を慰諭して曰く、昔し太祖臣下と患難を同じうする者班朱河を飲み以て功を記す云云太祖王罕と巴諾納の戰を爲すを見るに足る、秘史發揮を爲さず頗る漏略を嫌ふ、速不台傳に據るに則ち班朱納海は即ち龍居海河龍古河は即ち驢朐河の對音、驢朐河は即ち克魯倫の異號此れを呼倫海子と爲す、必ずしも疑を致さず、且つ蒙古源流を以て之を証すべし、源流に曰く歳次戊午年三十七歳使を克哩葉特の翁汗に遣す、言ふ前に布爾德大哈屯を取る時之に事ふる父の如し、曾つて貂裘を以て獻と爲す、今朕願くは父子の如く相親まんと、翁汗信せず克哩葉特の衆を率ゐ兵を興して前み來る、迎へて鄂諾河下游呼倫具爾地方に戰ふ、遂に翁汗を降す、克哩葉特は即ち秘史の客列亦惕布爾德大哈屯は即ち孛兒帖兀眞なり、翁汗は即ち元史汪罕の對音、鄂諾河下游呼倫具爾は即ち斡難河下游呼倫湖なり亦即ち元史紀傳の班朱尼河は班珠爾河班朱納海〻び班朱河又即ち秘史の巴諾納海子但し元史敗ると言ひ秘史住すと言ひ戰ふと言はず。惟ふに源流戰勝つと言ふは稍齟齬あり、然れども其呼倫湖と爲すは疑ひ無き也。

其處に正に豁魯剌思種の搠斡思察罕等に遇ふ、曾つて厮殺せず。即ち投降す。

前文四卷豁羅剌の人諱亦兀兒あり來つて太祖に投ず、五卷豁羅剌思種人豁里歹合塔斤十一部落を以て札木合を立つるの事あり、此れと豁魯剌思は皆一族也。

又阿三と名づくる回回あり、汪古惕種の阿剌忽失的吉惕忽里の處より來る。

忽里は其官也。阿剌忽失的吉と名づく、乃ち汪古部種族也、太祖本紀に曰く、白達達部の主阿剌忽思此の阿剌忽失と對音、則ち此の汪古氏は乃ち白達々種也、汪古種は蓋し全國の地元文類に載す、馬祖常選馬公月合乃神道碑に云ふ、世雍古部族に屬し、靜州の天山に居る天山は古への居延海也、則ち汪古は即ち雍古の對音、其地居延海に在る也、此れ回回教人の阿三と名つくる居延海より來る也、其事を叙す所以の者他日太祖乃蠻を征す、乃蠻陽塔阿阿剌忽失を得んと欲し夾攻す、而して阿剌忽失塔陽に從はず、而して太祖に從ふ、蓋し阿三の力を得る多きに居る、後八卷塔陽を拒む張本也。

羯羊一千、白駝一個あり、額洒古湟河に順ひ紹鼠青鼠を易換す。

額洒古湟河則ち下游は今の黑龍江の地也、契丹國志に曰く、女眞世混同江の東山に居る乃ち鴨綠水の源地山林を饒る、人參密蠟北珠を土產とす、獸は青鼠貂鼠を多しとす。

來つて巴泐渚納海子に至り羊を飲む時成吉思に遇ふ。

明何喬遠名山藏に曰く、洪武二十年撒馬兒罕國王帖木兒駝馬海東青を貢す藍將軍深く入りて殘胡を逐ふ撒馬兒罕捕魚兒海に、賈する者あり、盡く俘して以て歸る、上其眞を察し遣して之を還す、此によるに則ち回回地面の貿易今の關東に於ける者代つて其人有り、此

阿三なる者は亦其類也。

成吉思巴泐渚納海子に住す時弟合撒兒有り彼の妻子及び三子也古也松格禿忽を留めて王罕の處に在り。

太宗紀八年諸王野古に益都濟南二府を分賜す、戶口內撥賜す、憲宗紀二年諸王野古に命じて高麗を征す、當に即ち其人なり世祖紀大將也古に命じ大理、高祥を追ふとあり、又耶律留哥列傳睿宗其子石剌佐諸王也古を以て高麗を控制すと、又王珣傳に珣子榮祖諸王也忽に從ひ三韓の地を畧すと皆此人也、合撒兒妻子王罕に陷れらる當さに卯溫都兒の戰より斡闊台歸すと雖も而も合撒兒は則ち擄へらるゝ也。

身幾個の伴當を飲し走り出て來り成吉思を尋ぬ尋ねて合剌溫山に至る。

肯惕山の支脉也。

嶺に緣つて尋ぬぬゞも見ゐず、糧食に乏しく生牛の皮筋を喫す、行ひて巴泐渚納海子に至り成吉思を尋ふ見る、成吉思大に喜ぶ。

本紀に曰く、哈撒兒別れて哈剌渾山に居る、妻子汪罕の爲めに虜する所と爲る、幼子脫虎を挾して走る、糧絕え鳥卵を探ぐつて食と爲す、來つて班朱尼河上に會すと、即ち其事也相謀つて沼列歹種人合里兀答兒を差はす。

沼列歹は卽ち前文一卷の沼兀列亦氏、源宇端窊兒の妾子沼亦列歹に出づ本紀族人照烈部有り沼列と對音と爲す也。

兀良合歹槿人察兀兒罕二人合撒兒の使臣と做り去つて王罕に對して曰く(反間の策を用ゆる也)我兄弟形影望むを得ず、道路尋ねて見ず、彼を喚べば彼れ又聽かず、夜間星を看、土に枕して睡る、我か妻子父親皇帝の處に在り、若し一人の倚るべき人を差して來らんか我れ父親の許に往かんと。

本紀に曰く帝軍を斡難河源に移す、謀つて汪罕を攻む、復二使を遣て僞つて哈撒兒の言と爲して曰く我か兄太子今既に在る所を知らす、我の妻孥んで王所に在り、縱へ我れ往かんと欲するも安んぞ之を得んや、王倘し我か前愆を棄て我が舊好を念はば卽ち手を束ねて來り歸せんと。

成吉思又使臣に對して曰く、汝去れば俺卽ちち起身せん、汝ぢ回る時只客魯漣河の阿兒合勒苟吉地面に行き約會せよと、卽ち主兒扯歹、阿兒孩。

卽ち阿兒孩合撒兒、太祖の弟昜混に與ふるを以て故に三字を刪る。

兩人を頭哨と做し客魯漣河の阿兒合勒苟地面に下營す、合里兀答兒察忽兒罕二人王罕の處に到り其到る所以を說く、王罕正に會撒帳を立て筵會を做す、合里兀答の言ふを聽き畢るや

王罕曰く果して然るかと合撒兒をして來らしめ、卽ち倚仗の人亦禿兒堅同合里兀答兒等を差して行かしむ

本紀に曰く汪罕之を信じ因つて人を遣し二使に隨つて來らしむ、皮囊を以て血を盛り之と盟ふ

原と約會の處に到るに及び亦禿兒堅下營の形影甚だ多きを望み見卽ち回り去る、合里兀答兒快馬之を追ふも敢へて擊せず、前面察忽兒罕に馬鈍る、後より箭を射る亦禿兒堅騎する馬の臀に中る、是に於て亦禿兒堅を捕へ太祖の處に至り送つて合撒兒に與へ殺さしむ。

合里兀答兒等太祖に對して曰く王罕隄防せず、今金撒帳を起て筵會を做す。俺れ日夜兼行して往いて彼を掩襲せんと太祖是とし、遂に主兒扯歹阿兒孩兩個をして頭△と做し日夜兼行し者折額兒温都兒山の折兒合不赤孫地面の日子に到る。

前文六卷者額兒温都兒山と作す。

王罕を圍み厮殺すること三晝夜第三日に至り抵當する能はず、方に投降す。

本紀に曰く至るに及び卽ち二使を以て向導と爲し、軍士をして敕を銜んで夜折折運都山に趨く其意はざるに出で汪罕を襲ひ之を敗る、盡く克烈部衆を降す。

王罕父子何處より走出するやを知らず。

本紀に曰く汪罕亦剌合と身を挺して遁れ去る、汪罕嘆じて曰く、我れ吾兒の爲に誤る所と爲る、

此の厮殺の中合答黑把阿禿兒と云ふ者あり。

合答黑は即ち前文の合答黑吉也、只兒斤氏に出づ其把阿禿兒と稱するは猶ほ前文の勇士の如き也

曰く我れ正に汝ぢを捕へ去りて殺すに忍びず、故に戰ふ者三日彼をして遠く走らしむ、我をして死せしめんか即ち死せん、恩賜活かしめんか氣力を出さんと、太祖曰く彼の主人を業つるを肯んせず、遠く逃さしめ獨り我れと厮殺す、豈是れ丈夫たらざらん以て做伴となすべしと。遂に殺さず、彼をして一百人を飲せしめ忽亦勒荅兒の妻子を與へ永遠奴婢と做して使喚せしむ。

其忽亦勒荅兒家をして使喚せしむるは所謂賞賜を受くる也、合荅黑を以て之に賞與する者其忠誠を以て上を衛り忽亦勒荅兒家をして其死力を得せしむる故也。

因つて初め忽亦勒荅兒先づ曰く斯殺せんか爲めに彼の子孫をして常に請ふて孤寡の賞賜を受くと。

元史畏荅兒本傳に曰く太祖克烈王罕と對陣す、畏荅兒腦流矢中る、創甚し、帝親しく傳す

るに善藥を以てす、帳中に留む、卒す、王罕帝を滅ぼすに絕び其將只里吉實抗長答兒を以て乃ち只里吉古實民百戶を分ち其子に隷す、且つ世々歲賜繩ろず、仍令して忙兀人民の散亡する者を收完せしむ、太宗其功を思ひ、復た北方萬戶を以て其子忙哥を封じ郡王と爲す、歲丙甲忽都大に漢民を料り城邑を分ちて以て功臣を封ず、忙哥に泰安州民萬戶を授く、帝曰く畏答兒戰功多し、其に二萬戶を增封し十功臣と同じく諸侯と爲す。

元朝祕史卷八

斯くて客列亦惕百姓屈下し各々に分る、孫勒都歹種人塔孩把阿禿兒。

即ち前文四卷の塔乞也、又四卷に亦塔孩と作す、又塔孩と作す。

太祖の處に恩あるに因り。

前文四卷答孩、連客該と王罕の處に往き即位功あるを告ぐ。

一百只兒斤の百姓を與ふ。

本と王罕勇士合答黑吉管する所也、後文九卷此百姓を以て豁兒赤に與へ萬戶と作す、阿答兒乞等百姓と稱する即ち此れなり。

再び王罕の弟札合敢不二女有り、長女亦巴合と名づく太祖自ら娶る。

後文十卷阿失黑二百人を以て從嫁を爲す、其後亦巴合を以て主兒扯歹に賜ふ、元史后妃表を按ずるに凡う位號三十九人亦巴合無し、則ち亦巴合未だ位號を正しうせざる時即ち已に主兒扯歹に賜ふ、故に后妃表に在り、歲賜錄に據るに此人無し。

次女莎兒合黑塔泥と名づく、拖雷に與ふ。

元史睿宗列傳に曰く、睿宗景襄皇帝諱は拖雷太祖第四子太宗の母弟也、元史語解及源流均

しく圖類と作す、又元史卓沁台列傳に曰く、乃蠻兒乞台を滅ぼし兵を合せて來り侵す、諸都陰に之に附する者あり、た祖兵率を領して至るを虞れす、諸部潰ゑ去る、勝に乘じて之を敗る、卓沁台其王札哈堅普及二女を俘とし以て歸る、諸部悉く平ぐ、札哈堅普と盟つて而して之に歸す、史札哈堅普と稱す、即ち札合敢不の對音、然る本紀と又雜出す、紀に云ふ克烈部札阿紺孛來り歸す、札阿紺孛は部長汪罕の弟也、札阿紺孛は即ち札合敢不、此の二女卓沁傳に據るに則ち俘となる、秘史に據るに來り降る、當さに是れ王罕敗るゝの後勢窮し女を獻じて盟を求むる耳。

此れか爲めに札合敢不の百姓曾つて虜せしめず。

太祖再び巴歹乞失里黑二人に王罕の金撒帳並に陳金器皿を鋪する人及器皿を管する人を盡く與ふ。

又客列亦汪豁眞姓の人。

汪豁眞姓は即ち汪古惕也、前文七卷及本卷後文均しく汪古惕種語あり。

を以て彼れ両人に與へて宿衛と做し弓箭を帶ばしむ飲酒の時又彼に盞を喝むを許す。

輟耕錄を按ずるに曰く天子凡う宴饗す、一人酒觴を執つて右階に立つ、一人拍板を執つて左階に立つ、板てを執る者抑揚其聲贊して、斡脫と曰ふ觴を執る者其聲の如く之に和す、

打彌と曰ふ、則ち板を執る者節一板にして從ふ而して王侯卿相合坐する者は坐し合立する者は立つ、是に於て衆樂皆作す、然る後酒を進めて上前に詣る、上飲み畢つて觴を授づく、衆樂皆止む、別に曲を奏して以て陪位の官に飲せしむ、之を喝盞と謂ふ、蓋し金の源舊禮を沿襲し今に至つて廢れず、諸王大臣賜命有るに非ざれば敢へて用ひず、斡脫打彌彼れが中の方言未だ其意を考するに暇あらず。

即ち子孫に至る迄行ひ自在快活ならしむ、厮殺の時、掠め得たる財物打獵の時狩り得たる野獸都べて人に分つを許さず、盡く彼れ自ら要す。

二人は本也客扯連の奴婢故に屬籍を豁除する也。

太祖又曰く一は則ち彼れ二人我性命を救ひたる爲め一は則ち長生天護助の爲め客列亦惕種人を以て屈卜す、得て大位子裏に至り久しく坐する後我の子孫此の恩あある道理を常に和らしむ、是に於て客列亦惕諸姓を以て都べて衆伴當に分ち與ふ。

元史兵志喀喇衛有り、喀喇は則ち客列の對音、蓋し客列亦部降人兵籍に編入するに因りて也。

其冬則ち阿不只阿闊迭格兒地面に在りて住す。

下文阿卜只合闊帖兒格より起つて去り、客勒帖帖該合荅地に行く、則ち此れ王羊黑林附近の地たるを知る、此に暫時駐屯し冬を過す、上文四卷迭列禿口子有り、六卷亦帖列格禿口

子を云ふ、則はち此文迭格兒下文の帖兒格と皆山の口子也、山を阿不只阿闕と名づく其山口坦平屯紮すべし矣。

王罕桑昆父子二人罄身走つて的的克撒合勒地面涅坤水處に至る。

元史宗宗紀を案ずるに九年春揭揭察合の澤に獵す憲宗紀三年帝怯蹇乂罕の地に獵す、元史語解此兩文に於て均しく改めて齊々克察罕と爲す、是の兩地實は一名、又皆此の的的克撒合撒合と對音、此地既に涅坤水有り則ち當さに王罕居る所黑林の西に在り、傍ら鄂勒昆河の水處也、太祖往日斡難河に從ひ王罕黑林に到る、土兀剌河と言ふに止まり、鄂勒昆河と言はず、此れ必ず一度土拉河を渡らば更に鄂勒昆河を渡る煩なき故耳此次太祖王罕を襲破する東より來る王罕父子敗走西を望んで遁れ當に鄂勒昆河を渡る此河の東的的克撒合勒と名づくる地あり、按ずるに元太宗宮殿を和林に建つる以後兩朝皆當に齊々克察罕に獵す、此地和林の西に在るを知る也、涅坤水は即ち鄂勒昆河の對音、水道提綱に曰く鄂勒昆河原に有り一つは杭愛山尾南麓に出づ偏西十四度五分極高四十七度東南流して姑洛河と曰ふ、曲曲二百里南源西より來り會す、南源鄂爾吉圖都闌喀喇山に出づ、亦威者伊圖と作す、都闌喀喇山は即ち大黑山杭愛山の南八十餘里に在り、源又一有り北麓より東南流して阿木勒稽烏林塔河と曰ふ、西十四度六分極四十六度八分亦烏里雅思他河と作す、此

地元時和林に屬す、烏林烏里は皆和林音の轉なるかを疑ふ也、一は東麓より東流百里にして合す、又東白餘里姑洛河と會す、始めて鄂勒昆と曰ふ。

王罕行いて渴す、去りて水を飲む、乃蠻哨望の人豁里速別赤に捕へらる、自ら曰く我れは王罕なりと、哨望の人信せず、彼を殺す。

本紀に曰く汪罕出で走る、路乃蠻部滌に逢ふ、其殺す所と爲ると、案ずるに汪罕乃蠻と戰ひ敗るる後蓋し色蠻楞格河以西皆乃蠻の奪ふ所と爲る其始め太祖と乃蠻を攻むる時今の科布多界に至る迄皆汪罕の地たり、故に數千里梗阻無し、此時鄂勒昆河に在り即ち乃蠻哨望人の殺すところと爲る職として此故也。

桑昆此時外に在り、曾つて入去せず、此れを以て就ち川勒地面に去る。

唐書に曰く貞觀十四年侯君集高昌を滅す、其地を以て西州と爲す、初め麴文泰唐兵起るを聞き曰く　唐我を去る七千里而して沙磧二千里に居る、地水草無く寒風刀の如く熱風燒くか如し、安んぞ大軍を致さん乎と、唐兵磧口に臨むに及び憂懼疾を發して卒す、子智盛紀出で降る、其地を以て口州と爲し、安西都護府と爲す、左屯衛將軍姜行本石に勒して功を紀す、按ずるに此碑今の哈密北の南山口內松樹塘上に在り、則ち沙磧二千里なる者即ち秘史の川勒なり矣、後文十五卷に云ふ、川勒地面水無し只野獸有りと、此れ桑昆渴を致す

所以也、本紀を以て之を考するに則ち川勒は當に是れ西夏の地なり。

川勒に至り桑昆伴宮闊闊出幷に其妻と共に水を尋ねて喫す。

即ち四養子の一也、舊札木合營に在りて得る所其後札木合に隨ふて去る、又王罕部下に在ずる故桑昆の伴當と爲る也、四養子は惟ふに孛羅兀勒四傑と成り次ぎには則ち失吉忽禿忽斷事官と爲り全國を平ぐ、古出亦太祖の弟斡赤斤に委付す、惟ふに濶々出終らず太祖の戮する所と爲る。

野馬蠅斷に咬まるを見るに因り。

劉郁西使記して曰く蟲あり蛛の如し、毒人に中れば則ち渴を煩ふ、水を飲めば立ろに死す、陳誠使西域記に曰く、塞藍夏間草上黑蜘蛛甚小なるを生ず、人を噬すれば徧體皆痛む、六畜場けらるゝ者多く死すと。

桑昆馬をトり馬を闊闊出に持たしめ潛かに往いて中間を射んと欲し、闊々出に馬を牽ねて走らる。

本紀に曰く亦剌合西夏に走る、日に剽掠し以て自ら資す、既にして亦攻むる所と爲り走つて甽茲國に至る國主兵を以て之を討殺す、按ずるに甽茲國は今の庫車也。

其妻曰く前には好衣服好茶飯を曾つて汝ぢに與へて喫穿す、今正に主上如何にして斯くの

如く棄つるや、即ち留るべらずと、闊々出曰く汝ち善からず、桑昆に嫁せんとするに非ざるべしと其妻曰く人婦人を狗面皮と言ふと雖も。

越語に曰く䰟と雖も然ども人面なる哉吾猶ほ禽獸の如き也、婦人人に從ひ節義を尙ばず故に此の謗あり。

汝ぢ此の金盂子を以て彼に與へ水を尋ねて喫すと、婦闊闊出遂に金盂子を留め妻と同伴太祖の處に來り桑昆を棄てたる理由を都べて云へり。

元史閔本傳に曰く始祖哈里巴を拜住し河東公に封じ王罕に事ふ、大祖王汗を取り諸部落を收む、數十騎を引いて西北方に馳す、太祖八をして之を追問して曰く昔し皇帝と同じく王汗に事ふ、王汗今已に滅ぶ、之れか爲めに仇を報いんと欲すれば則ち逆天不祥改めて帝に事へんと欲すれば則ち忍びざる所あり、故に之を遠地に避け以て我生を沒する耳、元史類編不忽求傳に曰く祖海藍伯嘗つて烈克可部汗に事ふ、克烈滅び太祖使を遣して之を招く、答へて曰く昔帝同じく可汗に事ふ、今既に亡ぶ、仇を報せんと欲すれば則ち帝は乃ち天命、改めて帝に事へんと欲すれば則ち心忍びざる所有りと、遂に去りて之く所を知る莫し、海藍伯は即ち里哈巴の對音也桑昆哈里巴有りて用いず、乃ち闊々出て伍を爲す、安んぞ得て亡びざらん哉。

太祖曰く此等の人如何にして彼を伴と做すと、遂に彼が妻を賞賜し闊々出を殺す。

元史求赤台傳に曰く、求赤台の子怯台、怯台の子端眞拔都兒太宗の時亦剌哈台と戰ひ勝つ、帝即ち亦剌哈か妻を以て之に賜ふ、按ずるに太宗は當さに太祖と作す、若し太宗則ち未だ亦剌哈と戰はざれば亦剌哈は卽ち祕史の桑昆也、葢し闊々出の妻を賞する桑昆の妻を以て主兒扯歹の孫に配すると同時なり矣、王罕旣に亡び太祖の國是れより乃蠻と鄰す。

乃蠻皇帝塔陽の母古兒別速曰く

元史地理志に曰く、吉利吉思は初め漢地の女四十人を以て阿速の男と結婚す、此義を取りて以て其地に名づく、南大部を去る萬有餘里、相傳ふ乃蠻部始めて此に居ると、長一千四百里度之に半す、謙河其中を經西北流す、又西南水あり阿浦と曰ふ、東北水有り、王須と曰ふ皆巨浸也、謙に會し昻可剌に注ぎ北して海に入る、俗に諸國と異る、其語言畏吾兒て同じ、帳を廬して而して居る、水草に隨ふて畜牧す、頗る田作を知る、雪に遇へば則ち木馬に跨り獵を逐ふ、土產として馬白黑海東青あり、史文を按ずるに乃蠻未だ南遷せざるの地を叙す、今俄羅斯色楞格河の西岸昻可剌河の上游に在り、此れ乃蠻始め居る所、若し是時乃蠻庭を建つ今の阿爾泰山に在り王罕敗後に乘じ境を擴めて招愛に至る、今土謝圖汗三音諾顏部皆往日王罕の地而して是時已に乃蠻之を得、故に前卷乃蠻と戰ふ科布多を以て戰

塲と爲す、此の時乃蠻と戰ふ、反つて東數千里に在り、而して抗愛を以て戰塲と爲す也、魏默深く其故を明にせざる故妄りに元代の和林乃ち乃蠻の王庭たるを疑ふ、葢し秘史を讀んで熟せざる故に其線起する所を知らざる耳、塔陽は元史に太陽罕と作す、源流に達延汗と作す、乃蠻王亦難察の子也、亦難察死し其子塔陽嗣ひ汗と爲る。

王罕は是れ前の老皇帝たり。

此の言に據るに王罕盛時乃蠻嘗つて役屬たるを知る。

彼の頭を取り來り看るに果して是なり彼を祭祀し人を差して豁里速別赤處に往く頭を割りて來るに王罕たるを知る、是に於て樂器を動かして彼を祀る、祭る時王罕の頭笑ふ、塔陽笑を見て不祥と爲し卽ち其頭を踏み碎く、可克薛兀撒卜と名づくる人あり曰く。

前に王罕桑昆妻子百姓を擄する者也。

汝は死人の頭を割り來り踏碎せり今狗の吠ゆる聲又好からず、前に汝ぢ亦難察必勒格皇帝曾つて曰く。

前文察阿孩領忽の子想昆必勒格有り、又桑昆必勒格別乞に分付し族纛を立て〻起る、則ち必勒格は貝勒の對音也。

我れ老いたり此の婦人年少し。

亦難察既に其妻年少きを稱す則ち古兒別速は塔陽の後母なり。

兒子塔陽又柔弱是れ我が神に禱つて生れ來りしもの、久しき後恐らくは我が多くの百姓を守り得ず、況んや今狗の吠ゆる聲敗音あり。

外蕃獵犬を畜ふるを喜ぶ、每に獵獲あれば犬必ず先づ知る、蓋し氣の先を得る者、則ち鳴聲或嘯殺衷促、惟ふに彼地能く之を驗す。

夫人古兒別速行ふところの法度嚴峻、我が塔陽皇帝又柔弱、飛放打獵を除くの外別に技能心性なしと

元史兵志曰く元利御位より諸王に及び皆昔室赤あり蓋し鷹人也、冬春の交親しく近郊に幸し鷹隼を縱つて搏擊す以て遊豫を爲す、之を飛放と謂ふ、故に鷹房捕獵皆司存なり。

再び塔陽曰く此の東邊聯か達々あり、前に老王罕。

此語及び後文によるに是れ達達の氣運ならざるなし、則ち專ら蒙古を以て韃靼と爲す、乃蠻は蓋し韃靼類に非ず、王罕已に死し桑昆西夏に逃る亦必ず號を潛ゆ、故に稱して老王罕と曰ふ。

彼れ敢て皇帝たらんとす然れども天上只一個の日月あり地土如何にして二個の主人あらん。

天に二日無し土二王無し漠北亦此語あり。

今我等行きて彼の達達を取らんと、其母古兒別速曰く彼の達達百姓氣息惙し衣服黑暗、取り來つて何をか做さん若し容姿優れたる婦女あらば尙ほ洗浴せしむべく牛羊の乳も搾らすべしと中に塔陽有り曰く此事何んぞ難からん我等往きて彼の弓箭を奪ひ來らんと。

可克辭兀撒卜刺黑塔陽の言語を聽き歎息して曰く、汝ぢ大話を言ふべからず、此語汝ぢ再び言ふを休めよと、塔陽聽かず、遂に脫兒必塔失を差して使臣と做し往いて汪古惕種の主阿刺忽失的吉惕忽里に對して曰く。

汪古惕部は舊と客列亦惕部に屬す、上文客列亦惕汪豁眞姓の人を巴歹乞失里二人に與へ宿衞と做すと云ふは是也、忽里は猶ほ部長と曰ふ如き也、元文類二十三閻復扶駙馬高唐忠獻王闊里思碑あり曰く始祖卜古部人世部長たり則ち此部乃ち卜國の子孫也、輟耕錄氏族篇色目三十一種有り而して雍古歹其一に居る、則ち蒙古族類に非ざる也、此時王罕已に滅ぶ而して汪古氏宗族來り降る、此の忽里の官名を阿刺忽失的吉と曰ふ、太祖仍ほ其に命じ彼部族を領する也、故に汪古惕種の主と曰ふ、忽里は部長の名たるを知る、命太祖を封じて札兀忽里と爲す故に忽里は是れ蒙古語の部長の名たるを知る、本紀に曰く乃蠻部長太陽罕使を遣して白達々部主阿刺忽思を謀るとあるは即ち此事也。

此の東邊に些しく達々あり每に汝が右手を做す。

客列亦部降人を煽動し內應せしめ以て之を助けんと背ふ。

我れ此處より起程し彼の弓箭を奪ふ可しと、阿剌忽失的吉惕忽里答へて曰く、我れ汝が右手を做すを得ず、即ち人をして往いて太祖に對して曰く、乃蠻の塔陽來つて汝ぢか弓箭を奪はんとす我れをして右手と做さしめんとするも我れ曾つて肯從せず、我れ今汝に告ぐ若し隄防せずんば恐らくは來つて汝が弓箭を奪はんと。

元文類二十三閭復馬駙高唐王闊里吉思碑に即ち阿剌忽失的吉惕忽里の曾孫なるを云ふ、碑に云ふ亡金山を塹して界と爲す以て南北を限る阿剌兀思惕吉忽里一軍其衝を扼す、太祖聖武皇帝朔方に起り、諸部を併呑す、西北に國あり帶陽罕と曰ふ、卓忽難を使し來りて謂つて曰く天に二日無し民に二王無し、汝ぢ能く吾が右臂たらんか朔方定むるに難がらざる也と、阿剌兀思太祖の終に大事を成すを料り意を決して之に歸す、即ち麾下の將禿里必荅思を遣し酒六榼を齎し卓忽難を太祖に送り告ぐるに帶陽の護を以てす時に朔方未だ酒醴有らず、太祖祭つて而して後飲む、爵を舉ぐる者三、還酸するに馬二千蹄年二千角を以てす、上忠武に詔して云ふ、吾れ異日天下有らば奚んぞ汝に報いざらん天實に之を鑒すと且つ帶陽を同征し某地に會するを約す、忠武期に先ちて至る、既にして帶陽を歸め中原

を下して復た嚮導と爲す、南界垣を出で昌めて鎭守に居る、疇昔異議害する所と爲り詔りて高唐忠武王に追封す。

此時太祖正に帖篾客額兒地面に在りて圍獵す。

本紀に帖麥垓川と作す、天史水を以て之に名づくる也、圍獵は必ず山に在り秘史山を以て之に名づくる也

此話を知り即ち圍獵の處に衆人の商量ず、多く云ふ馬瘦す如何にせんと、斡惕赤斤曰く。

即ち太祖の弟帖木格也、以後均しく斡赤斤と稱するに止む。

汝ぢ何故に馬瘦するを推辭す、我が馬即ち肥ゆ、既に此等の言を聽く如何にしてか坐し居るを得んと

本紀に曰く皇弟斡赤斤曰く事之を斷ずる早きに在るべし何人ぞ馬瘦するを以て辭て爲すべげんて。

別勒古台又曰く若し生る、時人に弓箭を奪はんか何事も濟し、男子死んる弓箭と一處豈好からず、今乃蠻其國大民衆さを恃み敢て大言を發す、我此に乘じ彼の弓箭を奪ふ何んぞ難からんと。

本紀に曰く別里古台亦曰く、乃蠻我弓矢を奪はんと欲す是れ我れを小とする也、義當さに

同じく死すべし、彼其國大なるを恃み而して言誇る、苟くも其不備に乘じて之を改む切當に成すべき也。

我等經かんか彼れ馬群多し必ず安然留まるべし、房屋空しくすれば百姓必ず皆逃れて山林に入らん我等今即ち馬に上るべし

別勒古台曰く、成吉思の思曰く是れ圍獵の處より回り來り阿卜只合闊帖兒格地面に去ると。去冬より阿不只阿闊迭格兒に任りて住す、今此地より起營して去る、文異むと雖も實は一地、也帖兒格は是れ此山の口子なり矣

合勒合阿斡兒訥兀地の客勒帖該合荅に行き下營す。

合勃合阿斡兒訥兀は前文七卷忽亦勒荅兒を葬る處本紀に曰く、帝建或誰山に駐兵すと建或該は即ち客帖該の對音合荅は山也、山を客勒帖該と名づく其地合勃合河の上に在り、蓋て今の喀爾喀河南岸是れ其處

自己の軍馬を數へ。

元史兵志に云ふ國初典兵の官兵數の多寡を視て爵秩崇卑を爲す。

千百牌子頭を立つ。

元史兵志に曰く其法家男子有り十五以上七十以下衆寡なり、是く僉して兵と爲す、十人を

一牌と爲し牌頭を設く、上馬則ち戰鬪に備へ下馬則ち屯聚牧養す、萬夫に長ずる者を萬戸と爲す、千夫に長ずる者を千戸と爲す、百夫に長ずる者を百戸と爲す。

六等の扯兒必官を設く。

扯兒必は宿衛官也、一に闊里必と作す、元史伯八兒列傳を見るに一口闊利必と作す、西遊記後文十一卷を見るに亦扯兒賓と作す、元史兵志に曰く宿衛は天子の禁兵也、太祖の時に方り木華黎赤老温博爾忽博雨求を以て四怯薛と爲す、怯薛歹分番宿衛を領す、夫の槖鞬に屬し宮禁に列するは宿衛の事也、之を大朝會に用ゆ、則ち之を圍宿軍と謂ふ、之を大祭祀に用ゆ則ち之を儀仗軍と謂ふ、車駕巡幸に之を用ゆ則はち扈從軍と曰ふ、帑藏を守護すれば則はち看守軍と曰ふ、或は夜以て非常を警しむ則はち巡羅軍時と爲す、或は歲漕京師に至る之を用ゐて以て彈壓す則はち鎮遏軍と爲す、六等は即ち之れを指すに似たり。

都べてを委付し又八十箇の宿衛人七十個の散班を設く、其護衛を選する時千百戸幷に自身人內子弟技能有り身材好き者を之に充つ。

輟耕錄に曰く國朝鎮殿將軍身軀長大異常なる者を募選し之に充つ、凡り請給する所有れば名づけて大漢衣糧と曰ふ、年五十を過ぐれば方に出官を許す、兵志に曰く凡り怯薛長の子孫ぞは天子より親信すゑ所或は宰相より薦舉する所或は其次序を以て當て爲す所即ち

其職を襲ひ以て環衛を掌る其官卑しと雖論ずる勿き也、年勞既に久しきに及び則ち遂に擢んで、一品官と爲る。

又阿兒孩合撒兒をして一千の勇士を選び管せしむ。

忽亦勒荅兒死する後遂に阿兒孩を以て忙忽惕を代飲す。

如し厮殺の時則ち前に在らしむ、平時卽ち護衛と做す斡歌列扯兒必。

即ち孛斡兒出の弟斡歌連。

忽都思合勒潺と。

巴魯剌氏忽必來と同族。

七十個の散班を以て一同管す。

成吉思再び曰く弓箭を帶ぶ人幷に散班護衛廚子。

元史兵志に曰く侍衛の弓矢を帶ぶる者を闊端赤と曰ふ、蒙韃備錄に曰く左右に在りて弓矢を帶び執待驍勇なる者を護衛と曰ふ、兵志に曰く親しく飪を烹以て上に奉り飲食する者を博爾赤と曰ふ。

把門人等

兵志に曰く闈を司る者を八剌哈赤と云ふ。

日中入班せしめ日落つる時管する所の事物を宿衛に交付し出で宿す者し馬を管する者は馬を守り。

兵志に曰く車馬を典する者を兀剌赤莫倫赤と曰ふ。

宿衛の房子の周圍に宿す、門を守る者交替門口に立つ、次日に至り拾陽の時卽ち入りり來て自己の事物を管す、三日毎に一次交換す。

兵志に曰く凡り宿衛三日毎に一たび更ふ、申酉戌日博爾忽之を領し弟一怯薛と爲る、亥子丑日博爾求之を領し第二怯薛と爲る、寅卯辰日木華黎之を領し第三怯薛と爲る、己午未日赤老溫之を領し第四怯薛と爲る。

彼の千百戸を管する扯兒必等亦各委付す。

鼠兒年四月十六日成吉思旗纛を祭る、去つて乃蠻を征す、客魯連河を逆つて行く、者別忽必をして來らしめ二人を頭哨と做す、撒阿里客額兒地面に至り乃蠻に遇ふ康合兒合山頭に在りて哨望す。

本紀に曰く太陽罕、按台に至り沆海山に營す、今案するに按台は卽ち阿爾泰山の對音今之を杭愛山と謂ふ者也、水道提綱に曰く西北諸山皆阿爾泰山を以て祖と爲す、支峯北漠に綿亘たり、東は杭愛と爲し色楞格鄂爾渾諸河在り、東南挺して肯特と爲り大興安と爲る、黑

龍江克魯倫諸水あり抗愛は即ち康合の對音也、然るに抗愛二字又即ち古來、瀚海二字の對音漢書瀚海と稱す、又大幕と稱す、漢書注瀚海を謂ふて沙漠と爲す、唐人沙磧と曰ふ、又之を莫賀延磧と謂ふ、又稱して大患鬼魅磧と爲す、五代沙陀と稱す、今之を戈壁と云ふ、復だ瀚海の目無し然るに唐代尚ほ瀚海都督府の設あり、即ち沙磧を以て古瀚海と爲す、相沿ふて之に名づけ已に漢語と成る、此一帶沙漠最高の山漠北亦沿稱して瀚海山と云ふ、北語轉變し遂に沆海と爲る、今又蒙古語を以て飜譯し則はち杭愛と爲る矣、元史沆海二字漢語に較近き也、外蕃輿地所在之有り、唐人の賀蘭山と稱する如き蕃語之に沿ふ、今阿拉善なり矣、漢書匈奴傳盧地遼史之に沿ふ名づけて臚朐河と曰ふ、元史則ち變じて龍居河と爲る、西遊記則ち、又變じて陰局河と爲る矣、凡り諸山水既に漢名を成し再び蕃語に轉じ遂に蕃語と同ふす、今史傳を考するに釐厥舊名碩學通材をして相說き以て解く、世博雅を多くす或は譏無し焉。

往來相逐ふ間破鞍の白馬に騎する人乃蠻人の爲めに捕へらる、曰く原來達達の馬瘦せたりと。

本紀に曰く時に我隊中羸馬驚き乃蠻營中に入る者有り、太陽罕之を見衆と謀つて曰く、蒙古の馬瘦弱此くの如し、今當さに其を誘ふて、深入せしめ然る後戰ひ之を捻ふべしと。

後太祖大軍撒阿里客額兒地面に至りて下營す、朶歹扯兒必成吉思に對して曰く。

我等人少なく遠きより來る、只此に於て牧馬し多く疑兵を設くべし、此を以て撒阿里客額兒地面に布滿し夜人をして五處に燒火せば、彼人多しと雖も其主輭弱曾て出外せず、必ず是れ驚疑せん、此くの如くにして則ち我馬已に飽かば然後彼の消望を追ひ直ちに大營に抵り其整へざるを擊たん必然勝つべしと、成吉思其言に從ふ、乃蠻哨望果して山頭より看て曰く達々少なしと云ふに如何にして燒火星の如く多きやと先に捕へたる人馬を送り去り塔陽に對して曰く、達々軍馬已に撒阿里客額兒地面に寒滿す、想ふに是れ每日增添するものなるべし只見る夜間燒火星の如く多しと。

哨望去る時塔陽正に康孩地面の合池兒水邊に在り。

康孩は即ち上文の康合兒合山今の抗愛山の對音、合池兒水は今の阿叉河の對音也水道提綱に曰く色楞格河嗒京嗒西北拾愛山頂の西南大幹諸山より源を發す、東北流し又東す、曲曲百數十里阿叉河有り南呼普蘇古兒山の西北麓より東北流し來つて之に入る、北岍山有り、即ち元時和林上都の地たるを疑ふ、山水迴合西十四度一二分極四十九度三分稱する所の阿叉河當に即ち合池兒水也。

此の言詑を聽き人をして彼の子古出魯克に言はしめて曰く。

本紀太陽罕の子罕屈出律罕は即ち此の古出魯克の對音遼史東祚本紀に曰く乃蠻の子屈出律即ち乃蠻塔陽罕の子なりと、又元史抄思傳に曰く乃蠻其先泰陽部主爲り。

祖曲書律父敞温則ち又古出魯三字を以て曲書律と爲す。

達達馬瘦するに燒火星の如く多し其人必ず衆し人曾つて曰ふ達達剛硬眼上刺呵不轉睛（猶ほ目逃さずと云ふか如し）腮上刺阿不躲避（猶ほ膚撓まずと云ふか如し）今若し彼と兵を連ね彼必ず解き離し達達の馬瘦すると云ふにより我等の百姓を起たしめ金山を越ゑ。

金山は即ち前文六卷の阿勒台山也、亦阿爾泰と作す又阿勒坦と作す西域水道記に曰く漠北大山阿勒頂坦山と曰ふ、譯して金山と言ふ也、山頂極四十度七分西二十二度二分其尾極四十六度五分西二十度四分西遊記に曰く大山に傍して西行す鎮海相公云ふ乃滿國王亦曾つて此に在り山精の惑はす所と爲り食するに佳饌を以てす西南に行く約二日、復東南大山を過ぎ大峽を經中秋日金山東北に抵る、其山高大深谷長坂車行く能はず、三太子出軍し始めて其路を闢く、乃ち百騎に命じて挽繩懸轅以て上る、輪を縛して以て下る、約行く四程連ねて五嶺を度り南山前に出で河に臨んで止泊す

軍馬を整搠し彼を誘引して行き、金山に至るに及び彼の瘦馬疲れ我か肥馬正に好し然る後復た回り彼と厮殺せば必ず勝つべしと、古出魯克此語を聽き曰く彼の婦人の如き塔陽又怕る達達多く何處より來る、多半札木合と一同此に有る在り。

謂ふ韃靼の族札木合と各其半を分つ、時に札木合敗る後王罕に投奔す、王罕敗る後又乃蠻に投ず故に泰赤烏人有る也。

我父塔陽孕婦更衣の處牛犢草を喫する處都べて曾つて到らず、今怕る此等の語を以て使臣をして言はしむ、塔陽其兒子の己を婦人と比するを聽き曰く、有力有勇の古出魯克厮殺の時此等の勇弱る勿れと、其臣豁里速別赤曰く。

汝ぢが父難察必勒格前に敵陣に臨む時男子の脊背馬の後胯曾つて見せしめず。

進むありて退く無きを言ふ、故に馬尾人背敵人をして之を見せしず。

今汝ぢ早くも怕る、早く汝ぢか此の如きを知る、汝ぢが母古兒別速は婦人と雖も軍を管し倒る、惜む可し、可克薛兀撒と剌黑老子。

乃蠻名將嘗つて、王罕桑昆妻子を襲擄する者也、戰敗則ち死す、故に惜むべしと曰ふ。

我軍の法度如何にも怠慢なり達達の氣運來りしには非ざるか。

達達は太祖を謂ふ也、塔陽恇怯必ず敗るを言ふ、豈天命歸する有るに非ざる也。

歎息の語畢りて馬上箭筒を著けて去る。

秘史に豁里速別赤と言ふ。

塔陽此語を聽き怒つて曰く人死するの性命辛苦の身軀都べて同じ、汝ち此の如く言ふ、我等迎へて彼れと厮殺せんと、遂に塔朱兒河に順ふて行く。

會典圖說曰く塔米爾河中左末旗東南山に出づ、東流南北數水を合し右翼中右旗を徑、察罕鄂倫河其西山に出づ、東北流して來り會す、又東額魯特前旗を經土謝圖汗部界に入り、鄂爾坤河に入る、水道提綱に曰く他米(原文一貫缺)

塔陽問ふ、彼の追ひ來るもつ狼の如し、群羊を以て直ちに追ふて圈內に至る、是れ如何人の人と札木合曰く是れ我が帖木眞安答なり、人肉を用ひて養ふたる四個の狗曾つて鐵索を以て擊ぐ、彼の狗銅額鑒齒、錐舌鐵心鐶刀を用ひて馬鞭と做し露を飲んで風に嘶く、厮殺の時人肉を喫ふ、今鐵索を放つ、垂涎して喜び來る也と、四狗は是れ者別、忽必來、者勤篾、速別額台四人なり、塔陽曰く然るが此の下等人に遠ざかるべしと遂に退去し山に跨りて立つ、又問ふ彼の後に來る軍乳を喫ふて飽きたる、馬狗の彼の母を繞り喜び來る如きは誰ぞと札木合曰く彼れは是れ槍刀有るの男子を殺したる衣服を剝脫したる兀魯兀惕忙忽惕二種人なり、塔陽曰く既に此の如し此の下等人より遠く離るべしと又命して山上に去りて立つ、又問ふ、隨後食を貪る鷹の如きもの來るは誰ぞと、札木合曰く是れ我が帖木眞安荅也渾身鐵甲を穿ち食を貪る鷹の如くにして來る也汝ぢ見よ汝ぢ曾つて曰く若し達達を見る時小羖羝羔兒の如

く蹄皮も亦留めずと。

洪皓松漠紀聞曰く北羊角ある者百に二三無し、味極めて珍善、牧者每群必ず羖羝羊數頭を置く、其勇に仗りて很ひ行ひて必ず前に居る、水に遇へば則ら先に涉る、群羊皆其後に隨ふ、羖羝を以て風を候する故に食せずと、原注云ふ羖羝音古力北人訛つて羝を呼んで骨と爲す、按ずるに羖羝は小羊也、骨輭にして嚼み易し故に呑噬す可し、本紀に曰く札木合太陽汗に從ひ來り帝軍の軍容整肅を見左右に謂つて曰く、乃蠻初め兵を擧ぐ蒙古軍を觀る羖羝羔兒の如し意謂らく蹄皮亦留めずと、今吾れ其氣勢を觀るに殆んど往時に非す矣、遂に部する所を引いて遁れ去る。

汝今試に看よ塔陽懼れ又令して山上に去りて立つ、又問ふ隨後多くの軍馬來るは誰ぞと、札木合曰く是れ訶額侖母の一個兒子八肉を用いて養ひ來る身三度の長あり(度は約六尺是れ一丈八尺也)三歲の頭口を喫し三層の鐵甲を披き三個の强牛を拽ひて來る也、彼れ弓箭を帶びたる人を嚥まんか喉嚨に礙らず、一個の全人を呑まんか點心(菓子也)にも足らず、怒る時昂忽阿の箭。

昂忽阿は人名蓋し力士能く强弓を以て射る箭常に殊る故に其箭昂忽阿箭と名づく下文客亦不兒語意之に倣ふ。

者以て山を隔てて射るに十人二十人穿透す、人若し彼と相鬪ふ時空野を隔て客亦不兒の箭を以て射るに人甲を連ねて穿透す、大拽弓九百歩を射り小拽弓五百歩を射る、生得常人に似ず大蟒の如し名づけて拙赤合撒兒と云ふ。

拙赤は蒙古語の大太子也、合撒兒太祖同母長弟たり。

塔陽曰く此の如からんか我等高きを占むべしと山上に去りて立つ、又問ふ彼の後に來る者は誰ぞと、札木合曰く是れ訶額侖最少の子斡赤斤と名づく。

元宗室世系表に云ふ烈祖神元皇帝五子あり、長は太祖皇帝次子捌只哈兒二子哈準大王四子鐵木哥斡赤斤所謂皇太弟國王斡嗔邦顏なる者也、五子別里古台王、案ずるに捌只哈兒は即ち拙赤合撒兒斡赤斤は即ち斡喫邦顏なり。

彼れ性懶早眠遲起を好むも軍馬中に在りては彼れ曾つて落後せずと是に於て塔陽遂に山項に上つて立つ。

札木合遂に乃蠻を離れ塔陽に對し語りし言を以て成吉思に對して曰く、塔陽今我言を聽き己に驚き昏す都べて爭ふて高きに上り山項に去る、決して厮殺の氣象なし、我れ己に彼れより離る、安答よ、汝ぢ謹愼すべき者彼の日太視日色晩きを見、納忽山を圍んで宿す、其夜乃蠻遯せんと欲し人馬山崖に墜ち壓死する者甚だ衆し明日塔陽を擒へんと。

本紀に曰く帝乃蠻軍と六戰し哺に至る、太陽罕を禽殺す、都部軍一時皆潰ゆ、夜絶險を走り崖に墜ちて死す者勝げて計ふべかちず、明日餘衆悉く降る。

其子古出魯克一處に在らざるに因つて身を脫するを得數人を領し走り出づ、軍に追及せられ即ち塔米兒河に依りて行く、剳營定まらざるにより又走り襲ふて阿勒台山前に至る。

西游記に曰く金山前に抵り白骨甸に至る、地皆黑石約行くこと二百餘里、達沙陀北邊頗る水草あり、更に大沙陀を涉る百餘里、東西廣袤其幾千里なるを知らず、古の戰場凡ろ疲兵此に至る十に一も還る無し、頃ろ乃滿大勢亦敗る、是に於て天晴るに遇ひ晝行す、人馬往々にして困斃し沙嶺を度る百餘、若し舟行すれば巨浪あり夜行すれば天氣黯黑魑魍魎崇を爲す、牛馬乏れ皆道に之を棄つ、陰山の前に抵る三百里和州あり、川に沿ふて西行すれば西即ち鶯思馬大城此れ大唐の北庭なり、東數百里府あり西凉と曰ふ、西三百餘里縣有り、輪台と曰ふ輪台の東に宿せば南陰山三峯突兀天に倚るを望む又回紇昌八剌城に至る陰山の西約十程又沙塢を度る、其沙細にして風に過へば則ち流る、洪驚濤の如し、乍ち聚り、乍ち散ず寸草萌さず、車陷り馬滯れば一晝夜にして方に出づ、蓋し白骨甸は大沙の分流也、南陰山の麓に際る、沙を踰ゆ又五日、陰山の北に宿し、詰朝南行すれば長坂七八十里暮に抵り乃ち宿す、晨に起きて西南行する二十里にして大池あり、方圓幾んど二百里雪

峰之を環る、池に沿ふて正に南下すれば松樺陰森衆流峽に入る、奔騰洶湧曲折六七十里二太子扈從して西征す始め石を鑿して道を理め木を刋して四十八橋と爲す、次で一程に又び阿里馬城に至る、金山より此に至る又西行四日答剌迷沒輩に至る、水勢深闊陰山を截斷す、舟に乘じて以て濟る一大山に至り又西行して西南一山を度り回紇小城に至る、又西南して板橋を過き河を渡りて南山に至れば即ち大石材牙なり、其國王は遼の後也、乃蠻國を失し大石に依る、其土に盗据す、士馬復振ふ、案ずるに此記言ふ所即ち古出魯克西奔の路塔惕の禽はる蓋し白骨甸大沙陀に在り矣。

勢愈窮促す遂に彼の百姓を盡く收捕す、此時札木合と共に有りし、達達札荅闌、合荅斤、等種亦都べて來り投降す。

本紀に曰く是に於て朶魯班塔兒哈苔斤只兀四部亦來り降る、按ずるに朶魯班散只兒向秘史に見はず、朔方備乘に曰く都爾班山は俄羅斯設けて卡倫有り、其南中國恰克圖と界を接す。

此に據れば則ち都爾班は朶魯班と對音を爲す、此部正に篾里乞部の北に在り、正に巴爾忽眞の地面此れ脫黑脫阿糾する所の者也、又朶奔篾爾干は其後を朶兒邊氏と爲す、當さに即ち朶魯班郭自ら出づる所、朶兒邊氏を以て朶魯班部と成す、居る所の地今相沿ふて都爾班

山と稱す、亦考見すべし矣、散只兀部は其源幸端察兒の兄に出づ、不忽禿撒勒只は其後を撒勒只兀惕姓氏と爲す、秘史前文一卷を見るに大率諸部皆札木合糾集し太祖を滅さんと欲す、其始め合答斤十一部落と稱し其後乃蠻十一部落と稱する者也、王罕既に滅亦び塔惕亦亡ぶ、惟ふに篾里乞及び乃蠻又回々欽察に竄入す、是に於て太祖徃く所に極まり竟に混一の業を成す、蓋し亦天意有り焉。

又塔陽の母古兒別速來る、成吉思曰く汝ぢ達達氣息熙きを言ふ汝如河にして來ると、成吉思遂に納る。

案ずるに古出魯克、塔惕戮せらるゝの日即ち能く罕を襲ふ、元史に屈出律罕と稱する者也塔惕の母孫あり其年紀を計するに即ち後母に屬す、亦當さに知命の年に在り、恐らくば納る可きに非ず、且つ元史后妃表凡ろ三十九位號並に古兒別速無し、秘史の言誕に近きか如し、孟珙蒙韃備錄を尋ぬるに云ふ、北使彼國に入り王相見はて酒を命じ、彼の妻を伺ふ公主及び諸姫其坐に侍す、凡ろ諸飲宴同席せむる無し、諸姫皆美色、四人乃ち金虜の貴嬪餘四人乃ち韃人、云ふ則ち乃蠻に擄せらるゝは乃ち是公主なり其國王と云ふは即ち太師木華黎にして成吉思に非ざる也當さに傳聞の誤による。

鼠兒年の秋。

此れ丙寅の前二年なり、太祖 定時未だ皇帝を稱せず鼠は甲子の年也。

太祖合剌答勒札兀剌地面に於て。

此れ今の喀喇塔拉額西柯淖爾の地也、西域水道記に曰く、喀喇塔拉額西柯淖爾源三あり東源を庫爾喀喇烏蘇河と爲す、南源を晶河と爲す、西源を薩爾巴克圖河と爲す、皆淖爾に注ぐ、亦布爾哈齊淖爾と曰ふ、安阜城北一百三十里極四十四度三十五分より四十六分に至る、西三十二度四十一分より三十三度二十五分に至る、東西五十里南北八十里周四百餘里冬夏盈縮せず、水岸に斥し自然鹽を成す伊犂の境是を仰給す、故に又鹽海と曰ふ、庫爾喀喇烏蘇河淖爾の東より入る、晶河西南より入る薩爾巴克圖河正西より入る、其北岸は即ち塔爾巴哈台境也、喀剌塔拉額西柯は即ち合剌答勒忽札の對音兀剌は即ち水也淖爾は即ち腦兒海子を謂ふ。

篾兒乞的脫黑脫阿と對陣し彼を以て殺退す、追ふて撒阿里客額兒地面に至り彼の百姓を虜にす、脫黑脫阿は二子忽都赤剌溫と幾個の伴當を帶びて走る。

忽都は五卷に忽都合と作す、六卷に忽圖と作す、均しく一人也、赤剌溫は後文十一卷に亦赤老溫と作す。

初め篾兒乞を虜とする時豁阿思篾兒種人答亦兒兀孫彼の忽闌と名づくる女子を以て。

后妃表に太祖忽闌皇后第二鄂爾多を守るとあり。

成吉思に獻ず來る時路間亂兵の阻當する所と爲り巴阿鄰種の官人納牙に遇ふ。

其源巴阿里歹に出づ、前文五卷に據るに納牙阿と作す、失兒古額禿の子と爲す、文孝廷式に云ふ、納牙は諾延一聲の轉此れ官名也其說是なり矣。

答亦兒兀孫曰く此の女子を成吉思に獻せんすと、納牙曰く我等一同往いて汝ぢか女子を以て獻ずべし汝若し先に往かんか亂軍汝を殺さん女子亦亂れと因りと留住する三日一同來つて成吉思に獻ず成吉思納牙の三日留まるに因り大に怒つて仔細を問ふ、彼は問ふ時其女子忽闌曰く納牙曾つて曰く我れ是皇帝の大官人たり、我等一同住いて此女子を獻ず、路間亂兵有るに因り以て留むと若し納牙の留住するなくんば今亦如何なるを知らず、必ずしも彼れに問はるまじ若し皇帝恩を賜らんか天父母に命じて生來皮膚全く有り、我か皮膚に問はる可しと納牙亦曰く、我れ只一心主人に奉事す、凡そ外邦より美女好馬を得ば主人に獻せんと欲す此れを除く外別に心有らば便ち死すべしと、成吉思曰く忽闌の言語是れ其日に就きて忽闌を試みたる耳、然るに思して曾つて汚されず、此に因りて成吉思甚だ寵愛を加ふ、納牙を放ち曰く此人至誠以後諸事委付すべしと。

十卷納牙を中軍萬戶に封ずる張本たり。

元朝祕史卷九

初め篾兒乞百姓を虜する時脫黑脫阿の子忽都の妻を斡歌台に與ふ。

即ち太宗英文皇帝寫闊台前文七卷斡闊台となす後文十四卷斡歌歹と作す。

一牢の百姓歹し去る、台合勒山寨を以て把住す、成吉思鎖兒失剌の子沈白に命じ右手軍領して往いて攻めしむ。

本紀に曰篾里乞俄かに叛し去る、帝泰寨寨に至り孛羅歡沈白二人を遣し右手軍を領して住いて之を平げしむ、又十七年夏塔里寨寨に避暑す、泰寨及び塔里寨は皆台合勒三字の對音也。

自ら住いて脫黑脫阿を追襲す、金山に到り冬を過ぐ明年春阿來嶺を踰へて去る。

阿來は即ち阿林の轉聲也、此今の汗阿林山なり、朔方備乘に曰く、汗阿林は中圓科布多の西北乃ち金山の西北大澣に在り、嶺爾齊斯河東岸北に隨ふ者也其山南科布多境に起り層峯相接し山脈西北に向つて行く、其東麓亨吉泊有り、其西麓爾色喀斯喀拉泊有り又西北數水有り東麓に出で鄂布河に注ぐ、其西麓大泊あり惹謨斯夸湖と曰ふ、湖水西流して額爾齊斯河に入る。

適ま乃蠻古出魯克脫黑脫阿と相合す。

本紀に曰く元年兵を發し復乃蠻を征す、太陽汗の子屈出律罕脫々と也兒的石河上に奔る三年の冬再び脫々及屈出律汗を征す、按ずるに屈出彼罕は則ち古出魯克にして脫々は卽ち脫黑脫阿の對音なり。

額兒的失不黑に於て

本紀に曰く時に斡亦剌部戰はずして降る、因つて用いて鄉導と爲す、也兒的失河に至り蔑兒乞部を討ち之を滅す、脫々流矢に中つて死す、屈出律契丹に奔る、朔方備乘に曰く額爾齊斯河源金山に出づ、金山は昆侖北支最大の幹たり、故に額爾齊斯河亦正北方最巨の川也一に也兒的石河と曰ふ、元史太祖紀を見るに一に葉兒的石河と曰ふ、憲宗紀を見るに一に也里的失河と曰ふ、武宗紀を見るに一に額兒的失水と曰ふ、秘史を見るに一に額勒濟河と曰ふ、水道提綱を見るに者此水の異名也、西域水道記に曰く額爾齊斯河二源あり、一源は華額爾齊斯河たり、一源は喀喇額爾齊斯河爲り、二河合して額爾齊斯河と爲す、西北流して潴して宰桑淖爾と爲る、復西北に從ひ溢れて額爾齊斯河と爲る、西北流し又東北流し俄羅國界に達し托穆斯科を過ぎ又鏗格爾圖喇を過ぎ又森羅特城を過ぎ又折れて而して北流し又東北流し狄穆衍斯科を過ぎ又薩馬爾斯科を過ぎ又東北流し鄂布河と合し又東北流し

て北海に注ぐ案ずるに不黑は水の稱にして前文四卷斡列該不剌合と同例なり。

都兒麻地面の根源に行き。

案するに下文額兒的失水を渡るは則ち都兒麻の河東に在るを知る可し、前文六卷王罕脫黑脫阿を以て巴兒忽眞脫忽木地面に趕へすと、此れ今俄羅斯託穆斯科の對音、色楞格河の西額爾齊斯河の東に在り蓋し託穆河、源出づる處故に根源と曰ふ也、且つ都兒麻を急讀すれば亦卽ち託穆二字なり矣、朔方備乘に曰く託河源託穆斯科城東南山に出づ、西流三百餘里托穆斯科南を逕城西を繞過し又西北流する百餘里にして哈屯河に注ぐ、哈屯河托穆河に會し又西北流して格野斯歸城を逕又西北流す、其下游額爾齊斯河と會す其地に似たり。

軍馬を整治す成吉思其地に至り彼と厮殺す、脫黑脫阿亂箭に中りて死す、其尸持ち去る能はず、其子彼れの頭を割りて去る。

其子は忽都及赤剌溫也。

人馬敗走し額兒的失水を渡る、溺死する者過半、餘は皆散亡す、是に於て乃蠻古出魯克委兀合兒魯種を過りて去る。

元史地理志西北地附錄に畏吾兒地あり、注に云ふ、至元二十年畏吾兒四處の並及び父鈔庫を立つ、又柯耳魯地有り、今案ずるに委兀は卽ち畏吾兒合兒魯は卽柯柯耳魯兩處對音なり

本紀に曰く太祖四年己巳畏吾兒國來り歸す、即ち委兀なり矣、西遊記に云ふ輪台縣又二城を歴、回紇昌八剌城に至る、其王畏午兒衆部族及回紇僧ゞを率ゐて遠く迎ふ回紇畏午は皆委兀の對音なり則ち其部族は昌八剌城に在り、蓋し即ち元志西北地の彰八里也。

回々地面の垂河に至る。

垂河は即ち今の吹河注前文五卷に見ゆ、元史速不台傳に曰く丙子帝諸將を會し滅里吉部を征す、速不台行かんことを請ふ、帝之を許す、阿里出百人を領し先つ虛實を覘ふ、速不台之を戒めて曰く汝ぢ宿ずるを止めよ、必ず嬰兒を戴せて以て行くべし、若し家を挈けで逃る、もの有れば滅里吉備へを設けず、と大軍蟾河に戰ひ其二將を獲、部主霍都飲察に奔る

按ずるに蟾河は即ち垂河の聲轉霍都は即ち忽都合勒の對音、又雪不台傳に云ふ、太祖十一年滅里吉衆と蟾河に戰ふ其部長を追玉峪に追ひ大に之を破る、遂に其地あり。

合剌乞塔種の人古兒罕と相合ふ。

本記の所謂屈出契律丹に奔るは即ち此れ也、乞塔は即ち契丹の聲轉、此れ古兒罕は即ち西遼主葛兒罕、注前文五卷に見ゆ、讀史方輿紀要に曰く乃蠻葱嶺西南に在り今按ずるに乃蠻は當に金山に在り云云、乃ち古出魯克西遼に竄する以後其國今の塔什干に在る也、西遊記に曰く陸局河又四種西北河を渡れば故城基地岑新有り、或は云ふ契丹建つる所と、既にし

て地中古瓦を得、上に契丹二字有り、蓋し遼亡び士馬降らざる者西行して城邑を建つる也

又言ふ西南尋思に至る、干城萬里の外回紇國最も佳なる處契丹の都なり焉、即ち此れ古兒罕の地、西使記して曰く亦塔岡山を過ぐる岡士平民夥し、講溫映帶故墨環垣多し之を問ふ蓋し契丹の故居也其地を計るに和林を去る一萬五千里に近し、按ずるに此れ亦西遼也、元史蜀興愛里傳初め西遼闊兒罕に近侍す、其闊兒罕と云ふは即ち此の古兒罕なり矣。

篾兒乞的忽都合勒赤剌溫康里欽察種を過ぎり去る。

今の俄羅斯の地也、後文十三卷康鄰十一部落と稱するは即ち此れなり、元史不忽木傳に曰く世康里部大人と爲す、康里は即ち漢の高車國也、欽察は元史地理志西北地附錄に欽察有り斡羅思有り、後文十四卷又乞卜察十一種百姓欽乞と作す、亦聲轉也、元黃溍唐里氏先塋碑に云ふ、康里古は高車國也、我が太祖皇帝親征して其地を容す、其國の近屬二孤子ありし而して來朝す、則ち太祖已に賓天す、乃ち太宗に献じて曰く此れ吾國の遺胤也、奴隷に辱む可からず、敢て以て來り歸す、幸に宅日天子と爲らんと、上をして憐んで而して之を撫育せしむ、憲宗御極二子を召し入れて宿衛と爲す、昔寶赤を領し扈從して宋を伐つ、母康里に回り而して復來る。世祖入りて大統を正し給するに土田を以てす、興和天城の大羅

鎮に居らしむ、後其母を以て雲中郡夫人に追對す、牙牙を以て雲中王に追封す、元史土土哈傳に曰く、曲出徙つて西北玉里伯里山に居る、因つて以て氏と爲る、其國を號して欽察と曰ふ、其地中國を去る三萬餘里夏夜極めて短し日暫く沒して即ち出づ、曲出唆未納を生む、唆未納亦納思を生む、世欽察國主と爲す、太祖篾里乞を征す、其主火都欽察に奔る、亦納思已に老い其子忽魯速察使を遣し自太祖に歸す、而して憲宗已に其境を叩き其子班都察族を舉げて迎へ降る、元虞集句容郡王燕帖木兒碑に曰く、欽察の先按するに答罕山部族也、後西共に遷る、即ち玉黎北里の山に居る焉、土風剛悍勇にして善く戰ふ、曲年なる者あり乃ち其國人を號して欽察と云ふ、之れが主と爲り而して之を統ぶ、曲年唆未納を生む唆未納亦納思を生む。太祖皇帝篾乞思火都を征す、火都弄る亦納思使を遣して諭して之を取るも從はず、我師亦納思を征するに及び其國を理むる能はず、歳丁酉亦納思の子忽魯速蠻自ら太宗に歸す、而して憲宗命を受けて師を帥ふ、已に其國に至れば忽魯速蠻の子班都察族を舉げて來り歸す、從つて篾乞思を討ちて功あり云云、即ち其地也。

成吉思亦回つて老營に至る、此時沈白台合勒察を攻破し、篾兒乞百姓を盡く殺擄す、又先に投降したる篾兒乞老營内に在りて反す、營内家の爲めに敗らる、成吉思曰く彼をして一處に在らしめば彼れ亦反せんと、就ち各人をして盡く數分す。

牛兒の年成吉思速別額台に一個の鐵車を造り與ゆ、脫黑脫阿の子忽都等を襲はしむ、對して曰く、彼れ我等と厭殺し敗れ走る套竿を帶ぶるの野馬の如く箭に中りし鹿の如し、翅ありて上天に飛ばんか汝ぢ海青となりて下り來れ、如し鼠地に鑽入せんか、汝ぢ鐵鍬となりて掘り出し來れ、如し魚海に走入せんか汝ぢ網となりて撈ひ出し來れと、又曰く汝ぢ高山を越へ大河を涉る、軍を趁ふの馬疋未だ疲せず行糧未た盡きざる時先づ愛惜するを要す、路間輕しく圍獵すべからず、若し獵するに因り行糧を做さんか斟酌するを要す、馬の鞦幷に閘環套上を許さず、此の如くなれば則軍馬敢て走らず、若し號令に違ふ者有らば我れ識る者は便ち捕へ來るべく識らざる者は就ち刑に處すべし、謹愼す可き者若天の護助により脫黑脫阿の子を捕へば就ち殺すべしと、再び曰く初め我小時三種篾兒乞に捕へらる、不兒罕を繞る三度、此度仇有る百姓今又言語を發して去る、我れ汝をして追ふて極處に到らしむ、汝に鐵車を造り與ふる所以也、汝ぢ我れを離る、遠しと雖も近きに在る如し、行けよ、天必ず汝を護らんと。乃蠻蔑兒乞成吉思に收捕せらる、後札木合乃蠻の處に在り、百姓亦陷らろ、只五個の伴當あり共に刼賊を做す因つて倘魯山に行く。

倘魯山は即ち唐麓嶺亦湯努山と作す、元地理志に曰く謙州謙河西南に在り、唐麓嶺の北居民數千家悉く蒙古回紇の地なり、沃衍稼に宜しと、水道提綱に曰く阿爾泰頂東北太幹より

一千一百餘里を經、又東百里湯努山と爲す、甚だ高大西十八度三分極四十九度四分より五分に至る。

一個の羝羊を殺し燒きて喫す、喫する間札木合曰く誰の兒子今日羝羊を殺して燒き喫すと後五個の伴當を捕へ成吉思に送る、札木合人をして成吉思に言はしめて曰く、黑老鴉曾ま鴨子を拏ふ奴婢能く主人を捕ふ、皇帝安答意必ず同じからんと。

必ず處決すべく政刑を倒置すべからざるを言ふ也。

成吉思曰く正主自ら敢て捕へたる人を如何にしてか留め得ん、此等の人及び其子孫を以て盡く典刑に處すべしと是に於て札木合面前に於て殺す、即ち人をして札木合に對して曰く我れ先に曾つて汝をして一隻の車轅と做す、汝分離して去る、今既に又合ふ、以て伴と做すべし、但し忘れたる時其れを提說し睡る時其を喚省せよ、前に汝ぢ另に行くと雖も即ち是れ我が福有り吉慶あるの安答なり、若し眞實厮殺の時汝ぢ即ち自ら心痛む、我初め王罕と厮殺の時汝ぢ王罕の言語を以て我れに語れり、是れ一次我に恩あり、乃蠻と厮殺するに及び汝ぢ言語を以て乃蠻を驚動す、又是れ一次我に恩有り、此言語を以て札木合に說き知らしむ。

王罕の事前文七卷に在り乃蠻の事八卷に在り

既にして札木合曰く我等年少安答と做る時消化す可からざる飲食を曾つて喫す（歃血を謂ふ）忘る可からざる言語を曾つて言ふ（盟誓を謂ふ）人我等を離間せんとするに因り故に分離す、前に言ひたる言語を想ひ起せば自ら面に羞ぢ敢へて安答と相見ず、今安答我をして伴當と做さんとす、伴を做す時曾つて得伴を做さず、今汝ぢ衆百姓を收め大位定まるも伴を做すべき無し、汝ぢ若し我を殺さゞらんか衣領上の蝨底衿內を刺す如く反つて安答をして日間心安んせず、夜間睡つて穩かならず。

蟣蝨膚に在り、芒刺背に在り、人をして安んぜざらしむ、札木合、縱連橫の才を以て十三部の衆を擧げ太祖を除き以て自ら主たらんと欲す、假りに若し志を得るも亦太祖を臥榻に容るゝ能はず、終に韓彭の葅醢と爲る耳、固より已に之を計る熟す矣。

汝の母聰明汝ぢ又俊傑、弟技能あり、伴當皆豪傑、又七十三匹の騙馬有り、我小より父母を亡ひ又兄弟無し妻好んで長話を說く、伴當倚仗に中らず、此れ爲めに天命ある安荅勝ちたり、今恩賜快かに死せしめんか安荅心安きを得、倘し又出血せず死せしめんか（自盡を賜るを謂ふ）我死後汝の子孫を永遠護助せん也と、成吉思此語を聽きて曰く、札木合安荅另に行くと雖も曾つて眞實我等を害するの言語有らず、是れ以て學ぶ可きの人、彼れ活くるを肯んせず、待つて彼をして死せしめん、占トせんか又入らす。

蒙韃備錄に曰く凡そ吉凶進退殺伐每に羊骨扇を用ゆ、鉞椎火を以て之を椎つ、其兆坼を看

以て大事を決す龜卜に類する也。

彼れ又是れ大名頭の人。

札木合の樓略項籍田横に次ぎ哀紹公孫瓚に勝る。

緣故なく彼を害す可からず。

之を殺す名無くんば以て其心を服するに足らず。

緣故あ汝ぢ彼に對して曰く前に捌只荅兒刺台察兒兩個の馬群相搶刼する時汝ぢ特地反を謀り、巴勒渚納地面に厮殺し、我を者刺揑地面の狹處に趕入し我をして恐懼を生せしむ、今汝ぢをして伴と做す汝ぢ又肯んぜす、汝が性命を愛惜せんと欲すと雖も亦得る能はざる也汝ぢか言語に依るに出血せずして死せしむる者札木合をして就ち彼處に出血せずして死せしめ仍ほ禮を以て厚く葬らんと。

成吉思既に衆部落を以て收捕す、是に至つて虎兒年、斡難河源頭九斷の白旄纛を建て皇帝と做る。

宋寧宗開禧二年丙寅金泰和の六年也、本紀に曰く元年丙寅帝大に諸王群臣を會す、九旒の白旗を建つ、皇帝の位に斡難河の源に卽く、諸王群臣尊號を上り成吉思皇帝と曰ふ、蒙韃備錄に曰く成吉思の儀衛大純白旗を建て以て識認と爲す、其外並して他の旌幢無し、今國

王一白旗九尾中に黑月あるを建つ、出師則ち張ると云ふ。

功臣木合黎を封じて國王と爲す、者別に命じ古出魯克を追襲し達達百姓を整治す、駙馬を除く外復同じく開國功有る者九十五人に授けて千戶と爲す。

成吉思曰く此の駙馬九十五千戶を幷せ己に委付すと。

元史諸公主表に曰く元室の制勳臣世族及び封國の君に非ざれば則ち公主を尙するを得る莫し、是を以て世戚畹を聯ぬる者親しく諸王を視る。

其中又功大なる官人有り、我れ再び彼を賞賜す、失吉忽禿忽に命じ孛斡兒出木合黎等を喚ぶ失吉忽禿忽曰く孛斡兒出木合黎等功多し又彼を賞するを要す、我れ孩提より汝の家內に到り即ち長成するに至る迄曾つて離れず、我功少し今何を以て我を賞賜せんと、成吉思曰く汝ぢ曾つて我第六の弟と做る、九次罪を犯し罰せず、今初めて百姓を定む、汝ぢ我れと耳目を做す、但し凡う汝の言語何人と雖も違ふを許さず、如し盜賊詐僞の事あらば汝之を懲戒し殺す可きは殺し罰す可きは罰す可し、百姓家財を分つの事あらば汝ぢ之を科斷すべし凡う斷じたる事は淸冊上に記し以後諸人の更改するを許さざるべし。

元文類六十七馬祖常撰月合乃碑に曰く、國朝天造の始め庶政を總裁す悉く斷事官よりす

元史百官志に曰く元太祖朔土より起り統べて其衆有り、部落城廓の利非ず、國俗敦厚庶事

の繁非ず、萬戸を以て軍旅を統べ斷事官を以て政刑を治む、任用する者一二親貴重臣耳元史紀事本末に曰く太祖の時官を設くる甚だ簡斷事官を以て至重の任と爲す、三公の上に位す。

失吉忽禿忽曰く我れ最も小なる弟なり、如何にして敢て衆兄弟と同じからん、若恩賜あらんか土城内に住する白姓を我れに與へよと、成吉思曰く汝ぢ自ら斟酌して要すべしと、失吉忽禿既にして恩賜を受く即ち孛斡兒出木合黎蒙力克等を喚び入つて賞賜を受けしむ。

大宗紀に曰く六年胡土虎那顏を以て中州斷事官と爲す、中州は即ち中土、胡土虎は即ち忽禿忽蓋し後太宗朝に事ふるの恩眷亦此に根源する也。

成吉思蒙力克に對して曰く汝ぢ我幼時より伴と作りて今に到る、護助する處甚だ多し、如何せん王罕父子我を賺して去る時若し汝ぢ止めざらんか幾んど深水大火に陷りたらん、我れ今彼の恩を想ひ我子孫をして亦如何にして忘るを得せしめん、今後坐する時汝ぢ當さに角上に在りて坐すべし、或は一年或は一月にして汝を賞賜し即ち子孫に至りて絶たざらん

成吉思再び孛斡兒出に對して曰く我れ小時慘白色の騙馬八匹有り賊の爲めに刼し去らる、我れ之を追ふこと三夜汝ぢと相遇ふ、汝ぢ即ち我れと伴を作す、一同追襲す又三宿を過ぎ我馬を以て奪回し來る、汝ぢが父納忽伯顏家財有り只汝ぢが一子何故を以て我れと伴を作す

を肯んずる蓋し汝ぢ義氣あるに因る、後我れ又汝を伴と作す、汝ぢ曾つて違はず、我れ三種箴兒乞に逐はれて不兒罕山に入る時、汝ぢ又我れと甘苦を同ふす、我れ塔々兒と荅闌揑木兒格思地面に於て相抗して宿す時正に霖雨に遇ふ、汝ぢ我れを歇息せしめんと欲し氈衫を披ひて立つて我が上に在り雨をして漏らしめず、即ち天明に至り、腳只一次を換ゆるのみ、此れ汝ぢ豪傑の効驗たり。

元史博爾求傳に曰く、火赤兀里に戰ひ博爾求馬を腰間に繫ぐ、跽して而して滿を引く分寸故の處を離れず、又嘗つて圍を克烈に潰ゆ、太祖馬を失す、博爾求帝を擁し累騎而して馳す、頓に中野に止まる、木華黎と氈裘を張り帝を蔽ふ、夕元通じて植立す、足迹移らず、蔑里乞の戰風雪陣に迷ふを以て再び敵中に入りて太祖を求むるも見ず、急に輜重に趨く則ち帝己に還つて車中に臥す、聞博爾求至つて曰く此れ天我れを贊する也と、元文類閣復撰廣平王玉昔碑其祖博爾求の事を述す、傳と略同じ、元文類二十四元明善忠憲王安童碑に曰く、木華黎忠武と謚す、博爾求博爾忽赤老温と號して四傑と爲す、太祖戰ひ失刺單り澤中に走る、天大に雪ふる、忠武博爾求と馬鞿を張り太祖を蔽ふ、上起きて跡を視る、二人の足移らず。

其餘の事業盡く說くべからず、汝ぢ又木合黎と行ふ可き事、我を助けて行はしめ、行ふ可か

らざる事我を諫めて止めしむ、蓋し我が此の大位を得たる所以也、今汝ぢの坐次坐して衆人の上に在り、九次罪を犯し罰するを休む、此の西邊直ちに金山に至り汝ち萬戸を管すべしと

程大昌北邊備對へて曰く、金山隋唐の間突厥阿史那氏匈奴北部の地を得て金山の陽に居る、皇輿西域圖志阿勒坦鄂拉を古金山と爲す、庫爾圖達巴西北三百里哈柳圖郭勒に在りて源を發す、其以東峯巒層沓數百里に亘る、北路名山の冠と爲す、東は舊藩喀爾喀蒙古諸部たり、西は準噶爾部と爲す張穆蒙古遊牧記に曰く阿爾台亦阿爾泰と作す、今阿勒坦と作す蒙古金を謂つて阿勒坦と曰ふ、即ち古の金山也、科布多城西に在り、閣復廣平王碑に曰く國初官制簡古左右萬夫長を置く諸將の上に位す、首め武忠右に居る、東平忠武王左に居る翊衛辰極猶ほ車の軸あり身の臂あるか如し、荒屯を電掃し九土を鼇奠す、柱天の力競ふ。

成吉思再び木合黎に對して曰く、我等豁兒豁納主不兒地面に在りて。

不兒は必拉と對音蒙古稱の河也、豁兒豁納は註前文一卷三卷に見ゆ。

忽禿剌皇帝鬚鬆樹下に住する時天汝に告げたる言語を知る、我れ汝れより汝か父古溫豁阿を想ふ。

元史木華黎傳に曰く生るる時白氣有りて帳中に出づ、神巫之を異みて曰く、此れ常兒に非ざる也、父孔溫窟哇前文四卷古溫兀と作す。

汝ちに對する言語を曾つて說き來る、それより汝をして國王と爲す。

元史百官志曰く太祖十二年國王太師一員を置くと、木華黎傳に曰く八月詔して太師國王に封ず、行事を承制す、誓券黃金印を贈つて曰く、子孫傳國世世絕元ず、弘吉剌亦乞烈思兀魯兀忙兀等十軍及吾也兒契丹蕃漢等軍を分ち並に麾下に屬す、且つ諭して曰く太行の北朕自ら經畧す、太行以南卽ち其れ之れを勉めよと。

坐次衆人の上に在り、東邊合剌溫山に至り汝ぢ卽ち左手萬戸と做す、直ちに汝ぢ子孫に至り相傳管す。

蒙韃備錄に曰く、太師國王沒黑肋、只一子あり袍阿と名づく、美容にして婆焦を剃るを肯んせず、只巾帽に裏み窄服を著し諸國語を能くす、元黃潛拜住神道碑に曰く、高祖孛魯嗣國王太祖皇帝の命を奉じ西夏を攻め河北を定む、山東を平け功を以て東平郡を食す純誠開濟保德輔運功臣太師開府儀同三司上柱國を贈り魯國王に追封し忠定と諡す、此れ木華黎の子也、碑又云ふ曾祖覇鄉魯世祖皇帝に從ひ宋を伐つ、東平王に追封し武靖と諡す、此れ木華黎の孫也、碑又云ふ祖安童世祖に事へ尙書右丞相を拜し太師を贈る、東平王に追封し忠憲と諡す、進めて魯王に封ず、兀都台を考するに成宗の時大司徒を以て太師を贈り東平王に追封す忠簡と諡し、堯王に追封す、此れ木華黎の曾孫元孫也、碑又云ふ、王諱拜住泰

定元年太師上柱國を贈り東平王に追封す、元三年に至り進めて鄆王に封ず、子男二人長答刺麻碩理次を因牙納碩理と云ふ、文宗名を賜ふ、篤麟鐵穆爾と云ふ、此れ木華黎の來孫耳孫也。

成吉思再び豁兒赤に對して曰く、我れ年小の時汝ぢ曾つて先兆の言語を說き我れと辛苦伴を作す、彼の時汝ぢ曾つて曰く、我が先兆の言語若し應ぜんか、我れに三十個の妻を與ふと今已に應ず、此の投降の百姓內好婦人女子を汝ぢより三十個揀ぶべしと。

後文禿烏惕反するの張本たり

再び三千巴阿里種を以て。

源宇端察兒に出づ、次子巴阿里歹豁兒赤即ち其後なり。

又塔該(前文四卷に塔乞又塔孩と作す)阿失黑(後文十卷に阿失黑帖木兒と作す札合敢不の厨子也)二人管する阿荅兒乞種等の百姓を添へ。

前文八卷一百の只兒斤百姓を以て塔孩把阿禿兒に與ふ、後文十卷札合敢不二百人と其女亦巴合とを以て從嫁を爲す、太祖亦巴合を以て主兒扯歹に賜ひ阿失黑等百人を留め遺念と做す、此二人管する所の百姓由來する所なり、阿荅兒乞卷一阿答兒斤と作す、其源合赤溫の子阿荅兒歹に出づ。

一萬を集め汝ぢ萬戶となりて管すべし、額兒的失河水林木內百姓地面に順ひ。

異域錄に曰く額爾齊斯河沿途俱に林藪杉松馬尾松楊樺楡叢柳櫻蓂あり、額爾齊斯河沿岸皆塔塔拉人ありて居住す、間に田畝あり。

汝ぢ自ち下營し就ち鎭守せよ、凡ろ彼の地の百姓事務皆命を汝ぢに稟くべく違ひし者は即ち處治すべしと。

元朝秘史卷十

成吉思再び主兒扯歹に對して曰く汝ぢ緊要の恩、合剌合勒只額列惕地面に在り、王罕と厮殺の時正に愁ふ、忽亦勒荅兒先づ厮殺するを言ふも然も事業を成就する其實汝ぢに在り、彼の只兒斥等緊要の軍馬を以て殺退し、直ちに衝いて中軍天門に至り、桑昆の腮を以て射る、此時若し射て中らずば桑昆亦如何になりしやを知らず、是れ汝ぢが緊要の大功なりと

元史求赤台傳に曰く初め怯列王可汗の子鮮昆智勇有り、諸部之を畏る、怯列亦哈剌哈眞沙陀等衆を帥ゐて來り侵す、兵戰利あらず、近臣忽丹荅兒等馳せて太祖に告げて曰く事急なり矣、願下忠勇なるもの求赤台に如く無し宜しく急に之を遣して敵を拒むべしと、之に從ひ求赤台命を承けて單騎陣を陷る、鮮昆を射殺し其大將失列門等を降し遂に怯列の地を併す。

隨後合勒合河に順ふて起つ時我れ汝ぢを望む高山の遮護する如し、往いて巴勒渚海子に至り王罕を征する時汝ぢ唄哨と做る、天蔭功するに因り客列亦惕の緊要の國を平ぐ。

元史求赤台傳に曰く始め怯列亦を征する時罕哈より啓行し班眞海子を歷、間關萬里戰陣に遇ふ毎に必ず先鋒と爲る、帝嘗つて之に諭して曰く朕の汝に望む高山前の日影の如き

也と。

故に乃蠻篾里乞種我等と對陣する能はずして潰散す初め乃蠻篾兒乞潰散する時札合敢不両個の女子を獻じ彼の百姓を全ふす、後又反し去る、汝ぢ計策を用ひ彼を捕へ彼か百姓を虜す。

事九卷に在り前文但し營内家人の戰勝を言ひ未だ功主兒に在るを言はず。

此れ第二次の功たり。

元史求赤台傳に曰く乃蠻篾兒乞台兵を合して來り侵す諸部陰に之に附す者あり、太祖兵を領して卒に至るを虞れず、諸部潰ゑ去る、勝に乘じて之を敗る、求赤台其主札哈堅普及び二女を俘とし以て歸る、札哈堅普と盟つて之に歸す、未だ幾ばくもなく乃蠻復叛す、求赤台計を以て札哈堅普を襲ひ之を殺し、遂に其國を平ぐ。

遂に夫人亦巴合賜と主兒扯歹あり。

亦巴合の獻事第八卷に在り、元史求赤台傳に曰く、嬪御木巴哈別吉引者思百を賜ふ

成吉思亦巴合に對して曰く汝ぢか性行無く顏色無きを嫌ふに非す亦曾つて汝が身體不潔なるを言はず、列して夫人次序内に在らしむ、今主兒扯歹の爲めに征戰する時、性命を捨てて離散したる百姓を能く收集す、功あるに因り汝を以て彼に賜與す、久しき後我位に坐したる子孫、此の功あるを想ひ子子孫孫に至る迄、亦巴合の位を斷絶せしむるなしと、再び亦巴合

に對して曰く、汝ぢか父札合敢不初め厨子阿失帖木兒等をして。

前文九卷阿荅兒乞百姓の阿失黑を管する也。

二百人を引き汝ぢと從嫁を做す、汝ぢ今去る時阿失黑帖木兒等一百人を留めて遺念と做す、

又主兒扯歹に對して曰く、四千兀魯兀種の百姓汝ぢか管する者あり。

求赤台傳に曰く兀魯兀四千人をして統べしめ世世替る無し。

成吉思再び忽必來に對して曰く汝ぢ剛硬服せざるの人を以て服す、汝ぢ者勒篾者別速別額台四個と猛狗の如し、凡そ去處を敎ふれば堅石を撞碎し崖子を衝破し、深水を横斷す、厮殺する時汝ぢ四人をして先鋒と做す、孛斡兒出木合黎孛羅兀勒赤老温四傑をして我れに從はしむ。

元史兵志に曰く、太祖功臣博爾忽、博爾求、木華黎、赤老温時に朶魯班庫魯克と號す、猶ほ四傑と言ふが如き也。

主兒扯歹亦勒答兒（前文皆忽亦勒答兒と作す此處脫字あるに似たり）我が前に立ち我心をして安んぜしむ、今凡ろ軍馬の事務忽必來汝ぢ長者たりと、再び曰く別都温性拗なるが爲めに

前文四卷抹赤別都者温朶兒別氏有り、即ち此人に似たり。

汝ぢ彼れを怪しみ曾つて千戶と做さしめず、爾ぢと正に好し一同千戶と做り商量して行く

彼れを看るに久しき後如何。

成吉思再び孛斡兒出木合黎等に對して曰く、此の忽難夜間雄狠と做り、(能く營を劫し人を殺す)日裏黑老鴉と做り、(能く隊を練り伍を整ふ)我に依りて行く、曾つて惡人に隨ふを肯んせず。

辭徹台出諸人に隨はず、札木合に投せざる也。

汝ぢ凡ろ事、此の忽難闊搠思二人と商量して行くべし、我子拙赤最も長ず。

元史宗室世系表に曰く太祖皇帝六子長求赤太子。

忽難をして格爾格思を飲せしむ。

格爾格思は即ち前文一卷の格泥格思其源抄眞斡兒帖該の第六子格泥格思の後に出づ、遂に此種族を成す。

即ち拙赤の下萬戸を做す、又曰く忽難闊闊搠思迭該。

別速部人前文四卷羊隻の牧放を管せしむ。

兀孫額不干(即ち兀孫老人)四人但し曾つて聞見する事曾つて隱諱せず即ち來つて我に對して言ふ、(四人を賞賜す下文に見ゆ)

成吉思再び者勒篾に對して曰く汝ぢが父札兒赤兀歹老人風匣に背して不哷罕山より來る、

(事前文三卷に在り)斡難河迭里温孛勒答地面にて我れを生む時一個の貂鼠褦兒を與ふ、此時者勒襁褓の中に在り、うれより奴婢となり一同生長して伴と做り今に至る、多く功勞あり是れ我が福慶あるの伴當にて九次罪を犯し罰するなき者。

成吉思再び脫命に對して曰く。

前文脫命其人無し、之を元史に考するに即ち脫命は乃ち蒙力克の子也、元史伯八兒傳に曰く祖明里也赤哥太祖張下に隷す、王罕詐つて女を以て太祖の弟に妻はす、太祖明里也赤哥に往かんと欲し其詐を知りて諫止す、父脫倫闊里必ず太祖に扈從して西域を征す、則ち脫命は伯八兒の父即ち明里也赤哥の子なり矣、前文六卷太祖王罕筵席に赴くを諫止するは蒙力克たり、蒙力克は即ち史の明里也赤哥、脫命は蒙力克の子也、哈八兒禿傳千戸脫命に從つて宋を伐つは則ち脫命憲宗に事ふる也。

汝ぢ父子各千戸を管す、汝ぢ汝ぢの父親を助け百姓を收集す、汝ぢ扯兒必と名分るる所以也。

史に稱す、脫倫闊里必は即ち兵志の怯薛也、元人西遊記闊利必有り亦扯兒必の對音、註前文八卷に見ゆ。

今汝ぢ自ら收集したる百姓を以て千戸を做し、脫魯罕と商議し行くべし。

脫魯罕は即ち太祖の子拖雷也、註前文八卷に見ゆ其稱して脫魯罕と曰ふ者即ち拖雷王也、

元史世系表彩王多く大王と稱す、其上冠するに諱を以てす、拖雷王は蒙古語を以て之を呼んで脫魯罕と曰ふ也、太祖太宗西域拖雷を征す脫命亦扈從す、後文十三脫命大寧に至り其城降る、女眞に至り其主亦降る、十四卷捌斡兒合地面大王衆官人と聚會す、其中脫命あり議して曰ふ、又唐兀主不兒罕を征脫命に命じて之を殺す、脫命商議する所の脫魯罕は即ち拖雷罕たるを見るに足る也。

成吉思再び蒙格禿乞顏の子汪古兒厨子に曰く。

前文四卷翁古兒と作す、又汪古兒と作す、飲膳を管せしむ故に厨子と曰ふ

前に汝ぢ此の脫忽剌兀惕三姓。

前文四卷札剌亦兒種合赤温合剌孩合闌勒歹三個脫忽剌温兄弟是三人皆脫忽剌氏に出づる也。

塔兒忽惕五姓

前文四卷合答安兄弟五人塔兒忽氏と爲す。

敵夫乞惕巴牙兀の兩種

敵は當に前文に依るに敵と作す、前文四卷此兩種姓有り未だ何人なるを言はず。

我れと一個の圈子を作す、昏霧中曾つて迷せず、亂離中曾つて離れず、塞涇の處曾つて共に

受け來る、今汝ぢ何んの賞賜を要すると、汪古兒曰く敎揀を賞賜せんか巴牙兀惕姓の兄弟。

汪古兒は巴牙兀惕を以て兄弟と爲す、而して其父蒙格禿は則ち乞顏氏、前文一卷を尋ぬるに德薛禪也速該を稱するに云ふ、必ず是れ汝ぢ乞顏人の吉兆と、是れ太祖亦乞顏則ち同族人なり矣、朶奔篾兒干家使用の人其父自ら云ふ、我れ是れ馬阿里黑伯牙兀歹人氏則ち巴牙兀惕は即ち伯牙兀歹の對音其一族たる疑無し、汪古兒は殆んと其後人也。

都べて各部落に散在す、我れ收集せんと欲す、成吉思應許す、曰く汝ぢ收集せば千戶を做して管せよと、又曰く汪古兒孛羅兀惕二人左右に分れ茶飯を散じて均勻し我をして心安からしむ、今汝二人騎馬著る、多人の處に茶飯を散ずる者坐する時汝二人大酒局に於て左右に分れ脫命等と俱に北に向つて坐し即ち茶飯を料理す、成吉思再び孛羅兀勒に對して曰く我母親汝及び失吉忽禿忽古出闊闊出四個を營盤內に於て拾得し兒子と做す、養育提携をして人と成す、我か兒子と伴を作すべし我か母親汝を養ひたる恩汝幾分を報するを得ん、孛羅我れと伴を做す、凡う緊急の征戰の處雨夜敵人と抗拒の時有りと雖も曾つて湯飯を缺き我をして空宿せしめず、又塔塔を滅ばす時合兒吉勒失剌有り逃出し喫す可き無し即ち母親の家內に回り來る、彼れ曰く衣食を尋ぬと、母親曰く既に衣食を尋ぬ彼方に坐すべしと就ち西

邊門後に坐せしむ、時に拖雷有り方に五歳(太祖の第四子)入門し來り即ち出で去る、合兒吉勒に肘下挾出せられ手を用ひて刀を抽く、母親壞て兒子と叫ぶ、時に孛羅兀勒の妻阿勒塔泥止に東邊に坐す、即ち走り出で彼人の頭髮を掴み又彼の刀を抽く手を扯む、刀落つ、此時房の北邊歹(前文四卷哲台と作す弓箭を帶ぶる者也)者勒篾二人牛を殺す、阿勒塔泥叫ぶを聽き二人刀斧を以て來り彼人を殺す、後阿勒塔泥者歹者勒篾三個頭功を爭ふ、者歹者勒篾曰く若し我來る遲かりせば汝ぢ一個の婦人彼を如何にせしか拖雷已に彼れに害せられたらんと、阿勒塔泥曰く汝ち我聲を聽かざりせば如何にして來らん、又我れ彼の頭髮をつかみ彼の刀を落さゝりせば汝ぢ來る時拖雷已に彼に害せられたらん、斯く論じ來れば阿勒塔泥頭功を待べき者、又曰く合勒合勒只惕地面に於て王罕と厮殺する時斡歌歹塡上箭に中る、孛羅兀勒塞りたる血を唾ひ去り、斡歌歹の性命を救ふ。

斡哥歹は即ち七卷の斡闊台太宗英文皇帝也。

彼れ能く我母親養育の恩に報い我二子の性命を救ひたり凡り百難難の處亦曾つて怠慢せず今九次罪を犯し罰するなき者。

成吉思再び女子に賞賜を行ふを曰ふ。

阿勒塔泥の賞而して其餘女子合答安豁阿黑臣老婦德薛禪の妻捌壇の類。

成吉思再び兀孫老人に對して曰く兀孫忽難闊闊捌思迭該此の四人は聽き得たる時心中想起したる事曾つて隱諱せず都べて我に對して言ふ、今達達の體例別乞官を以て重しと爲す。

別乞は即ち今回部の伯克二字の對音也、西域聞見記に曰く回部大頭目之を阿奇木伯克と謂ひ最も尊貴と爲す、生殺與奪惟ふに其爲す所、次では則ち伊什罕伯克亦統領の責有り、今秘史を按ずるに別乞を稱する者太祖異母弟別克帖兒撒察別乞忽察兒別乞脫古思別乞察兀兒別乞合赤温別乞必勒格別乞忽都合別乞有り皆尊貴の稱とす、惟ふに不里孛闊亦不里孛可と作す此の別乞二字と音同じく字異る、然れども其對音を核するに則一也。

兀孫汝ぢ巴阿鄰長の子孫なり汝ぢ別乞を做すべし。

巴阿鄰氏は巴阿里歹の後より出づ。

別乞を做す陛白馬に騎し白衣を著し坐して衆人の上面に在り。

按ずるに白馬白衣は蓋し回教也、輟耕錄に曰く國俗尚白し、白を以て吉と爲すと、西域水道記回人庫魯安書を引くに云ふ、其部初め女子有り阿郎固庫勒魯と曰ふ、天帝一丈夫をして女に向つて白氣を吹噓す、感じて而して身あり、子を生む麻木哈伊項と曰ふ回部王たり傳へて三世に至り蒙古法を習ふ、又傳へて十四世吐呼魯克吐木勒罕と爲す、年二十二嗣いで國主と爲る後二歳阿克蘇に獵す、回人に遇ひ瓜噶木巴爾法を授け伊黎に返る、又西域水

道記回部の事を述するに云ふ、西方畺克及び畺德那諸國有り、始め汗を青吉斯汗と曰ふ、其裔孫孤噶木巴爾回教を倡ふ第一世初祖たり云云、其の阿郎固庫と云ふは、即ち祕史の阿闌豁阿其青吉斯汗と言ふは即ち祕史の成吉思皇帝なり是れ蒙古の興るや、已に回教を習ふ故に別乞の設以て回教を宣揚す、亦其舊俗考證すべき也。

成吉思再び曰く忽亦勒答兒安達

即ち安答也、忽亦勒答兒王罕の戰に歿す、事前文七卷に在り、姚燧牧庵集忙兀公博羅驩神道碑畏答と作す、而して碑に云ふ畏塔其兄畏翼俱に太祖に事ふ、時に太疇盛疆畏翼謀つて之に往き歸す、畏答苦止して曰く、帝何んぞ汝ぢに負き是を爲すと、竟に去る之を追ふ復せず、泣を雪いで歸り獨り宣力せんことを請ふ、帝之に貳して曰く汝ぢが兄衆と皆往く獨り留りて何をか爲さんと、乃ち矢を折つて誓つて曰く終らざる所帝に事ふ此の矢の如き有りと、帝其誠に感じ約して按答と爲る云云、此文安達と稱す職として是故也。

前に厮殺の時先に厮殺すべき言ふ、功有る爲めに彼れか子孫をして孤獨の賞賜を受けしむ。

姚燧碑文によるに則ち其子醮木曷と名づく其孫瑣魯火都と名づく、其曾孫即ち世祖の朝平章政事博羅驩也。

成吉思再び察罕豁阿の子に對し。

即ち前文四卷の察合安不注也、此れと察罕豁阿四字對音其先揑兀歹氏に出づ、故に札木合答闌巴勒主惕の戰既に太祖に勝ち赤那思地面部長を以て之を烹る、又察合安を殺し其頭を以て馬尾に懸けて去る、前文四卷涅兀歹察合安は即ち其人也、察合安既に是役に歿す、故に成吉思其事を追溯して其子を恤む、譯文定字無し、但し其音を取る故轉寫して察罕豁阿四字と成す耳。

納鄰脫斡鄰曰く汝ぢか父我か前に謹愼す、答闌巴勒主惕地面に厮殺し、札木合に廢せらる(祕史凡ろ廢と言ふは皆殺の辭)今汝ぢ孤獨の賞賜を受くるを請ふ者、脫斡鄰曰く我か兄弟揑古思各部落內に散在す。

揑古は即ち揑兀の對音其衆舊と赤那思地面に居る、札木合察罕豁阿を殺す、其族逃遁して各部中に在り

我收集せんと欲す、成吉思彼に收集を許す、彼の子孫をして世襲管せしむ。

太祖又鎖兒罕失剌に對して曰く我が小時泰亦赤兀種の塔兒忽台乞鄰勤禿黑兄弟に捕へらるの時、汝ぢ父子我を匿し合答安女子をして我に奉侍せしめ我れを放出し來る、其思我が爲中日夜長く想ふ、汝ぢ泰亦赤兀の處より來る渥し今方に汝ぢに賞賜せん、汝ぢ何んの賞賜をか要すと、鎖兒罕失剌父子曰く、我れ篁兒乞の糧涼格地面を要し自ら下營するに在り。

朔方備乘曰く、色楞格河上源を齊老圖河と云ふ、三音諾顏部中左末旗に出で鄂爾哲依圖泊と爲る、東北流して中左旗右翼後旗を經、又東北流し德勒格兒河札薩克圖汗部東南より來り會す、轉じて東流し左翼中旗中末旗を經又東流し哈綏河西南より來り會す、始め色楞格河と曰ふ、又東流して土謝圖汗部界に入る、又東流して右翼左旗右翼右末次旗を經又東流して中左翼末旗と鄂爾坤河會を經又東北流して恰克圖を經、中國俄羅斯との互市處也、理藩院司官此に駐す、又北流して俄羅斯國界に達す、按ずるに篾兒乞䚟涼格地面今恰克圖の南に在り、

再び如何の賞賜を要せんか皇帝理會する者と、成吉思曰く、汝ぢに依れば彼の地面に自ら下營すと、再び汝ぢが子孫をして行かしめ彼に帶弓箭喝盞を許すべし九次罪を犯し罰するなき者と、又其子赤老温沈伯(前文二卷沈白と作す)に對して曰く前に汝二人言ひたる言語如何にして忘れ得ん、汝二人心缺少有るを想起し自ら來りて孛めよと、又曰く鎖兒罕失剌巴歹失里黑汝ぢ每に自在出征する時得たる處の財物圍獵の時得たる野獸都べて自ら要すと、鎖兒罕失剌は是れ前に泰赤赤兀種の脫迭干家人巴歹乞失里黑是れ也、格扯連放馬也、今倚仗せしめて我れ快活せんと。

云ふ自在快活は蒙古語の荅剌罕を封ずる三字の解也、輟耕錄に曰く、世皇江南を取る、大

軍黃河に次ぐ、舟楫なきに苦しむ、夜老叟を夢む曰く、當さに我れに隨ふて來れと、引いて一所に至り指して曰く此れ即ち是己と、明日河滸を循行し、夢中見る所を尋ぬるに忽ち人有り進んで曰く此間水淺渡る可しと、帝夢中の語を徵し謂つて曰く汝ぢ先づ涉れと、其人乃ち行く大軍之に從ふ、一も濟らざる無し、帝其功を旌し對へて曰く但し得て自在足る矣と、乃ち封して荅剌罕と爲す、此れによるに則ち蒙古語の荅剌罕は漢語の自在也、輟耕錄に又曰く荅剌罕は譯して一國の長と自由の意を得るを言ふ、勳戚に非ざれば與らず、太祖龍飛官制簡古惟ふに左右万戶次いで千戶に及ぶのみ、丞相哈剌哈孫の曾祖啓昔禮英材を以て千戶に擢任せられ荅剌罕の號を賜ふ、案ずるに啓昔禮は即ち乞失力黑の對音也。

成吉思再び納牙に對して曰く初め汝ぢ父子塔兒忽台乞里勒禿黑を捕へ來る時、汝ぢ曰く自己の主人如何にして棄捨して捕へ去ると就ち放つ、來つて我に歸順す、我れうれが爲め我れ曾つて此の人に曰く大道理を省へ得たりと、久しき後一件の事を委付す、今孛斡兒出で〳〵、右手万戶と做る、木合黎國王左手万戶と做る、汝ぢ中軍万戶と做る。

再び著別速別額台兩個に對して曰く汝ぢ自ら收集したる百姓を管して千戶と做すと。

蒙韃備錄に曰く又鶴博なる者あり、成吉思に隨ふて重兵を掌る云云、鶴博は即ち秘史の著別又即ち元史の哲伯也。

再び牧羊の迭該をして戸籍無きの百姓を收集し千戸となす。
再び百姓を分管する時木匠古出古兒。
前文四卷窟出沽兒と作す、其に命じて車輛を修造するを管せしむ、故に木匠と曰ふ。
管する百姓少なくば卽ち各管下百姓内より抽分し彼をして札荅剌種の木勒合勒忽と一同千戸と做なすべし、札荅剌種の祖は孛端察兒の子、札只剌歹と曰ふ、上文卷一に見ゆ、前文四卷木勒合勒忽亦木暢合勒忽と作す、蓋し馬群を牧養するを以て功あり。
初め共に國を立つるの人を合して万戸千戸百戸と做し都べて委付し賞賜す。
蒙韃備錄に曰く韃人鞍馬の間に生長す、兵を起す數十萬、畧文書無し、元帥より千戸百戸牌子頭に至り傳令して行く。
成吉思曰く前に我れ只八十人あり宿衛と做す、七十人を護衛散班と做す、今天衆百姓に命じ俱に我に属して管せしむ、我の護衛散班等各万戸千戸百戸内に一万人を選みて做す。
元史兵志曰く宿衛の士其の初め名數甚だ簡、後屢增して万四千人と爲す、之を古制に揆るに猶ほ天子の禁軍の如き也、然るに太祖より以後累朝御する所其數滋く多し、毎歲賜ふ所の鈔幣動もすれば億萬を以て計す、國家大費毎に此に斂す。
棟選の時各管幷び白身人兒子内に技能有り身材壯なる者を選棟し、我が前をして行かしむ

若し千戸の子なれば毎人弟一人伴當十人を帶ばしめ百戸の子なれば毎人弟一人伴當五人を帶ばしむ、牌子幷に白身人の子なれば毎人弟一人伴當二人を帶ばしむ。
兵志に曰く凡そ怯薛長の子孫或は天子より親信する所或は宰相より薦舉する所或は其次序を以て當つる所卽ち其職を襲ひ以て環衛を掌る、其官卑しと雖も論ずる勿き也、年勞既に久しきに及び則ち遂に擢んでて一品官と爲す。
其千戸の子伴當十人用ゆる所の馬匹本千百戸内に於て斂を科す。
兵志馬政篇に曰く元朔方に起る、俗騎射を善くす沙漠萬里、蕃息を牧養す、太僕の馬殆んど數計すべからず、牧人を哈赤哈喇赤と曰ふ、千戸百戸有り、父子相承けて事に任ず、夏より冬に及び水草を逐ふて行く、十月各本地朝廷に至る、歲九月十月を以てす、寺官馳驛を遣し閲視し其多寡を較す、駒を產する所有り、卽ち烙印勘を取り收除す、蒙古回回漢字文冊を造り以て聞ゆ、其總數蓋し知る可からざる也。
整治して彼に與ふる時父か分與したる家財を除き、定例に照して與ふ、其百戸の子は伴當五人牌子白身人の子は伴當三人用ゆる所の馬匹は只前例に依り彼に與ふ、若し千百戸牌子多人違ふ有らば加ふるに罪責を以てす、若し宿衛の時趨避して來らざる者あらば別に人を選んで補充す、彼の人發して遠處に去り若し人有り補充を願はば諸人阻當する勿らしむ。

元朝秘史卷十一

是に於て各千百戸成吉思の言語に依り揀選す、前の宿衛八十人を添して八百人に至る、成吉思添して一千に至らしむ、也客揑兀鄰に命じて頭千戸と做す。

即ち也客扯連なる如し、蓋し身を塔塔兒に投じ而して其二女也遂也速干皆皇后たりと雖も既に降るの後外戚を以て宿衛に列するを得。

前には帶弓箭の人四百人。

元史塔察兒傳に曰く火兒赤は橐鞬を佩びて左右に侍する者也。

原と者勒篾也孫帖額と不吉歹をして管せしむ。

前文七卷阿勒赤歹放馬の人赤吉歹、王罕に報いて來襲す、此不吉歹或は卽ち其人、前文赤字軍誤なるやを疑ふ也。

散班と帶弓箭の人入直す時に分れて四班と作す。

輟耕錄に曰く國朝四怯薛太官あり、怯薛は宿衛供奉の士に分る、凡そ上の起居飲食諸服御の政令怯薛の長皆總ぶ。

班は也孫帖額をして長と爲す、一班は不吉歹をして長と爲し、一班は火兒忽苔をして長と

爲す、一斑は卜剌哈をして長と爲す、今添して一千と作し也孫帖額をして長と爲す。

前に孛斡兒出親人斡哥列扯兒必。

孛斡兒出の弟斡歌連也、連の轉聲を列と爲す、扯兒必註前文卷に見ゆ、

原と護衛散班を管す、添へて一千に至る、彼をして一千木合里親人不合一千亦魯該親人阿勒赤歹一千朶歹扯兒必一千朶豁勒忽一千主兒扯歹親人察乃一千阿勒赤的親人阿忽台をして一千を管せしむ。

元史求赤台傳に曰く子怯台材武人に過ぐ、太宗より世祖に及び四朝に歷事す勞を以て德清郡王に封じ金印を賜ふ、丙申德州戶二萬を賜ひ食邑と爲す、至元十八年食邑を增して二萬一千戶と爲す。

阿兒孩合撒兒管する者平時只散班と做し出征の時前面の勇士と做さしむ、各千戶の內選揀して得たる宿衛八千帶弓箭二千通計護衛一万とす、成吉思曰く此れ我が護衛と做す、人以後大中軍と做さしむと。

兵志に曰く也可怯薛太祖自名を以て之を領す、其也可と云ふ者天子自ら領するを言ふ也錢詹事大昕元史拾遺に曰く蒙古語の也可は官名也、可は第一の稱、此志也可太傳有り又也可怯薛有り職官志也可札魯忽赤有り皆第一の義を取る。

成吉思再び曰く護衛を分つて四班と做す、一班不合をして管せしむ、一班阿勒赤歹をして管せしむ、一班朶豁勒忽をして管せしむ、一班朶豁勒忽をして管せしむ、四個を長となして委付す、班に入る時長たるの官人は扈衛の散班を領して宿す、三夜一次交替す。

兵志に曰く凡ろ宿衛は每三日一たび更ふ、申酉戌日第一怯薛と爲す、卽ち也可怯薛、亥子丑日を第二怯薛と爲す、寅卯辰日第三怯薛と爲す、己午未日第四怯薛と爲す、輟耕錄曰く都赤は乃ち侍御の親近に至る者を云ふ、官と雖も朝に隨ふ諸司に隨ふて亦三日一次輪流入直す骨朶を肩に負ひ環刀を腰に佩く、或は二人四人多きに至つては八人、時に若し上鶴を御搖すれば則ち墀陛の下に在り蓋し姦回を虞るを以て也。

若し班に合入する人有り入らざる者笞三十第二次又入らざる者笞七十第三次事無き故又入らざる者笞三十七遠方に流去する者護衛を掌る官人凡ろ班を換ふる時些言語を省會するもの一遍、若し省會せすば則ち掌管する者罪あり、既に省會し號令に違ふものあらば前例により罪す、護衛を掌管する官人我言語を得ずば管する所の人を休む、擅に自ら罰する者凡ろ罪ある者必ず奏聞し斬る可きは斬り打つ可きは打つ、我言語に依らざれば管する所の人を條子を以て打つこと舊の如し或は拳を以て打つもあり。

成吉思再び曰く我が護衛散班外に在りては千戶の上に在り、護衛散班の家人外に在りては

百戸牌子の上に在り、若し外に在りて千戸護衛散班と同等と做す、相爭鬪せんか、外に在りて千戸罪せらる。

太宗六年紀に曰く條令諸千戸萬戸に越ゑて前行する者本鏃を以て之を射る。

成吉思再び輪班の官人に對して曰く帶弓箭の散班及厨子等。

兵志に曰く凡そ宿衞怯薛の職を預る者冠服弓矢、食飲文史庫馬廬帳府庫の屬に分つ。

班に入る時白日各自らの職事を管し日落つる時帶弓箭のものは弓箭を以て。

兵志に曰く其怯薛執事の名は則ち弓矢鷹隼の事を主とす、曰く火兒赤昔寶赤怯憐赤上に侍して刀を帶び及弓矢を執る者を去都赤闊端赤と曰ふ。

廚子は器皿を以て

兵志に曰く烹飪以て上に飲食を奉ずる者を博爾赤と曰ふ、元黃溍集宣徽使荅失蠻碑の寶兒赤は蓋し古の內饔の職最親密と爲す。

各宿衞の人に分付し外面に出でて宿す、次日抬湯の後都べて入り來る舊の如く各自らの職事を管す、日晩るる後宮の前後を繞り往來の人を捕へ次日問ふ。

輟耕錄曰く宰輔の日淸光に近しと雖も然れども奏請する所あり、都赤固より敢ゑて進まず、今中書各省に移咨す、或は須らく奏文を備錄する事有り、內に必ず都赤某を云ふ此

の故を以てなり。

宿衞交替の時符驗を付與して入らしむる者宿衞夜間宮を繞り門を把りて宿す。

若夜人有りて入らんか、彼れの頭を以て打破し肩甲を斫毆す若し急事有りて來り告ぐれば先づ宿衞を見一同帳房の後に來つて說く、宿衞上面向間人の行坐するを許さず、宿衞數日人の闖ふを許さず、違ふ者鞍馬衣服を奪ふ、與る者先づ倚伏すべき人額勒只吉歹あり。

定宗紀に曰く二年八月野里知吉帶に命じ思蠻部兵を率ゐて征西すと、即ち額勒只吉歹其人也。

曾つて宿衞に在り上行く、宿衞の爲めに捕へらる。

刑法志に曰く諸れ帶刀を擅にして殿廷に闌入する者杖八十七にして流遠す。

成吉思曰く汝ぢ宿衞大雨雪の夜或は晴明の夜或は敵人紛擾厮殺の夜我が帳房の周圍に宿衞し我が身心をして皆安からしむ、凡そ緊急の事有らば曾つて怠慢せず。

此を以て我れ大位に到り坐するを得たり、今我が此の吉祥至誠の宿衞を呼んで老宿衞と作す、斡哥列扯兒必入班の七十個の散班を呼んで大散班と作す、阿兒孩の勇士を呼んで老勇士と作す也、孫帖額等弓箭を帶ぶる者を呼んで大帶弓箭と作す。

兵志に曰く四怯薛の長天子或は又大臣に命じて之を總ぶ。

九十五千戸內より選揀したる人を我か貼身の親護衞と作す、久しき後我子孫此の護衞を想

ふ我が遺念の如し能く抬舉し怨を懷く休らしむ恰かも福神の如くに看んと。

成吉思再び内裏の扯兒必官並に放頭口、宿衛に曰く内裏の房子、車、両旄纛、生熟飲食器皿等物宿衛の提調すべき者たりと。

兵志に曰く車馬を輿する者を兀剌赤莫倫赤と曰ひ、駱駝を牧する者を帖麥赤と曰ふ、羊を牧する者を爾赤と曰ふ。

若し缺少あらば只彼に問ふて求むべし、凡そ衣食の給散宿衛の言語を得ずして給散する休らしむ、若し給散の時必ず彼より始むべし、凡そ内裏人ありて出入すれば宿衛整治すべし、酒局を管する者營盤を管する者は宿衛人より選充し圍獵の時圍獵車前に一半を留むべし、成吉思再び曰く我出征せずば宿衛亦出征するを許さず、若し違ふ者あらば軍を起す頭目罪有り。

兵志に曰く宿衛の士之を古制に揆るに猶ほ天子の禁軍の如し、是故事無ければ則ち各其事を執り以て禁庭を宿衛するに備へ、事有らば則ち天子の指使する所となる。

宿衛は彼をして出征せしめず、只彼は常に我を護衛し我圍獵の時我れに隨ひ平日又車輛を收拾する等の事を管せしむべし、此の如く容易ならざる彼の重複を怕れ彼が出征を許さゞる所以なり、太祖再び曰く宿衛の内人をして失吉忽禿忽と一同事を斷せしむ。

元史百官志に曰く斷事官は秩三品刑政の屬を掌る、國初嘗つて相臣を以て之に任ず、其名甚だ重し、其員數增損常ならず、其人別ち皆御位下及中宮東宮諸王各怯薛台等人を投下して之を爲す。

凡そ衣甲弓箭器械等の給散を收拾する者官騙馬内馱網索を收拾する者宿衛只兒賓と段匹を給散する者。

扯兒賓は即ち扯兒必。

凡そ下營の時帶弓箭の散班をして也孫帖額帶弓箭と帳殿右邊に行かしむ、不合等散班帳殿の左邊に行く、阿兒孩の勇士帳殿の前面を行く、宿衛の帳房車輛を管する者帳殿の左右を行く衆散班と護衛し並に内裏家人等朶奔扯兒必常に帳殿の前を行く。

太祖忽必來に命じ合兒魯兀惕忽を征す。

合兒魯は即ち黑魯二字の對音明代の哈烈是れ其地也陳仁錫明世、法錄西戎傳に曰く哈烈は一名黑魯嘉峪關を去る一萬三千里撒馬罕西南元の駙馬帖木兒の子沙哈魯居る焉、國人魯速檀と稱す、華言の君王也、東俺都淮八剌黑諸城有り、並に其國に隷す、石城十里平川に居る川廣さ百里四面大山常に少雨を燠す、市中流水斷たず、貿易は銀錢三等を以てす、飲食七箸なし、髡首衣白し、巴旦杏鎖服花毯金銀銅珊瑚琥珀珠翠馬獅黑白文獸を產す、田美

にして穫多く桑蠶に宜しき也、又案ずるに合兒魯は元人多く哈喇魯と作す、黄溍集荅失蠻碑に云ふ、其先西域人哈剌魯氏系に出づ、曾祖馬馬集賢學士を贈り正に大夫を奉ず、中山郡公に追封す、太祖皇帝六年其國主阿爾思蘭龍居河に來覲す、前文九卷乃蠻古出魯克委兀合魯種を過ぎ行く、故と古出魯克を追ひ之を征するに因る也、合兒魯は其他當さに今の伊犂西南合兒魯に在り又匣剌魯と作す、元史也罕的斤傳に曰く也罕的斤匣剌魯人祖匣答兒密かに立ち斡思堅國哈剌魯軍三千を以て來りて太祖に歸す。

其主阿兒思蘭即ち投降す。

阿兒思蘭は獅子也、蓋し獅子の義を取り以て名と爲す、遼史語解に曰く阿爾斯蘭は獅子也太紀に曰く、太祖六年辛未西域哈剌魯部主阿荅蘭罕來降すとあるは即ち其事也。

來りて太祖に拜見す、太祖女子を以て彼に賜ふ。

太祖又速別額台に命じ脫黑脫阿の子忽禿赤老温等を追ふ。

忽禿は即ち前文八卷の忽都九卷の忽都合勒赤老温前文八卷赤剌温と作す、二人太祖の追ふ所と爲り額爾齊斯河を渡りて西走す、康里欽察部に投せんと欲す、太祖鐵車を以て之を追ふ也。

追ふて垂河に至る。

忽禿等を以て窮絶して回り來る。

初め者別に命じ古出魯克を追ふ。

本記に曰く太祖三年再び屈出律罕を征す、屈出律罕契丹に奔る、此時契丹已に金の滅す所と爲る、云ふ所の契丹は即ち西遼耶律大石耳、

追ふて撒里黑崑面に至る。

地理志西北地附錄撒列哈歹撒里黑崐有り、即ち西遊記の算端二字の對音也、算端の地面即ち其都する所の邪米思干也、西遊記に曰く邪米思干大城は其城灘岸に因りて之を爲す、算端氏の未だ敗れざるに方り城中常に十萬餘戶漢人工匠城中に雜處す、岡有り高さ十餘丈算端氏の新宮あり焉。

古出魯克を以て窮絶して回り來る。

元史曷思麥里傳に曰く哲別曲出律に令し首め西域に往かしむ、可失哈兒、押兒牽、斡端諸城の若き皆風を望んで降附す、今案ずるに哲別は即ち者別、曲出律は即ち古出魯克の對音也、可失哈兒は今の喀什噶爾、押兒牽は今の葉爾羌、斡端は今の和闐也、元史郭室玉傳に曰く帝西蕃を伐たんとし其城多く山險に依るを患へ、室玉に政取の策を問ふ、室玉曰く其城をして天上に在らしめば則ち攻む可からず、如し天上に在らざれば至つて則ち取らん

と甲戌帝に從つて契丹遺族を討つ、古徐鬼國訛夷朶等の城を歴其兵三十餘萬を破り別失八里別失蘭等の城を収む、次で忽章河に在りて西人拒戰す、追殺殲んと盡す、兵を進めて撫思干城を下す、次で暗木河にて護峭兵五萬を破る、大將佐里遂に諸壘を屠り馬里四城を收む辛巳等端罕乃瀚國を破り兵を引いて撫思干に據る、帝城を棄て南走し鐵門に入るを聞き大雪山に屯し、室玉之を追ふて遂に印度に奔る。

委吾種の主亦都兀惕

黄溍集行中書省左丞亦輦眞碑に云ふ、偉吾兒人上世其國の君長たり、國中兩樹合して瘿を生ずる有り、四兒死し而して弟五兒獨り存す、以て神異と爲し而して之に敬事す、因て妻はすに女を以てし讓るに國を以てす、約して世婚を爲す而して其國政を乘る即ち今の高昌王自ら出づる所也、西遊記に據るに則ち畏午兒主居る所即ち昌八剌城に在り、西域水道記に曰く烏嶺可克西南四十里孟克圖嶺有り昌吉河其北麓に發ち昌吉毀治を經其城寧邊と曰ふ極四十三、度四十五分西二十九度二十六分其地元の彰八里なるを疑ふ也、元史地理志に云ふ、畏厄兒の地第三十四彰八里と曰ふ、亦昌八里と作す、亦摻八里と作す、耶律希亮傳に云ふ昌八里に至り李進傳軍潰る捨へらる、餘說に據るに則ち委吾主居る所當に今の昌吉縣の地なり、本紀に曰く太祖四年春畏吾兒國來り歸す、六年畏吾兒國主亦都護來覲

す、即ち秘史稱する所の委吾主亦都兀なり。

使臣阿惕乞剌黑等を差し成吉思の處に來りて曰く俺れ聽く皇帝聲名雲淨日を見氷消水を見る如し歡喜せざるなし、若し恩賜を得んか願くば第五子と做り氣力を出さんと。

通鑑輯覽に曰く宋寧宗嘉定元年冬十二月輝和爾國蒙古に降る、輝和爾國唐宋より四度にして火州に遷り巴什八里の地を統ぶ、契丹に臣す、是に至り遂に部を舉げて蒙古に降る按ずるに巴什八里は元史地理志に別失八里と作す、西域水道記に謂ふ今の濟木薩是其地也、元歐陽元圭齊集偰氏家傳に曰く、北庭は今の別失八里城也、徐松新疆賦註に曰く古城西六十里濟木薩城と爲す、城北唐の李衛公築く所北庭都護府舊址あり、別失八里は即ち長春西遊記の鼈思馬城なり。

成吉思曰く汝ぢ來る女子亦汝に與ふ第五子亦汝をして做さしむ、是に於て亦都兀惕金銀珠子段匹等の物を以て來り成吉思に拜見す、遂に阿勒阿勒屯と云ふ女子を與ふ。

元史巴而求阿而咸的斤傳に曰く曾孫火赤哈兒的斤嗣で亦都護と爲る、至元十二年都哇卜思巴火州を圖む亦都護圍を受く、凡ろを六月都哇書を以て矢に繫ぎ城中に射る曰く我亦大祖皇帝の諸孫且つ爾祖嘗つて公主に尚す矣云云、亦都護は即ち秘史の亦都兀其所謂公主を尚するは即ち阿勒阿勒屯なり、然らば則ち委吾主は蓋し都火州其主は蓋し即ち巴而

求阿而忒斤也、元史諸公主表高昌公主、也立可敦公主、太祖の女亦都護巴而述阿兒忒的斤に適く所謂也、立可敦は即ち阿勒阿勒屯なり。

虞集道園學古錄高昌王世勳碑に曰く畏吾兒の地和林山有り二水出づ焉曰く虎忽剌曰く斡靈哥一夕天光あり樹に降る両河の間に在り、國人即ち之を候するに樹瘿を生ず人の妊身する如し、然るに是より越にて九月又十日瘿裂け嬰兒五を得、其最穉きを卜吉可罕と曰ふ既にして彼遂に君長と爲る、傳ること三十餘君是れ玉倫的斤と爲す、數ば唐人と攻戰す之を久ふして和親を議す、唐金蓮公主を以て玉倫的斤の子葛勵的斤に妻はす、和林に居る別力跛力荅哈婦居る所の山なるを言ふ、又山有り曰く天哥里干答哈天の靈山を言ふ也、南に石山有り、胡力答哈と曰ふ福山を言ふ也、唐使至つて曰く、和林の盛强此山有るを以てすと乃ち的斤に告げて曰く福山の石國主に於て用ゆる所なし而して唐人見るを願ふ、遂に之を焚く沃するに醇酢を以てす、輦去る後七日玉倫薨ず是れ自り國災異を多くす、乃ち交州に遷る、今の火州也、別失八里の地を統ぶ北阿木河に至り南酒泉に接す、東兀敦甲石哈に至り西西藩に臨む百七十餘載太祖皇帝朔漠に龍飛す、是時に當つて巴而求阿而忒的斤亦都護の位に在り、亦都護は其國主の號也、天命を知りて歸する有り、國を擧けて入朝す太祖之を嘉す、妻はすに公主を以てす曰く也立安敦待つに子道を以てす、列蕃第五者必那

演と罕勉力鎖潭回回等の國を征す、又太祖に從つて倘沙卜里を征し河西を征す、皆大功有り、薨ず、次子玉古倫赤的斤嗣て又薨ず、子馬木剌嗣で又薨ず、子火赤哈兒嗣ぐ、至元中海都の亂に都哇卜思巴等兵十二万火州を圍む、六月解かず、都哇矢を以て城中に射つて曰く我れ亦太祖諸孫何ぞ以て我れに歸せざるを、爾ぢが祖嘗つて主に尙す、能く女を以て我れに歸せば、我れ則ち兵を休めんと、火赤哈兒曰く吾れ豈一女を惜んで民命を救はざらんと其女を以て諸を城下に墜とし之に與ふ、都哇去り卜其功を嘉して重く賞す、妻はすに公主巴巴哈兒定宗の女を以てす、火州の南哈密力の北に屯す、軍至つて大に戰ふ力盡きて之に死す、子紐林方に幼闕に詣りて兵を請ふ、卜其志を壯とし妻はすに公主不魯罕を以てす太宗皇帝の孫女也、主薨ず、又其妹八卜又を公主に尙す、嗣で亦都護と爲す、仁宗皇帝稽を始むる故封じて高昌王と爲す、公主薨ず、公主は兀剌兒安西王阿難答の女を尙する也、兵を火州に領す、復畏吾兒城池に立つ、延祐五年薨ず、子一長を帖睦兒補化と云ひ、次を篤吉帖睦兒補化と云ふ、公主に巫兒只思蠻を尙し、嗣で亦都護高昌王と爲す、天麻元年樞密の事を知る、明年左丞相を拜し其弟鎮吉に讓り嗣で亦都護高昌王と爲す、虞集碑、委吾國亦都兀世系たるを叙す、至つて詳悉と爲す、其虎忽剌と云ふは即ち祕史の土兀剌河にして其斡靈哥と云ふは即ち斡涼格河也、也立安敦は即ち阿勒阿勒屯の對音蓋し安敦及阿屯は即

ち唐す、則ち祕書の可敦漢語の夫人也、列諸を第五子と云ふは秘史と相合す、其者必那演と云ふは即ち者別也、那演は即ち諾延の對音、罕勉力は即ち秘史の篾力克也、鎖潭は即ち筌灘及び瑣擅の對音、即ち秘史の西遼を稱して乞塔古兒罕となす者也、其阿々と云ふ即ち波斯也、又按ずるに委吾地明代に入りて仍ほ火州と稱す、明世法錄に曰く、火州は漢の車師前後王地也、元帝より戊己二校尉を置く車師前王庭に屯田す、和帝の時班超西域を定め復た校尉を置く兵を領する五百人車師前部に居る、高昌壁は地勢高敞を以て名を得、後魏初闕伯周自ら高昌王を稱し麴嘉を作す、唐貞觀中其國を平く、西州及び都督府を置く而して西突厥車師後王地に據る、尋ねて以て來降す、庭州飲蒲類等の縣を置く、其後吐蕃を陷る回鶻有り雜居す、亦西州回鶻と稱す、宋時使を遣して貢献するに因り太宗供奉官王延德を遣し、高昌に使し望鄉嶺を經伊州を歷乃ち至る、地熱ふして五穀を產す、貂鼠白氈蒲桃酒を出す、樂は琵琶箜篌を多しとす、俗騎射を好くし婦人油帽を戴す、之を蘇幕遮と云ふ、開元七年歷を用ゆ、三月九日を以て寒食と爲す、佛寺皆唐額を賜ふ、其國師子王北庭山に避暑す、煙氣あり涌起す、夕に至りて光焰炬の如し縣する所たるを疑ふ火州と稱する者也、元畏兀兒と號す、馬哈木に隷す、明に入り火州と號す、永樂十二年吏部員外郎陳誠使至る、其國蕭條零落するを言ふ、東荒城故址有り即ち古の高昌治漢西域戊己校尉の居る、所東哈

密を距て西亦力把力に連る、南闐北に接す、北瓦剌に抵り東南肅州に至る一月程。

元朝秘史卷十二

兎兒年

林木中の百姓を征す。

本紀に曰く二年丁卯按彈不兀剌二人を遣し乞力吉思に使す、此れ即ち兎兒年林木中の百姓を征する事也、前文卷九太祖豁兒赤に對して曰く額兒的失河に順ひ林木内の百姓汝ぢに從つて下營す、此れ今の阿爾台山以北額爾齊斯河一帶に近き地也、朔方備乘に曰く康熙三十九年聖訓、鄂維斯地方遙遠、西北隅に僻處するを云ふ、曩者人を遣して疆界を分畫す即ち尼布楚地以東を獻じて界と爲す、尼布楚等處原布拉戚吳郎海諸部落地に係る、彼れ皆林居す、貂を捕ふを以て業と爲す、人稱して樹中人と爲す、後鄂維斯强盛遂に之を並呑す已に五六十年矣、聖謨を恭譯するに方に知る、尼布楚以北西金山に至る樹中人の稱あり此れ即ち林木中の百姓也。

不合をして路を引かしむ。

不合は木華黎の弟也、木華黎傳に云ふ世斡難水東に居る故に林木中百姓と鄰を爲す、斡亦剌種の忽都合別乞、萬斡亦剌種に比し先に來りて歸附す。

斡亦剌元史本紀猥剌部と作す、萬斡亦剌は本紀に萬字無し、紀に云ふ乃蠻太陽罕篾里乞部長脫脫克烈部長阿憐太石猥剌部長忽都花別吉諸部と兵を合し勢頗る盛なり、帝戰に與り太陽罕を禽殺す、諸部軍一時皆潰ゆ、明日餘衆悉く降る、此れ即ち忽都合別乞來降の事也既にして復蔑里乞部を征す、其長脫脫奔太陽罕の兄卜魯欲罕なり、元年帝即位す、復兒的石河上を征す、三年再び脫脫及び屈出律罕を征す、時に斡亦剌部我前前に遇ひ戰はずして降る、因つて用ひて向導と爲す、也兒的石河に至り篾里乞部を討ち之を滅す、此れ斡亦剌後ち來歸附する事也、史に依るに則ち乃蠻卜魯欲罕太陽罕の子屈出律罕、脫脫奔とを擒にす斡亦剌本と蔑里乞と鄰を爲す、而して額爾斯河に近き者也、是れ林中百姓の一也。

蹴ち拙赤を引きて往いて万斡亦剌を征す、入りて失黑失惕地面に至る。

萬斡亦剌は影元槧本禿綿斡亦剌と作す、葢し禿綿は譯して萬數と言ふ也、事物異名數目門一万蒙古語を土滿と曰ふ、土滿は即ち禿綿猶は衆を言ふ耳、入りて失黑失惕の地に至る葢し斡亦剌の南境なり、太祖三年紀を以て之を考するに即ち額兩齊斯河上の地耳。

斡亦剌禿巴思諸種都べて投降す。

元槧本列する所曰く不里牙惕曰く巴兒渾白兀兒速惕曰く合合納思曰く康合思曰く禿巴昔共六部今輟耕錄を按ずるに蒙古氏族八あり魯忽歹は巴兒渾なるを疑ふ、兀兒速惕は即ち

地理志西北地欽察の阿速也、合合納思は則ち地理志西北地の撼合納也、志に云ふ、猶ほ布囊を言ふか如し口わにして腹巨、地形此れに類す因つて名づく、康合思は則昂可剌河なるを疑ふ、其河吉剌志思東北に在り、謙河に會し北後海入る、志に云ふ昂可剌は水に因りて名と爲す、晝長く夜短し日沒時羊肋を炙る熟すれば東方已曙すと、唐史骨利斡國是也、是れ皆林木中の百姓なり矣。

萬乞兒吉思種の處に至る。

元槧本禿綿乞兒吉速惕と作す、譯して衆きを言ふ、乞兒吉思種也、元史地理志西北地附錄曰く、吉利吉思は初め漢地の女四十人を以て烏斯の男と結婚す、此義を取りて以て名つく其地南、大都を去る一万有餘里元朝に父父其民を折して九千戶と爲す、其境長さ一千四百里廣之に半ばす、謙河其中を經、西北流す、又西南水有り阿浦と曰ふ、東北水有り玉順と曰ふ、皆巨浸也、謙に會し而して昂可剌河に注ぐ、北して海に入る、又曰く謙州は河を以て名と爲す、大都を去る九千里吉利思東南に在り、又曰く至元七年詔して劉好禮を遣し吉利吉思撼合納燕州益蘭州等處斷事官と爲す、又本紀に云ふ太祖二年按彈不兀剌二人を遣し乞力吉思に使す、又哈剌八鄉魯傳に曰く世祖哈剌は乃顏の故地阿八剌忽也、魚を產す今城を立つ而して兀速惕合納思乞都吉思三部人を以て之に居る、其城を名づけて肇州と曰ふ、劉

都西使記に曰く室羅城迤西麻阿に至る馬を以てす、或は曰く乞里乞四馬に易ふるに犬を以てす、又虞集句容郡王碑に曰く土土哈金山の地を掠む、詔して進んで乞里吉思を取る、明年春欠河に次ず云云則ち乞兒乞思の地金山以北に在り謙河に近き也、國朝方觀承松漠草詩注に曰く阿爾泰の東三十三庫伯有り、其中峯特出する者を汗庫伯と曰ふ、下希爾吉思湖に臨む、流泉飛瀑頗る靈秀を著す云云今湖を以て希爾吉思と名づく三を考するに當に即ち元代の乞兒吉思故址なり。

其官人也迪亦納勒等亦歸附す。

元稗本其人名を敍して曰く也迪曰く亦納勒曰く阿勒迪額兒曰く斡刻別克的斤。

白海青白鶻馬黑貂鼠を以て來つて拙赤に拜見す、

本紀に曰く太祖二年野牒亦納里郭阿里替也兒部皆使を遣し來りて名鷹を献ずと、即ち其事也。

失必兒等種より以南。

失必は即はち鮮卑の對音也、北史に曰く魏の先黃帝軒轅氏より出づ子を昌意と曰ふ、昌意の少子封を北國に受く、大鮮卑山有り、因つて以て號と爲す、朔方備乘に曰く俄羅斯東土錫伯利郭本と鮮卑の舊壤故に錫伯の名有り、今黑龍江境錫伯一種有り、亦席伯と作す、亦

席北と作す、既に索倫に非ず亦蒙古に非ず、即ち鮮卑遺民也、一統志に西畢爾斯科と作す、瀛寰志畧に西伯利と作す、文田案ずるに元史求赤傳に曰く求赤は太祖の長子也、國初親王を以て西北に分封す、地極めて遠し京師を去る數万里驛騎急行して二百餘日方に京師に達す 所謂西北二字は即ち失必兒の對音なり、柳邊紀畧に曰く稱する所の席百は一に席北と作す、又西北と作す、船廠邊外西南五百餘里に在り云云、亦鮮卑遺族を指して西北二字を稱するの證也、元史亦失必兒と稱する者あり、玉哇失傳に曰く玉哇失阿速人海都と亦必兒失必兒の地に戰ふと、此れ錫伯利の元史に見ゆる者也。

林木中の百姓。

朔方備乘に曰く元時林木中の百姓今俄羅斯阿穆哈拜商以南の地也。

拙赤都を收捕し遂に乞兒吉思万戸千戸を領す、並に林木中百姓の官人海青鶻馬貂鼠等の物を以て回り來つて成吉思を拜見す、成吉思斡亦剌種の忽禿阿別乞先に來りて歸附する以て扯扯亦堅と名づくる女子を彼の子亦納勒赤に與ふ、拙赤の女豁害罕を以て亦納勒赤の兄に與ふ。

阿剌合と名づくる女子を汪古種に與ふ。

蒙韃備錄曰く成吉思皇帝女七人二公主を阿里黑百と曰ふ、因つて俗に必姫夫人と曰ふ、曾

つて金國亡臣白部に嫁し死して寡居す、命して白韃靼を領せしむる事日に婦女數千を逐ふの事あり、凡そ征伐斬殺皆自己に出づ、元文類二十三閣復撰駙馬忠獻王闊里吉思碑に曰く曾祖阿剌兀思剔吉忽里を高唐忠武王に追封す、曾祖妣阿里黑祖駙馬孛要合武毅王と謚す、祖妣皇曾祖姑阿剌海別吉齊國太長公王と爲る、太祖の兵中原を下す思武嚮導を爲す異議ある者の爲めに害せらる、武毅尙幼、王妃阿里挈夜遯れ、難を害中に逃る、太祖忠武死するを聞き悼痛已まず、雲中既にして下る、詔して王妃及武毅に求む、武毅自ら太祖と西域を征す、年十七北平王に封ず、齊國太長公主に尙す、仍ほ世婚を約す、交友の好を敦ふし按達忽荅と號す、元史諸公主表に曰く趙國大長公主阿剌海別吉、太祖の女武毅王孛要合に適く、今前文八卷を按ずるに汪古種主は則ち阿剌忽失の吉惕忽里也。

即ち拙赤に對して曰く我兒子中汝ぢ最も長ず、今日初めて出征す、曾つて八馬をして生受せしめず、彼の林木中の百姓都べて歸附す、我れ汝に百姓を賞與すと。

源流に曰く青吉斯汗次子珠齊をして托克瑪克地方に汗位に則かしむ、珠齊は則ち拙赤林木中百姓は殆んと則ち其時稱して托克瑪克と爲す。

再び孛羅忽勒に命じ豁里禿馬惕種を征す。

則ち孛羅兀勒は元史に博爾忽と作す、本傳但し太祖に事へ第一千戶と爲り敵に殁するを

謂ひ禿馬惕の事を謂はず、蓋し博爾忽傳と名づくると雖も實は其曾孫月赤察兒傳耳、禿馬惕史に吐麻部と作す、朔方備乘に曰く博爾忽傳の吐麻當に今の俄羅斯東境白哈兒湖左右に在り、此れ殆んど禿馬二字を以て上文都兒麻の對音と爲す、都兒麻は額兒河水に近く則ち今の額兒齊斯河の地也。

其官人歹都禿勒已に死し。

博兒忽傳の吐麻部主忽剌歡合兒當に則ち此人也。

其妻孛脫灰塔兒渾百姓を管す、孛羅忽勒判る時三人をして大軍の前に行かしむ、日晩るに至り森林徑路の問に入る、彼の哨質人後より至り路を截つを覺らず孛羅忽勒を殺す。

本傳に曰く吐麻部既に服し而して叛す、太祖博爾忽及び都魯伯に命じ之れを討平す、博爾忽其地に卒す、元文類二十三元明善太師淇陽王月赤察兒碑則ち孛羅忽勒の曾孫也、碑に云ふ姓許愼氏、曾つて太父博兒渾太祖早年より已に神聖見はる心を臣事に委ね大業基を肇む、身百戰を歷て敵に薨ず、是時官制簡古止みて第一千戶と爲す、後淇州に封し又沅州六千戶を食む、推忠佐命著節功臣開府儀同三司太師上柱國を贈り淇陽王に追封す。

太祖聞知して大に怒り親征せんと欲す、孛斡兒出兒木合里諫止す、別に朶兒伯朶黑申に命じ再び往いて征せしむ、朶兒伯朶黑申嚴に軍馬を整へ先つ把截の處に於て僞つて聲勢を張る、

則ち忽剌安不合獸の行きたる小徑に從つて行く、又軍人畏懼して行かざるを恐れ人に令して各條子十根を背はしむ、若し行かざれば此れを用ひて懲戒す、每人又各錛斧鋸鑿等の器を以て當路の樹木を除去し行いて山頂下に至る、禿馬惕地面の百姓を視るに天窓上下面を看る如し、大軍直進す、彼れ卒に到るを想はず就ち筵席の間に擄とす、先に豁兒赤官人忽都合別乞二人禿馬惕に捕へらる、孛脫灰塔兒渾の處に在りて其二人捕へられたる緣故なり、因つて太祖豁兒赤に三十の妻を娶るを許す、豁兒赤禿馬惕女子容色美なるを知り三十個を娶らんとし彼の百姓反す、彼を捕ゆ、太祖知る、忽都合別乞、林木中百姓の動靜を知るに因り彼をして去らしむ。

此語に依るに則ち禿馬惕百姓は林木中の一種也。

亦彼れか爲めに捕へらる、既にして禿馬惕を收捕する後孛羅兀勒に古禿馬惕の百姓を賞與す。

孛羅兀勒子有り脫歡、職を襲ふ故賞するに百姓を以てす、元明善淇陽王碑に云ふ、博兒渾夫人錢魁淇陽王夫人に追封す、子脫歡父官を嗣ぎ、憲宗皇帝四たび不庭を征するを佐く推誠翊運佐理功臣開府儀同三司上柱國を贈り淇陽王に追封す。

豁兒赤に三十個の禿馬惕の女子を與ふ、忽都合別乞の處に孛脫灰答兒渾を與ふ。

太祖百姓を以て母親及弟と諸子に與へて曰く其國を立つるは是れ母親兒子中最も長ずるは是れ拙赤、諸弟中最も小なるは是れ斡惕赤斤なり。

世系表に曰く烈祖神元皇帝五子、次四は鐵木哥斡赤斤所謂皇太弟國王斡嗔那顏なる者也、次五別里古台王云云是れ斡赤斤尙最小に非ず、此の最小と云ふは是れ母を同ふする四人に就て之を言ふ、蓋し宣懿太后生む所四子に止る也。

母親幷斡惕赤斤の處に一葛の百姓を與ふ、母親少きを嫌ひ曾つて聲を做さず、兒子拙赤に九千を與ふ、察阿歹に八千を與ふ、斡歌歹に五千を與ふ。

世系表太祖六子次二察合台太子前文七卷斡闊台と作す、九卷斡歌台と作す、十卷以後皆斡歌歹と作す、即ち太宗英文皇帝史に諱窩闊台と稱する者也。

拖雷に五千を與ふ。

即ち睿宗皇帝也、世祖皇帝忽必烈の父。

弟合撒兒に四千を與ふ。

世系表烈祖神元皇帝五子次三哈準大王、哈準の子濟南王、接ずるに只吉歹哈準は即ち前文一卷の合赤溫の對音惟ふに秘史の合赤溫戰功無し其早歿を疑ふ、則ち此乃の阿勒赤歹乃ち太祖の親族即ち按ずるに只吉歹の對音也、此の阿勒赤歹は前文十一卷の阿勒赤歹と當

さに是れ両人此れ太祖の親屬なり、彼れ亦魯該の親人宿衛に備ふる者也。

別勒古台に一千五百を與ふ。

世系表烈祖神元皇帝五子次五別里古台王、秘史に異母弟と稱する者也。

叔父有り荅阿兒台、先に曾つて王罕太祖に從ふて彼れを廢せんと欲す。

即ち把兒壇弟四子荅里台斡赤斤、前文六卷荅阿里台と作す者也、秘史凡り廢と言ふ者皆之を殺さんと欲す。

孛斡兒出等三人太祖に對して曰く、自らの家自ら壞れ自らの火自ら滅すと用じく汝が父親の遺念只此の叔父を留む、如何にしてか彼を廢するに忍びん彼れ既に事を省みず、汝ぢ汝が父親休絶するを想ふ可しと、是に於て太祖心中辛酸怒り遂に息む、太祖訶額侖母親幷に斡惕赤斤に一萬の百姓を與へ、古出等四個官人に委付す。

前文三卷に曲出と作す、十卷亦古出と作す、蓋し曲と古、本と是れ對音、故に古出魯克、元史に亦曲出律罕と作す也、歐陽元僎氏家傳に曰く亞思弼次子岳璘帖穆爾偉兀書に精し、年十五太祖に從つて征討し戰功多し皇帝斡眞師傅を奏求す、上公に命じ公諸王子を訓導し以て敦睦仁厚殺さゞるを以て第一義と爲す、上聞いて之を嘉す、則ち岳璘は則ち四官人の一たるに似たり。

拙赤に忽難等三個の官人を委付す

前文十卷忽難、闊闊搠思迭該兀孫額不干と四人此に三人を云ふ者蓋し闊闊搠思を以て察阿歹に改むる故也。

察阿歹に合剌察兒等三個官人を委付す。

合剌察兒は巴魯剌思氏に出づ前文四卷に見ゆ。

又曰く察阿歹性剛、子細客搠思をして早晩面前に語らす可きもの。

闊客搠思は即ち闊々搠思なり本、拙赤を輔導するを以てす、察阿歹拙赤と相能からざる故に又改めて闊々搠思をして之を諫めしむ、他日大位を以て大宗に與へ而して二人を遠方に封ず、蓋し太祖深意有り焉。

斡歌歹に亦魯等二人を委付す。

前文十一卷亦魯該有り太祖其親人阿勒赤歹を以て千戸を管せしむ、當さに即ち此亦魯と一人たる也、惟ふに亦魯該親人阿勒赤歹、太祖の親人亦阿勒赤歹と名づく一は千戸を管し一は二千戸を管す、必ず一人に非ず、當に之を分別すべし。

拖雷に哲歹等二人を委付す。

即ち四卷の哲台十卷の者歹なり。

合撒兒に者卜客を委付す。

帖列格禿第三子木華黎の叔父也、前文四卷に見ゆ。

阿勒赤歹に察兀兒孩を委付す。

前文四卷に察兀兒罕と作す、者勒篾の弟也、七卷に又察忽兒罕と作す。

晃豁塔歹種の蒙力克七子有り。

即ち晃豁壇氏其先抄眞斡兒帖該の子晃豁壇に出づ。

第四子闊闊出と名づく、巫を爲す、帖卜騰格理と喚ぶ、其兄弟七人比惡、太祖の弟合撒兒を打ち來りて太祖に見ゆ太祖止に他事に因り怒る、曰く汝ぢ平日曰ふ人敵する能はずと、何を以てか彼に打たると、是に於て合撒兒淚を垂れて起ち去る、三日太祖を見ず、帖卜騰格理來りて曰く、長生は天の聖旨神來つて告げて曰く、一次帖木眞をして百姓を管せしむ、一次合撒兒をして百姓を管せしむ、若し合撒兒を以て去らざれば事未だ知る可からずと、太祖此語を聽き其夜即ち往ひて合撒兒を捕ふ、古出等有り、此緣故を以て太祖の母親阿額侖に告く、阿額侖白駝の駕車を用ひ連夜起行す、日出づる時合撒兒の處に至る、正に太祖に見へ合撒兒の衣袖を捕へ冠帶を去り問ふ時母親の到るを見大に驚恐す、母親怒つて車を下り合撒兒を解き冠帶を與ふ、盛怒して盤坐し兩乳を膝上に置き問ふて曰く汝ぢ見たりしや此れ汝ぢが喫

したる乳なり何んぞ合撒兒を罪す、汝ぢ自ら骨肉を以て殘毀す、初め汝ぢ小なる時曾つて我か此の一個の乳を喫したり、合赤温斡惕赤斤兩舊此の一個の乳を喫し得ず、惟ふに合撒兒我が此の二個の乳を都べて喫せり我胸中をして寬快ならしむ、此れが爲めに帖木眞の心技能有り、合撒兒氣力有り射を能くす但し凡ろ百姓叛かば弓箭を用て收捕す、今敵人已に盡絕す彼を要せずと、太祖母親の怒息むを見て即ち曰く怕るるは怕れ羞ぢたりと、言ひ畢りて遂に退く、後太祖母親をして知らしめず、合撒兒の百姓を奪ひ去り一千四百を與ふるに止む、後阿額侖知り心內憂悶す、早く老る所以也、合撒兒の處初め委付する者卜客走つて巴兒忽眞地面入る、

今俄羅斯巴爾古錫穆和屯、尼布楚城西北約七百餘里に在り、城西柏海爾湖東岸に濱す、南に巴爾古錫穆河あり、西して湖に注ぐ、朔方備乘に見ゆ。

後九等の言語の人有り都べて聚りて帖卜騰格理の處に在り、多く太祖の處に聚る人の如し、斡惕赤斤の百姓有り亦往いて投ず、斡惕赤斤荒豁兒をして往いて取らしむ、帖卜騰格里に打たる、馬鞍に鞠し彼の身上に在りて回り來る、次日斡惕赤斤自ら去る、其兄弟七人圍んで曰く汝ぢ如何にして敢ひて人を差し來つて百姓を取ると捶打せんと欲す、斡惕赤斤恐懼して曰く我れ嘗さに人を差さず彼れ曰く汝ぢ既に然らず嘗に罪に伏すべしと、令して後面に跪

かしむ、斡惕赤斤次日清早太祖未だ起きざる時入つて跪きて此の緣故を說く、說き罷みて哭す、太祖未だ言はざる間孛兒帖兀眞夫人欠伸す。

兀眞は卽ち夫人也、蒙古語未だ顯れず故に綴るに漢語を以てす。

胸を遮り淚を垂れて曰く、彼れ如何にしたるか、晃豁壇の前にて合撒兒を打ちたり。

蒙力克の先晃豁壇と名づく、晃豁壇は海都の孫抄眞斡兒帖該子。

今又斡惕赤斤跪かんとす、是れ何んの道理ぞ、汝ぢ今在り、彼尙ほ汝ぢが檜柏の如く長成したる弟を殘害す、久しき後汝ぢ老いなば亂麻群鳥の如き百姓を如何にして服せん、汝ぢ小なる惡しき兒子を管すと、說き罷みて哭す、太祖斡惕赤斤に對して曰く帖卜騰格理今來る時汝ぢ由りすと是に於て斡惕赤斤身を起して去る、三個の力士を準備す、少頃くにして、蒙力克七子を領して來る、帖卜騰格理酒局西邊に至り坐す、斡惕赤斤彼れが衣飮を以て捉へて曰く昨日我れをして罪に伏せしむ、我れ今汝と比試すと、斡惕赤斤外に向つて去る、其間帖卜騰格理帽を火盆邊に落とす、其父拾ふて之を懷中に置く、太祖曰く汝ぢ出でて氣力を鬪はせと、出づる時門外原と準備したる三個の力士迎へ捕ふ、彼が脊骨を打斷し左邊の車梢頭に棄つ、斡惕赤斤卽ち去つて帖卜騰格理に曰く、昨日我を罪に伏さんす、今日彼と比試すと卽ち臥す、推辭して起くるを肯んぜず、元來亦是れ平等の伴當なり、其父蒙力克覺り淚を垂れて曰く我

れ皇帝未だ起創せざるの先伴當と做りて今日に到る。

烈祖毒せらるゝ、時太祖を以て察剌合老人父子に託す、王罕桑昆許婚を以て、太祖を陷れんと欲するに及び其を諫止するに非ざれば則ち危し蒙力克の功自ら錄す可し。

其間六子便ち門を塞し火盆を圍む俄に衣袖を拂ふて立つ太祖驚いて起ち曰く躲けしめよ我れ出で去るべしと、就ち出で立つ、磐弓箭の散班圍みて立つ、太祖帖卜騰格里、を見るに已に死す、人をして帳房を用ひて死尸を遮り便ち營を起ちて去る、帖卜格格理死初め死尸を遮りたる張房の門と天窓とを皆壓蓋し人をして看守せしむ、第三日に至り將に曉ならんとす、天窓を開くに死尸自ら出で去る、審視するに果して然り、太祖曰く帖卜騰格理我が弟を打つ又故なく讒譖くたるか爲め天彼を受けず彼れが身命をも都べて將ち去れりと遂に蒙力克を叱責して曰く自らの子敎訓する能はず我と齊しからんとす、彼れを送りたる所以也と、我れ若し早く汝ぢが此等の德性を知らば只好く汝をして札木合阿勒壇忽察兒と一例發し來らん又曰く若し晨言ひたる語夕り改む、晩間言ひたる語早晨改む、人に言ひ說かれざる莫きか、羞耻せらざんや先づ說き定めて汝か死を免るに在りと。

前文九卷孛斡兒出十卷孛羅兀勒皆九次罪を犯して罰を免る餘人死を免る無し、然るに孛斡兒出木合黎同じく賞賜を受く則ち必ず死を免る、且つ九卷明に云ふ直ちに汝ちか子孫

に至りて絶えず則ち帶礦の盟なりと其死罪を免るる、知る可し。

帖ト騰格理死後蒙力克父子氣勢遂に消滅す、

元史忠義伯八兒傳を案ずるに伯八兒は即ち蒙力克の孫也、伯八兒の父脫倫稱して闍里必と爲す、他日太祖に從つて西域を征す、是れ但し帖ト騰格理を誅するの外其子孫仍ほ富貴を失はず、正史に見ゆる者此くの如し。

元朝秘史卷十三

後羊兒年

羊兒は辛未を謂ふ、宋寧宗嘉定四年、金の衛紹王、大安三年也「耶律楚材湛然集」中庚午元歷を進むるの序に曰く、中元の歳は庚午に在り、天宸衷を飲き南伐を決す、辛未の春天兵南に度り、五年ならずして天下畧定す。

成吉思金國を征す。

金史「衛紹王本紀」に曰く、衛紹王諱は永濟世宗の第七子、章宗泰和八年詔を遺して衛王を立つ、位に柩前に即く、大安三年四月「大元大祖　法天起運聖武皇帝來征す、元史本紀に曰く元年丙寅始めて金を伐つを議す初め金「宗親咸補海罕」を殺す、帝復讐せんと欲す適金の降俘金主「璟」の暴虐を具言す、帝乃ち議を定む、然れども未だ敢て輕しく動かざる也五年春金來り伐たんと謀り、烏沙堡を築く、帝遮別に命して襲ふて其罕を殺し、遂に地を畧して東す、初め帝歳幣を金に貢ぐ、金主衛王允濟をして貢を靜州に受けしむ、帝允濟の禮たらざるを見る、允濟歸り兵を請ふて之を攻めんと欲す、適金主璟殂す、允濟位を嗣ぐ詔りして當に拜受すべきを傳ふ、帝金使に問ふて曰く、新君誰と爲す、曰く衛王也、と帝遽

かに南面し唾して曰く、我謂へらく中原の皇帝は天上の人たりと焉ぞ知らん此等庸懦亦之を爲すと即ち馬に乘じて北行す、六年辛未帝自ら將として南伐す。

先づ撫州を取る

金史地理志曰く西京路撫州錄甯軍節度使遼秦國大長主建爲州章宗明昌三年復た刺史を置く、桓州の支那となす、柔遠を治す、明昌四年司候司を置く、永安二年陞つて節鎭と爲る軍名を鎭甯と爲す、西北路招討使に轉任す、「密齊顯必喇王敦必喇」拿憐求花速宋葛忒斜渾四明安之に隷す、縣を領す四、柔遠集甯豐利威甯是也、通鑑輯覽注に曰く、撫州の地今の蘇尼特に在り、乾隆府廳州縣志に曰く鑲黃等四旗牧廠張家口北百里に在り、金撫州を置き、柔遠縣を治す正黃等四旗牧廠張家口西北二百里に在り、金の撫州集甯縣地たり、正黃旗察哈京張家口西北三百二十里に在り、金の撫州威甯縣地たり、外藩蘇尼將二旗張家口北五百五十里に在り、本漢上谷及代郡北境たり、後瀕烏桓卑之に居る、唐突厥の據る所、遼撫州を置く金の西京路に屬す、元の興和路地たり、明の蒙古蘇尼將據る所たり。

野狐嶺を過ぐ。

西遊記に曰く、野狐嶺を度り高きに登りて南望し太行諸山を俯視すれば、晴嵐愛す可し北顧すれば只寒沙衰草中原の風此れより隔絕す、元の劉秉忠歲春集第二卷居庸關を過ぎ也

乎嶺を越ゆるの詩あり也乎は即ち野狐也王揮玉堂佳話張僞輝紀行記を采る、又扼胡嶺と名づく、明金幼孜北征錄に曰く、永樂八年万全を發し城北を過ぐ、城西諸山積雪を見る德勝口に入るに山皆碎石堆栗の如し關に入れば兩峽石壁削るか如く二十餘里にして野狐雲嶺に上る上つて、東南諸峰を指して曰く、此に至つて山を看る則ち盡く下に在り、明本增邁淡墨に曰く成祖北征して野狐嶺に至る上れば碑あり、識して曰く嶺天を去る十八里其寒膚を裂く、此地極北紫微北斗己に南に觀るべし、「元文類二十四忠憲王安同碑に曰く木華黎忠武に謚し太祖大位に即き左萬戶と爲る、金師二十萬を野獵領に破る北師紫荊口より、入る讀史方輿紀要に曰く嶺は萬全野北三十里に在り。

又宣德府を取る。

金史地理志に曰く、西京路宣德州遼晉武州を改めて歸化州雄武軍と爲す、大定七年更めて宣化州と爲す八年復更めて宣德と爲し縣を領する、二宣德宣平是也、元史地理志に曰く順寧府は金の宣德州たり、元の初め宣甯府たり、中統四年宣德府と改む、此に縣るに太祖宣德府を取る時尙府に升らず、蓋し明人飜譯時中統後の地地名を以て之に入る。

「者別」古亦古揑克二人をして頭哨となし居庸關に至らしむ、金史地理志曰く、大興府昌平縣は居庸關に在り、國名、查剌合攀と云ふ、方輿紀要に曰く、居庸關は懷來縣に在り、錢良

擇出塞紀畧に曰く、居庸關を度るに山路崎嶇四五十里にして關を出で平地に入る金道と名づく二十五里にして榆木驛二十五里にして懷來衛あり。

禦備堅固なるを見「者別」誘ひ戰ふ可きを說く、是に於て軍馬を返せるに金軍望み見て早くも軍馬を驅りて追擊し、宣德府の山角に至るや者別忽ち引返し、金國の續き來る軍馬を慶にす

本紀に曰く、帝金將定薛を野獵嶺に敗り、大水溪豊利等縣を取る、秋七月遮別に名じて烏沙堡及烏月營を攻め之を拔く、八月宣平の會河川に戰ひ之を敗る、九月德興府を拔く、居庸關守將遁走す遮別遂に關は入り中都に抵る、

成吉思の中軍續きて到來し、金國の契丹女眞等の緊要軍馬を打破れり。

元史兵志を案ずるに契丹軍女眞軍あり、蓋し皆全國を伐つの時先後來り降る者也。

此の居庸關に至り殺したる人、恰も爛木堆を爲す如し。

宋謝宋伯齊軍記に曰く、余嘗て黏罕剋河「東の幹離不」大兵を引いて涿州より安肅に入り開封府を陷るるを觀る順河に至る凡そ一百八十餘州八百七十五縣蹂踐殘滅何んぞ紀するに勝ふべけん而して貞祐元年十一月より二年正月に至り、韃靼あり河東河北山東山西を殘破す、復た一千七府九十餘州鎭縣二十餘處數千里の間殺戮皆盡く、城郭邱虛金帛子女牛

羊馬畜書席卷して去る、屋宇悉く燒燬す、此れ殺戮の大果報也。

「者別」居庸關を取る元史札八兒火者傳に曰く、金人居庸の塞を恃み鐵鎖を以て門を關し蒺藜を百餘里に布き守るに精銳を以てす太祖師を進め關を距る百里にして前む能はず札八兒を召して計を問ふ、對へて曰く此れより北すれば黑樹林中間道あり、一人能く騎行すべし、臣嘗て之を過ぐ、若し兵をして枚を銜ましめは、薄暮能く達す可しと、乃ち札八兒をして輕騎前導せしめ、日暮谷に入る黎明諸軍已に平地に在り、南口に向つて疾驅す金鼓の聲天より下るが如し、金人睡り未だ醒めず驚き起つ時已に支ふ可きなし、鋒鏑及ぶ所流血野を被ふ、關既破れにして、中都大に震ふ。

成吉思關に入り龍虎台に至り屯す。

北征祿に曰く永樂八年二月十一日黎明清河を發し晩沙河に至る、十二日早起沙河を發し午時龍虎台に至る、十三日龍虎台を發し居庸關を度る、云云即ち龍虎台は居庸關內に在る也、何喬遠名山藏に曰く、順天府北一百二十里居庸關と曰ふ、秦始皇長城を築き息國の居庸此に徒る淮南子九塞居庸關一に居る、龍虎台は居庸國內に在り。

軍馬を遣り北平等の郡を取る。

元史本紀に曰く、皇子求赤察合台窩闊台兩人雲內東勝武朔等州を征し之を下す、是冬金の

北境に駐蹕す、七年正月帝昌桓撫州等の州を破る、金將紇石烈九斤兵三十萬を率ゐて來り援け韃兒觜に戰ひ大に之を敗る、秋西京を圍む金の元帥左都監奥屯襄師を率ゐて來り援く、帝兵を遣し誘ふて密谷口に至り之を逆擊し盡く殪す、復西京を攻む帝流矢に中り遂に圍を撤す、蒙韃備錄に曰く金虜韃人の西京を陷るを聞き始めて大に驚恐す、乃ち國中の精鋭を竭し、忽殺虎元帥馬步隊五十萬を率ゐ之を迎擊し虜大に敗る、又再び山東河北等の處及隨駕謀衛等人馬三十萬を集め高琪を大元帥となし再び敗る、是を以て韃人燕京城下に迫る、是の戰や金虜百年の兵力を罄し鎖折潰散殆んど盡く其國遂に衰ふ、後來凡圍河北山東燕北等の處虜皆敢て其鋒を嬰せず。

者別東昌を攻めて克たず。

此れ元の東昌路是時金の博州たり、秘史を選する者は元人未だ其沿革を攷する暇あらず故元の地名を以て之に入る、金史地理志に云ふ、山東西路博州宋博平郡毀を領する五即ち聯城堂邑博平茌平高堂是也、元史地理志曰く、東昌路は唐の博州宋の河北東路に隷す金の大名府に隷す、毀を領する六聯城堂邑莘縣博平茌平邱毀是也。

歸り來り六泊、再び返り去る、每人馬一匹を牽き晝夜兼行す、金人をして意はしめざるの中東昌を取る。

本紀に曰く冬十二月遮別東昌を攻む拔けず、即ち引き去る、夜馳還して襲ひ之れに克つ者別東昌を取つて歸り成吉思と相ひ合ふ、初め北平攻めらるゝ時、金王京丞金主に對して曰く。元史本紀太祖八年金西京留守「忽沙虎其主兒濟を弑す」豐王を迎へて之を立つ時の亟相は則ち高琪也金史衛紹王本紀に曰く、大安三年九月平章政事千家奴參知政事「和碩」撫州より軍を宣平に退く、河南大名路軍逃歸す九月千家奴和碩會河堡に敗績し、居庸關失守す大元前軍中都に至る、中都戒嚴す是時德興府廣州昌平壞來縉山豐潤密雲撫寧集寧東平灤を過ぎ南清滄に至る、臨潢遼河を過ぎ、西南忻伐に至る、皆大元に歸す、至寧元年八月右副元帥「呼沙呼」兵を以て宮に入る、自ら監國都元帥と稱す、帝宮を出て故邸に到る道に宦者李思甲をして帝を邸に害す、九月甲辰宣宗即位す、宣宗本紀に曰く、貞祐元年十一月和を大元に乞ふ、百官に詔して尙書省に議す、十二月平章政事圖克坦公百丞尙書右丞相に進む、尙書右丞承暉都元帥兼平章政事に進む、左副元帥珠格高琪平章政事に進む、二年三月承暉を遣して大元に詣り和を請ふ。

天地の氣運大位交代の時到れり、達達常に强盛我等の軍馬を以て殺絕し我が屛障たるの居庸關を奪へり、若し再び彼等を擊滅するに非ずば恐らくは我が軍馬潰散せん。

本紀に曰く八年秋七月宣德府に克ち遂に德興府を攻む、皇子拖雷駙馬赤駒先登して之を

拔く、帝進んで懷來に至る金の行省完顏綱元帥高琪之に戰敗す、追つて古北口に至る、金兵居庸を保つ、可咸薄剌に詔して之を守らしむ、遂に涿鹿に趨く、金の西京留守「忽沙虎」遁走す、帝紫荊關に出で金師を五回嶺に敗り、涿易二州を拔く、契丹訛魯不兒等古北口を献ず、遮別遂に居庸を取る、可咸薄剌と會す是秋兵を三道に分ち皇子、求赤察合台窩闊台に命じて右軍と爲し、太行に循つて南す、保遂、安肅、安定、邢洛、磁相、衛輝、懷孟を取り澤潞、遼沁、平陽、太原、吉隰を掠し、汾石嵐忻伐武等州を拔いて還る、皇弟哈撒兒及斡陳那顏拙赤斛薄剌左軍と爲り、海に導つて東す、薊州平灤遼西諸郡を取つて還る、帝と皇子拖雷中軍と爲り、雄霸莫安河間滄景獻深祁鑫冀恩濮開滑博濟泰安濟南濱棣益都淄濰登萊沂等郡を取る、復た木華黎に命じて密州を攻め之を屠る、史天倪蕭勃迭は來降す、帝中都に至り三道の兵還る、大口に合屯す、是歲河北軍郡縣盡く拔く、惟ふに中都通順眞定清沃大名東平德邳海州十一城下らず、九年甲戌春三月中都北郊に駐蹕す、諸將勝に乘じて燕を破らんことを請ふ、帝從はず乃ち使を遣して金主に諭して曰く、汝か山東河北郡縣悉く我有と爲る汝存すところ惟燕京のみ天既に汝を弱む、我復た汝に險に迫らんか天其れ我を何んとか謂はん、我れ今軍を還す、汝師を犒ひ、以て我諸將の怒を弭む能はざる耶と。寧ろ達達皇帝に歸順し彼をして退軍せしむるに若くなし若し、退軍したる時我等再び協議

するところあるべし、又聞く達々の軍馬は水土に合はず、瘟病を發生すと、今達々の面前にて女子幣帛を以て彼に送り試に其從ふや否やを見んと、金主王京と圖り遂に成吉思に歸順し、公主及び金銀段匹等の物を王京をして成吉思に與へしむ。

金史宣宗紀に曰く、貞祐二年三月庚寅衛紹王公主を奉じて大元太祖皇帝に歸す、是を公主皇后と爲す、本紀に曰く金主遂使を遣して和を求む、衛紹王女岐國公主を奉じ及び金帛童男五百馬三千を以て献す、乃ち其亟相完顏福興を遣し帝を送つて居庸を出づ。

遂に攻城の軍馬を退く、王京親しく送つて莫州撫州山嘴に至り辭し回る。

金史地理志に曰く、河北東路莫州は宋の文安郡たり、貞祐二年五月降つて鄭亭と爲す、任邱縣を領す、元史地理志に曰く保定路は本と清苑縣唐鄭州に隷す金順天軍と改む、又河間路州唐鄭州を置く、尋で改めて莫と爲す縣を領する二莫亭任邱。

軍人金銀等物を絹布を以て包み駄に載せて去る、成吉思此れより合申種を征す。

唐の河西節度使の地外藩相沿ふ、稱して河西と云ふ、音轉じて合申と爲すのみ、今西套厄魯特游牧の註五卷七卷に見ゆ、木紀に曰く、乙丑の歲帝西夏を征し力吉里寨を拔く、落思城を經、大に人民及其槀駞を掠めて還る、二年丁卯再び西夏克斡羅孩城を征す、四年己巳帝河西に入る、夏主李安全其世子を遣し師を率ゐて來戰し之を敗る、其副元帥高令公を獲

たり、克兀剌海城其大傳西壁氏を俘とす、進んで克夷門に至り、復た夏師を敗り、其將嵬石合公を獲河水を引いて之に灌く、隄決して水外に潰ゆ、遂に圍を撤して還る、太傳訛苔を遣し、中興に入り諭を招す、夏主女を納れて和を請ふ。

其主不兒罕降る。

不兒罕は即ち夏主李安全の蕃名也、註前文五卷に詳なり。

女子名察合的を以て成吉思に献ず。

元史后妃表に曰く太祖察兒皇后弟三鄂爾多を守る、曰く我れ聽く皇帝の聲名恐らくは來る有らん、今我れ汝が爲めに一臂の力を添へん、我れ本と是城郭内に住する百姓たり、若し緊急征進の事あらば急に到る能はさらん、恩賜を蒙る時、我か地面に產する駱駝毛、段子、鷹鶻を以て皇帝に貢せんと、既にして本國の駱駝を驅り集め送り來る。

元史謝仲温傳に曰く父睦歡資財を以て鄉に聞ゆ、大兵南下するを聞き客烏拉城に轉ず、太祖西夏を攻め其城を過ぐ、睦歡其師と共に降る。

成吉思前に征進し、金主歸順し、數多の幣帛を得、更に合申主歸順し多數の駱駝を得歸つて撒阿里客頭兒の地に至り屯す。

案ずるに撒阿里客頭兒の地は故の乃蠻の東抗愛山の麓に在り、前文八卷所謂者別二人撒

里客額兒に至る、乃蠻康合兒合山頭にありて哨望するに遇ふ、故に其地康合山麓に在るを知る、康合は即ち沆海、又即ち今の抗愛也、下文尙金國を征す、太祖安んぞ遽に抗愛に返るを得ん、此れ必ず將に西域諸國を征せんとするなり、方に此地に在て駐蹕すべく、否らざれば則ち歸りて行宮に蹕らん、亦必ず撒阿里客額兒に到らざる也、本紀金を征して居庸關を出づ、後魚兒濼に避暑す則ち、情事と相近し、此時尙ほ未だ漢北に歸らざるを以てのみ、後成吉思使臣主卜罕を遣し好を宋に通せしむ、金家の阻む所となる、是を以て狗兒の年成吉思再び金國を征す。

狗兒の年は太祖九年甲戌宋の甯宗嘉定七年金の宣宗貞祐二年也。

成吉思自ら關を取ることを思ふ。

本紀太祖末年左右に謂つて曰く、金の精兵潼關に在り、南連山に據る、北大河を限る、遽に破り難し、若し道を宋に取らんか、宋金世讎必ず能く我に許さん、則ち兵を唐鄧に下し直ちに大梁を樹たんか金必ず兵を潼關に徵せん、然して數萬の衆を以て千里赴援せば人馬疲敝至ると雖も能く戰ふ能はず、之を破るや必せり、太祖の諭此くの如し、故に此次好を宋に通ず本道を假らん事を思ふ其自ら潼關を取る、亦精兵の在る所を以ての故也。

者別に命じて、居庸關を攻む、金主聞知し亦列等三人に命じ兵を領して關を守らしむ。

亦列と移剌の二字は對音なり耶律楚材湛然集從容庵錄の序自ら稱して移剌楚材と云ふ、金劉祁歸潛志に曰く、凡ろ耶律の姓皆移剌と書す此の亦列は即ち移列乃ち遼姓也其時金國亂軍契丹軍あり、均しく遼人なり、故に遼將を以て之を統ぶ、此の遼將の姓は耶律也、忽剌安迭格列軍人を以て頭鋒となし關を守る（所謂女眞軍也）成吉思關に至り金兵大に至るを見彼れと對敵す、金兵稍退く、拖雷古出二人其陣を横衝す、金の忽剌安迭格列軍並に亦列等の軍大敗し、殺人野に滿つ、金主聞知し都を汴梁に遷す、

本紀に曰く九年甲戌夏五月金主汴に遷す「完顏福興」及參政「抹撚盡忠」其太子守忠を輔し中都に留守す、六月金の亂軍斫谷等其主師を殺して來降す、三模合石抹明安と斫荅等に詔して中都を圍ましむ、秋七月金の太子守忠汴に走る、十年乙亥春正月、金の右副元帥蒲察七斤通州を降す、二月木華黎北京を攻む、金の元帥烏古倫寅答虎城を以て降る、寅荅虎を以て留守となす、興中府元帥石天應來り降る、三月金の御史中丞李英等帥を率ゐて中都を援け霸州に戰ひ之を敗る、夏四月克清二州を順へ五月庚申金の中都留守完顏福興藥を仰いで死す、抹撚盡忠城を棄てて走る、明安入りて之を守る、乙職里を遣して金主を諭し、河北山東の未だ下らざる諸城を以て來り献す、帝號を去りて河南王となす、從はず、是秋城邑を取る八百六十有三、石抹也先傳に曰く也先は金人奚部長たり、大祖兵を朔方に起すを

聞き、匹馬歸り來り曰く、東京は金の根本、傳檄して定むべき也と、太祖木華黎に命じて先鋒となす、也先金人新に東京留守を易へ將に至らんとするを諜知し邀つて之を殺す、門を守る者に謂つて曰く我れ新留守也と、府中に入り令を下して易へて將を置き部伍を佐く三日木華黎至る地を得る數千里兵十萬、守臣寅荅虎等四十七人を降す、金人其根本の地を喪ひ、始めて議して河南に遷す。

其後金兵餓に困む、人皆相ひ食む、成吉思歸り、拖雷古出二人功あるを以て行賞す。

成吉思北平失剌客額地面に至る時。

此れ所謂北平は即ち今の京師也、元に在つては大都路たり、金に在つては中都路たり、其北平と稱する者蓋し明初祕史を飜譯時、元人の舊稱を削り興朝の新號を用ふ、故に北平と曰ふ也、秘史言ふ所の客額兒は大率庭を建つるの所、金人都を大興府に立て、貞元中都を定むるの時、稱して中都と云ふ、故に蒙古語に客額兒と云ふは失剌皇城を建つるの義宮殿の黄屋なる遼史語解に曰く、實喇は黄色也と、是れ其義なり、金史地理志曰く、中都路海陵貞元元年都を定む、燕は乃ち列國の名なるを以て京師と呼ぶに當らず、遂に改めて中都となす、府一節鎮三刺郡九縣四十九鎮七を領す、大興府は天會七年河北を廢して東西路となす時東路に屬す、貞元元年今名に更む、明人北平錄曰く洪武元年秋七月征虜大將軍徐

達副將軍常遇春諸將を臨清に會す、馬步舟師を率ゐ進んで通洲に至る元主報を聞いて大に懼る、三宮后妃太子を集めて北行し、上都を出奔す、達等齊化門外に至り、一鼓にして全城を克す、八月上都を破る、元主遂に遁れて沙漠に去る、應昌府に駐す、冬十月遽至り詔して大都を改めて北平府となす、明何喬遠名山藏に曰く、順天府は洪武の初め北平府たり永樂の初め改めて順天府と爲す、又虞集句容郡王世績碑を案ずるに曰く、海都の叛するや皇子北平王諸王の師を帥ゐ、祖宗興龍の故地を鎭す、之を斡歡河に敗り諸部の衆を北平に還す、則ち北平の名或は元に始まる也。

其皇城を稱して黃と曰ふ者鄭曉今言に曰く、宏治甲子虜中脫走者云ふ、聞く虜中黃裏を擄せん欲す、黃は京城也云云、彼の黃裏は即ち失剌客額兒の解也、蒙古皇城を呼んで黃となすの義見るに足る可し。

者別已に居庸關を取り兵を引いて來り會す、初め金主都を遷す時、其臣合荅に命じて燕京に留守せしむ。

本紀に曰く、太宗三年鉤州を克し、金將合達を獲、然るに皆留守の職に非ず、且太祖燕を攻むる時の事に非ず、金史衛紹王紀曰く、大安三年四月西北路招討使鈕鈷穆を遣す、合打和を乞ふ、即ち此の合荅なり元史地理志に曰く、大都路は唐の幽州范陽郡にして遼燕京と改

む金都を遷して大興府と爲す。

成吉思汪古兒等三人に命じ往て其府庫を收む、其金帛數目を計す、金臣合荅金帛等物を以て汪古兒等に獻ず、失吉忽秃忽曰く。

四養子の一也、是時斷事官なり、太祖本紀に曰く、太祖十年五月忽都忽を遣し帑を中都に收む、即ち是人也、太宗紀に曰く、六年秋七月胡土虎那顏を以て中州斷事官となす、亦即ち此の忽秃忽也、元文類耶楚材碑太宗即位し詔して戶口を括し大臣忽覩虎を以て之を領す、丙申七月忽覩虎戶口を以て來り、議を上りて諸州郡を割裂し、諸王貴族に分賜す以て湯沐邑となす、亦即ち此の忽秃忽也。

昔は中都の金帛皆金主に屬す。

元史地理志に曰く十年燕を克す初めは燕京路たり、大興府を總管す、世祖改めて中都と爲す其大興府仍ほ舊の如し、是れ中都と云ふ者、未だ大都路と改めざる以前の稱也。

今や中都の金帛已に成吉思に屬す、如何してか敢て擅に取らん、遂に其献を卻く、獨り汪古兒阿兒孩合撒兒其献を受く、事畢つて歸るに及び成吉思三人に問ふ、曾つて献を受くるや否と、失吉忽秃忽前言を具陳す、成吉思汪古兒を責め失忽秃忽を賞して曰く汝我か爲めに偵察をなすべしと。

金主汴梁に至る。

元史地理志に曰く汴梁路金に南京と改む、宣宗南に遷都す、金亡んで歸附す、司一縣十七州五を領す、開封祥符俱に郭に倚る。

譽首成吉思に歸附す乃ち其子騰格里をして百人を領して入侍せしむ。

騰格里は金主珣太子守忠の番名也。

是に於て成吉思北平より居庸關を經て回る。

本紀に曰く十一年丙子臚朐河行宮に還る。

合撒兒に命じ右手軍を領し大寧より。

大寧は金の北京路大定府、大定縣地此れ亦元人秘史を撰する時、元代地名を以て之に入る也、金史地理志曰く北京路は府四節鎮七刺郡三縣四十二鎮七寨一△五十六を領す、大定府北京留守司を置く、即ち遼の中京たり、統和二十五年建てて中京と爲す、國初之に因る、海陵貞元元年更に北京と爲し留守司を置く、元史地理志に曰く、大寧路は本奚都たり、唐初其地營州に屬す、貞觀中奚酋克都內附す、乃ち饒樂郡を置く遼の中京たり、大定府は元初北京路たり元の七年に至り北京を改めて大寧路と爲す、司一縣七州九を領す、義州興中州州高州錦州利州惠州川州建州。

女眞を經過す。

元史地理志に曰く開元路は古の肅愼の地、隋唐に黑水靺鞨と云ふ、唐初渠長阿固即始めて來朝し、其地を以て燕州となし黑水府を置く、其後渤海盛んにして靺鞨皆之に屬す、渤海浸弱契丹の攻むる所と爲る、黑水復其地を擅にし、東海に頻し南高麗に界し、西北契丹と接壤す、即ち金國眞祖の部落也、初め女眞と號す、後遼の興宗諱を避け改めて女直と云ふ元姚燧夾谷公神道碑に曰女直は古へ肅愼氏の國語にして女眞たり、遼の興廟宗眞諱を避、け改めて直と爲す。

若し歸附すれば即ち彼の中邊郡より浯剌納浯二江を經語剌は即ち烏剌の對音にして國語の江を謂ふ烏喇と云ふは今の黑龍江を指すなり納浯は即ち腦溫の對音にして今の腦溫江也又愛滹江となす、徐錫齡熙朝新語に曰く盛京長白山高二百餘里綿々千里に互る、鴨綠混同愛滹三江、出づ皆今盛京の地たり、龍沙紀畧に曰く元中土に入り、腦溫江黑龍江に沿ひ驛を江岸に置く、殘趾猶ほ存する者有り、黑龍江は源北山に出づ其上流は敖嫩河と爲す敖嫩は源阿母巴興安諸山の南に出づ、東流六百里科勒蘇河と合す、又東北八百里衆流を受けて黑龍江となる、北して泥撲處河に會す、又三百里を北流す、凡そ一千五百餘里にして復東南流する六百里額蘇里に至り精奇尼江と合す、又曰腦溫江は盛京通志の諾尼と作す媾して

蒙古腦温爲碧と謂ふ、今嫩江と呼ぶ源宜呼爾山に出づ山は黑龍江の南興安嶺下に在り、江流北より南す、查するに克達奇山の東額勒克泉山の西を經擧爾根城西門下を循り、△魁城西門に抵る、凡り一千四百餘里、松阿里江と合す、東北流する一千六百里北して黑龍江に會す、又四百里南烏蘇里江に會す、是を海混同江と名づく、江の南寧古塔に屬す、其北は黑龍江境內の地たり五江の水に合し千餘を歷て江に入る、黑龍江は西より東に至る凡り七千餘里精奇里江源南を以てし松阿里源北を以てし南北凡り三千餘里、朔方備桀に曰く黑龍江は古の黑水也、滿洲語に薩哈連烏喇薩哈連と云ふもの黑烏喇を、謂ふ亦烏江と稱す、又烏龍江と稱す、上源に曰く敖嫩河は元太祖始め興るの地也、喀爾喀界內肯特山より源を發して東流す、又東北流して黑龍江と云ふ小、東流して尼布楚城南を經又東北流す額爾古納河西南より來り會し又東南流し、精奇里江東北より來り會す、又南流して愛理城西黑龍江城東を經て南流す、又東流して吉林三姓城界に入り、混同江と會す、又東流して烏里江と會し又東北流して海に入る、案ずるに秘史云ふ所彼の中邊郡は遼陽等處を謂ふ也元史地理志に曰く遼陽等處七路に分つ、遼陽路廣寧府路大寧路東寧河瀋陽路開元路咸平路合闌府水達達等の路是也、蓋し大寧女眞皆此中に在り。

封語兒河は元史地理志に之を脫斡憐と謂ふ、河を以て名を得る也、志に曰く合闌府水達々等路元初軍民萬戶府五を設け北邊を撫鎭す、一を曰く桃温、一を曰く胡里改一を曰く斡朶憐一を曰く脫斡憐一を曰く孛苦江、混同江南北の地を分領す、水道提綱に曰く洮兒河亦桃爾河と曰ふ、源西興安山東麓に出づ、數源あり一を曰く奴查兎河東南流する百餘里稍南して郭威河と曰ふ、東流し又東南に折れて數十里又南して木什夏河と曰ふ、兩源合し東南流する數十里折れて東北に向ふ、百里前兩河と會す、東流して北來の查木哈兎河と會す、又東南流する數十里、北厄白勒哈巴拉嶺南に出で二水を合するの厄模克什或河に會す、即白各兎河有り西南より亦來り會す、以上は皆源也、又東南して北來の哭乞太河に會す、又東南して西南の就門河に會す、又東して北來の多灰維太河に會す、又東して北來の索灰兎河に會す、又西南より來る即拉呼太河又東南して始めて拖維河と號す、又東南する數十里敖龍撒里河有り北より三水を合して來り會す、又東し折れて東南流する數十號白或河西茶蒲乞勒庫哈達の北必郎烏山の南より東北流して來り會するを得、又東南し曲々行くこと三百里山を出で、沙地に或く、歸勒里河有り即ち貴勒爾河、西北より諸水を合し東流して來り會す、洮兒河旣に歸勒里河を會し東南流する數十里分れて二派と爲る、一は南流し一は東南流する十餘里又一支を分ち先づ南流を合し又東南流する二百里喀沙兎駙の

東南に至り復合して而して東流する百餘里又東北に折れ曲曲流るる三百里札賴特旗南に至り滙して納藍撒藍池と爲る、猶ほ日月池と言ふ如き也、東流して嫩江に入る、嫩江既に洮兒河に會し東南流して郭爾羅斯後旗界に入る百數十里而して松花江南より來り會す。

即ち兵を縱にして勦捕す、合撒兒主兒扯歹脫侖三人大寧に至り其城降る。

此れ今の蒙古喀喇泌の地也、明何喬遠名山藏王享記に曰く古の肅愼國、後漢挹婁と、曰ふ、魏勿吉と曰ふ隋唐黑水靺鞨と曰ふ、唐の開元中其地を以て靺州と爲す、黑水府を置く其後粟水と曰ふ、靺鞨强盛渤海と號す、黑水往ひて之に屬す、後渤海黑水の攻むる所と爲る黑水復其地を擅にす、是れ金の鼻祖也、初め女眞と號す、遼に臣屬す、遼を避けて改めて女直と號す、阿骨打に至りて大遼を滅して金と爲る、其地を以て大寧府と爲す、元金を滅し軍民萬戶府五を設く、混同江南北黑水達達及女直の人を分領す、合蘭府水達達路之を總攝する有り、乾隆府廳州縣志に曰く外藩喀喇泌本二旗新に一旗を添ふ、春秋の山戎地秦漢遼の西境後漢の鮮卑地爲り、晉の慕容氏地爲り、元魏の時庫莫奚此に居る、唐初內附饒樂都督府を置く營州に隸し後分れて東西奚と爲る、尋で契丹に幷す、遼和中を統ぶる故を以て奚王牙帳城を建て中京大定府と號す、金の貞元二年更に北京と爲す、留守司を置く、元の初め北京路總管府爲り、至元七年改めて大寧路と爲す、二十二年改てめ武平路と爲す、後

復大寧と爲る、洪武中大寧都指揮使司を置く、永樂の初め大寧地を以て三衛酋長朶顏に賜ふ、後察哈爾の滅す所と爲る、其地を以て其塔布囊に與ふ、是れを喀喇泌と爲す。

女眞に至り其主亦降る、其餘の城池悉く來り歸附す。

遂に討浩兒河を沂つて舊營に回る。

其後太祖回回を征す、其れが爲めに使臣兀忽納等百人を殺す。

本紀に曰く十四年己卯夏六月西域使者を殺す、帝師を率ゐて親征す、遂に訛荅剌城を取る其酋哈只兒只蘭禿を擒す、即ち此事也、但し酋を擒するは十四年に在り使を殺すは必す年前の事なり、明陳仁錫皇明世法錄に曰く默德郡は卽ち回回祖國、地天方に接す城池宮室田園市肆あり五穀繁滋大に江淮に類す、初め國王謨罕驀德生れて而して神靈、西域諸國並に臣服す矣、尊んで別諳拔爾と爲す、華言の天使也、其敎天に事ふるを以て本と爲す、而して衆日無し、每に西に向つて天を拜す、佛經三十藏あり、凡そ三千六百餘卷、書篆隸楷西洋諸國を兼ね皆之を用ゆ、國人鑒識を善くす、每に賈胡海市に於て奇琛を得る故に識寶を稱して回回と曰ふ、種類散ずる處南北色目人甚だ夥し、並に窓目胡鼻白布首を纏ふ、俗蛮を以て酒と爲す牛を以て菜と爲す、夫婦配合必ず水淋の沐を取る、親死せば布を用ひて屍を裹み棺に入る、鼓樂送つて墓に至る、棺底を去り掩ふに土を以てす、豕肉を禁食す、相傳ふ驢

豕交媾して生ずと艾儒畧職方外紀に曰く中國の西北嘉峪關に出で哈密土魯番を過ぎ加斯加爾多高山あり、玉石二種を產す、牛羊馬畜極めて多し、豕を啖はざるに因り諸國豕無し、此れ自り以西曰く撒馬兒罕曰く革利哈大藥曰く加非爾斯當曰く杜爾格斯當曰く查理曰く加木爾曰く古查曰く蒲加利得、皆回回諸國也、初め馬哈默の敎を宗ぶ諸國皆同じ云云、案ずるに加斯加爾は今の喀什噶爾撒馬兒罕即ち元代の尋斯干又即ち秘史の撒里黑崑杜爾格斯當今の土爾其國也蒲加剌得は今の布哈爾亦布哈拉に非ざる也、餘或は隨時改變す盡く考す可からず矣。

臨行の時也遂夫人曰く皇帝山川を涉歷し遠く去つて征戰す、若一日倘し諱有らば四子の內誰に命じて主と爲すか衆人をして先づ知らしむ可しと。

四子は求赤、察合台、窩闊台拖雷を謂ふ也、宗室世系表尙ほ二子有り、其年蓋し尙ほ幼故に數へず。

太祖曰く也遂言ふ所の此等の言語兄弟兒子幷に孛斡兒出等皆曾つて言はず、我れ亦忘る、是に於て拙赤に問ふ我子の內汝ぢ最も長ずと拙赤未だ對へず、察阿歹曰く父親拙赤に問ふは彼に委付せんとするに非ざる莫きか、彼れは篾兒乞種の伴ひ來りたるもの我れ如何にして彼をして管セしむるを得んと。

孛兒帖篾兒乞に擄し去らる、以て赤勒格兒に配す、故に詆して篾兒乞の生む所と爲すを謂ふ。

既にして拙赤身を起し察阿歹の衣領をとらへて曰く、父親曾つて分揀せず、汝ぢ敢て此の如きを言ふ、汝ぢ剛硬を除き再び何の技能か有る、我れ汝ぢと射遠を競はん汝ぢ若し我れに勝つ時便ち我が大指を剝き去れ、我れ汝ぢと相搏を競ひ汝ぢ若し我れに勝つ時倒れたる處に再び起きずと、即ち兄弟容衣領をとらふ、孛斡兒出木合里二人勸解す。

本紀に木華黎と作す、其國王に封ずる十二年丁丑に在り十八年に薨ず、此時西域を征するを以て約十三年に在る也。

太祖默生の間闊搠思曰く、察阿歹汝ぢ何故に忙し。

皇帝汝を指望す、汝ぢ未だ生れざる時に當つて天下擾攘相互攻劫す、人安生せず、故に汝ぢが賢明の母不幸にして擄せらる、若し汝ぢ此の如くんば豈汝ぢが母の心を傷ましめざらん汝ぢが父初め國を立つる時汝ぢが母と共に辛苦して汝ぢを養ひ汝ぢが成人を望む、汝ぢが母日の如く明に海の如く深し、此等の賢明汝ぢ如何にしてか可なると。

太祖曰く如何にして拙赤を以て此の如く言ふ、我子中彼れ最も長ず、今後此の如かる可からずと、察阿歹微笑して曰く拙赤の氣力技能亦爭ふを用ひず、諸子中我と拙赤最も長ず、父親

に願ひ並に氣力を出さん、若し躱避するもの有らば即ち殺さん斡歌歹敦厚教訓を奉ず可しと、是に於て太祖再び拙赤に問ふ、拙赤曰く察阿歹已に言ふ、我れ二人並に氣力を出さん、斡歌歹をして承繼せしむべしと、太祖曰く汝ぢ二人必ずしも並び行はず、天下地面儘闊汝をして各封國を守らしめんと。

元史求赤傳に曰く、求赤は太祖の長子也、國初親王を以て西北地に分封す、其地極めて遠し、京師を去る數萬里驛騎急行して二百餘日方に京師に達す、求赤薨じ子拔都嗣ぐ、拔都薨じ弟撒里荅嗣ぐ、撒里荅薨し、弟忙哥帖木兒嗣ぐ、忙哥帖木兒薨じ弟脫脫忙哥嗣ぐ脫脫忙哥薨じ弟伯忽嗣ぐ、伯忽薨じ弟月即別嗣ぐ、史文に據るに則ち拙赤を地史臣に封す、已に其地名を指す、能はず蒙古源流に云ふ、汗在る時長子察干岱をして俄羅斯に汗位に即かしむ、次子珠齊を托克瑪克に汗位に即かしむ、三子謂德格依を灌位に留守す、幼子圖賴產を守る、源流に據る云云、則ち察干岱は即ち察阿歹其封地俄羅斯と爲す、珠齊は即ち拙赤其封地托克瑪克と爲す、既にして察阿歹を以て長子と爲す、拙赤を次子と爲す、而して託克瑪克又實は何れの地たるを指す能はず、惟ふに泰西洋人著す所の四裔年表に云ふ宋理宗寶慶二年蒙古成吉思汗卒す、屬地を以て王四子に分つ、第三子察噶台國を波斯の土闌に立つ是れ則ち託克瑪克は即ち波斯の地なり、既にして波斯を以て察阿歹に分與す、自ら俄

羅斯を以て拙赤に分與するは則ち源流の誤り也、乃少長の混淆一に名字を以て互に易ふ而して長次地を分つ本自ら訛せず、又託克瑪克は確かに今の波斯國爲る瞭然たり、蓋し波斯は回回祖國たり、即ち元史旭烈兀傳の所謂庭を忽里模子の地に建つるの者也、秘史云ふ所の二人各封國を守る者此に至りて始めて昭然たり。

汝二人言ひたる言語各依るを要す、人をして恥笑せしむる休れ、前に阿勒壇忽察兒二人自ら言ひたる言語違ふたる如き後如何せんとす、今彼の子孫在り、汝ぢ以て鑑戒と爲せ。

元文類太師廣平王玉昔碑皇子察哈觴出西域を鎭む旨有り、博爾求に從ふて教を受く、博爾求教ふるに人生險阻を經涉せば必ず善地を獲るを以てす、過ぐる所輕しく舍止する勿れと謹んで龍魚服の戒を白す玉音皇子に謂つて曰く朕の汝に教ふる亦是を踰わずと。

又斡歌歹の說を問ふ、斡歌歹曰く父親恩賜言はしむ、我れ自己能はざるを言ひ難し、專ら謹愼すべし、只恐る後世子孫不才我言ふ所を承繼する能はざるをと、太祖曰く斡歌歹此言中る也と、又拖雷の說を問ふ、拖雷曰く父親指名して言ふもの兄の前に其忘れたるを言ひ寢ぬる時喚び醒し征戰の時即ち行くと、太祖然るを言ふ、又曰く合撒兒阿勒赤歹斡惕赤斤別勒古台四個の位子。

阿勒赤歹は蓋し太祖の弟合赤溫の子、合赤溫是時已に歿す、阿勒赤歹を封じて後と爲す

故に四個の弟と曰ふ也、輟耕錄元宗室世系譜、濟王哈赤温、濟南王を生む、按ずるに只吉歹なり、元史太宗紀八年詔して中原諸州民戶を以て諸王貴戚に分賜す、斡魯朶は按ずるに赤帶濱棣二州を賜ふ、移剌涅兒傳子奴を買ひ諸王に從ふと、按ずるに赤台女直を征す、皆即ち此の阿勒赤歹の對音也、王珣傳に諸王は只台と作す、張榮傳に亦台那衍と作す。

彼の子孫各一人をして管せしむ、我の位子一個の子をして管せしむ。

求赤一域察阿歹一域斡歌歹一域各一子を以て之を管す四子に非ず但し一子を立つる也。

我言語違はず違ふを許さず、若し斡歌歹の子孫都べて不才ならんか我子孫豈に都べて一箇の好きもの生れざらん。

原太祖福員の廣、東高麗に盡き西拂菻を極む、南忻都に暨び、北北海に至る、衆藩屏を建て長駕遠馭す、自ら謂ふ子孫帝王萬世の業也と、而して其國を享くる漢唐宋を視て最と爲す、百年の間日本其精銳を喪ふ、海都蕭牆に鬩ぎ奸臣内訌す、群寇外に叛し數萬里の繡壞遂に群起して之を亡ぼす、豈封建郡縣兼ねて而して之を用ゆるに非ずと謂ふを得ん哉、天下を取るの力有りて而して天下を治むるの法無し、夫の土崩瓦解するに及び曾つて斡難の涓流に據り和林の片壤を保つ能はず、天の壞つ所人支ふる能はず同姓封を受くと雖も遠く遠く姬籙に符し劉に非ざれば王たらず潛かに漢鼎を契く、亦何ぞ益せん、其垂裕の謀を觀る

に詎んぞ密ならずと云はん、其効驗を揆るに事願と違ふ、吳起云ふ有り山河險なるに非ず天下を有つ者鑑と爲す可きのみと。

太祖人を差し往つて唐兀惕主不兒罕に對して曰く。

本記を以て之を考するに太祖四年西夏女を納れて和を請ふ、其時夏主李安全たり、十四年太祖西域を征す、上一年十三年西夏を伐つ、其時夏主李導頊也。

汝ぢ先に我と右手を做すを言ふ、今回回百姓我が使臣を殺す往いて彼と折證す、るを要す汝ぢ我右手を做すべしと、不兒罕未だ言語に及ばず、其臣阿沙敢不曰く汝ぢ氣力既に能はず皇帝を做すを用ひずと軍に與るを肯んぜず、太祖此語を聞きて曰く阿沙敢不何んぞ敢て此言を作す、我れ此の軍馬を以て遥ちに往いて彼を征せん、亦何の難きこと有らん、但し我か初意本と彼を征せず、若し天祐護せば回回處より回り來る時即ち往ひて彼を征せんと。

免兒の年。

十四年己卯即ち宋甯宗嘉定十二年

太祖往ひて回回を征ず、弟斡惕赤斤に命じ居守せしむ、夫人忽蘭を以て從ひ行かしめ者別に命じて頭哨と做す。

元史巴而求阿而咸的斤傳に曰く者必那演と罕勉力鎖潭回回諸國を征す、部曲萬人を率ゐ

以て先んず、紀律嚴明、向ふ所克捷す、案ずるに罕勉力は即ち勉力罕の倒文にして下文篾力克の對音也、鎖澤は即ち算灘元文類五十七宋子貞撰耶律楚材碑に曰く己卯夏六月大軍西禍裔を征するの際雨雪三尺上之を惡む、公曰く此れ敵に克つの象也と、庚辰冬大に雷す、上以て公に問ふ、公曰く梭里檀常に中野に死すべしと、已にして果して然り、梭里檀は回鶻王の稱也、按ずるに梭里檀は亦即ち算灘の對音耶律楚材集進征庚午元歷表に云ふ、庚辰聖駕西征し尋斯干城に駐蹕すと。

速別額台者別の後援を做す、脫忽察兒速別額台の後援を做す、三人をして回回の住する城外より繞り行かしめ彼の百姓を動かすを許さず太祖到る時を待つて即ち夾攻す、者別命の如くす篾力克力克王城邊に從ふて經過し曾づて彼の百姓を動かさず。

本紀十六年辛巳秋帝班勒紇城を攻む、班勒紇は即ち篾力克の對音也、西遊記に班里城有り、亦即ち此の篾里克の對音なり、記に云ふ河を沂つて東南行する三十里乃ち水無し、即夜行て班里城を過ぐ、甚大、其衆新に叛し去る、尙は犬吠ゆるを聞くと、即ち此の篾力克の事を叙する也、又曰く、西域主滅里可汗合、忽都忽と戰ふて利あらず、帝自將さに之を擊たんとす、滅里可汗を捻ふ、滅里可汗は即ち篾力克王也、西域水道記に曰く喀什噶爾西方墨克國有り、墨克は殆んど即ち篾力克城なり矣。

第三次に至り脫忽察兒經過し百姓の田禾を掠む、篾力克王走り出で回回王札剌勒丁と相合す軍を領して太祖を迎へて斷殺す。

本紀に曰く十七年壬午夏西域主札闌丁出奔滅里可汗と合ふと。

太祖失吉忽禿忽に命じ頭哨と做す、札剌勒丁と對陣し敗る。

本紀に曰く忽都忽戰利あらず。

太祖の處に追及す、者別等三人札剌勒丁後に至る、札剌勒丁勝つ。

本紀に曰く帝自ら之を擊たんとす、滅里可汗を捻ふ札闌丁遁れ去る。

不合兒城に入らんと欲して得す。

不合兒城は今の布哈爾也、亦布哈拉と作す、本記に蒲華城と作す、又卜哈兒城と作す、傳に又不花城と作す、別書又花兒と作す、又蒲花羅と作す、皆對音字也、紀に曰く十五年庚辰春三月帝蒲華城に克つ、夏五月尋思干城に克つ、十六年辛巳春帝卜哈兒斡迷思干等城を攻む蓋し既に太祖の攻克する處と爲る、先に布哈爾を得並に斡迷思干を得、故に兩國の主布哈爾城に入らんと欲して得ざる也、地理卜志西北地附錄篤來帖木兒轉する所不花剌哈散訥傳太祖西域を征し、不花剌等の城を下す、不花剌は即ち卜哈兒也、趙汝适諸蕃志に曰く大食國諸蕃要衝に據る、舟車輻輳す、蒲花羅等皆其屬國たり、耶律留哥傳に曰く帝西域を

征す、留哥既にして卒し長子斡闊扈從す、帝曰く斡闊朕に從ふて西域を征す、回々太子を哈瑪爾城に圍む、斡闊千軍を引きて之を救出す、身槊に中る、又蒲華撣思干城に於て回々格と戰ひ流矢に傷く、是を以て功を積み拔都魯と爲る、耶律楚材蒲察元帥に贈る詩に曰く、間乘羸馬過蒲華、又到西陽太守家と、蒲花羅蒲華は即今の所謂布哈爾也、西域聞見錄に曰く、布哈拉は回國也、葉爾羌の西に在り、馬行二十五日にして至る可し、城池堅厚闊大、周圍十二門十二辰を以て之に布く、其君を稱して汗と曰ふ、西域水道記に曰く蘇提布拉克嶺東は回部と爲す、西は霍罕と爲す、霍罕西十五程布哈爾と曰ふ、亦大國なりと、新疆賦註に曰く布哈爾葉爾羌を距る四十日程。

直ちに追ふて申河に至る軍馬溺死する者殆んど盡く。

申河は今の印度河害の時新頭河と名づくる者也、海國圖志七十長阿含經を引くに曰く阿耨達池南に新頭河有り獅子口に從ふて出づ、五百河に從ふて西南海に入る、元好問遺山集大丞相劉氏先塋碑に曰く、車駕契丹の餘族を征す、是れ西遼たり、合只に戰ふて之を破る、遂に遜丹の斜迷思干普花を征す、印度嗔 木連の拒むところ其軍二十万を破る、今案するに遜丹は直ち算端或は算灘と作す、或は瑣魯檀と作す、斜迷思は直ち斡迷思干大城也、普花は直ち不合兒城也、嗔木連は即ち申河、西域河を謂つて木連と曰ふ也、秘史刋木

漣あり、西使記に昏木輦あり、西遊記に吹沒輦有り、皆木連二字の對音、直ち印度河なり矣、南懷仁坤輿圖說に曰く印度河長さ四千里海に入る處闊一百六十里。

獨り札剌勒丁と篾力克、申河を逆つて走り去る。

四裔編年に曰く宋寧宗嘉定十三年波斯王馬罕米古里卒す、子吉剌丁嗣いで立つ嘉定十五年に及び蒙古來攻す、王印度に奔る、次年蒙古に降る、嘉定十九年に至り、蒙古波斯を以て王四子に分つ、其第三子察哈台國を土闌に立つ、所謂吉剌丁は直ち札剌丁の對音なり矣元史速不台傳に曰く壬午帝回回國を征す、其主滅里國を委ねて去る、速不台と只別に命じて之を追はしむ、灰里河に及んで只別戰利あらず、速不台軍を河東に駐む、其衆人を戒しめ三炬を爇して以て軍勢を張る、其王夜遁る、復命じて兵萬人を統べ不罕川必里罕城より之を追ふ、凡り經る所皆水無きの地既に川を度り先づ千人を發して游騎と爲す、繼で大軍を以て晝夜兼行す、至るに及び滅里逃れて海に入る、月餘ならずして病死す、此れ即ち篾力克申河を逆つて走り去る事也。

太祖申河を逆りて巴傷客斡城を攻收す。

沈刑部曾植に曰く此れ即ち經世大典及元史地理志西北地附錄の巴達哈傷にして今の巴克達山地也。

子母河巴魯安客額兒地面に至る。

元史地理志西北地附錄名八哈剌國有り、即ち巴魯安の對音本紀十八年夏八魯鸞に避暑す、亦卽ち巴魯安の對音也。

營を下し巴剌に命じて札剌勒丁等を追ふ。

巴剌は本札剌亦種人、前文四卷に見ゆ、本紀に曰く八剌を遣はして之を追ふも獲ずと、者別速別額台兩人功有り賞賜す、脫忽察兒令に達ふを以て廢せんと欲す、後曾つ、てせず只重く責罰し管車を許さず。

宗室世系表脫忽大王太祖兄搠哈兒王の第三子。

太祖回回地面より歸る。

西遊記に曰く壬午九月邪迷思干大城に至る、上城の東二十里に駐蹕す、六日入見す、二十有六日にして卽ち行く、十二月三日東霍闌沒輩大河を過ぎ行在に至る、癸未正月十有一日馬首遂に東す二十一日東一程に遷る、一大川に至る、東北賚蘭を去る約三程、二月上七日入見す、上曰く朕已に東す、此文によるに則ち太祖回回より歸る十八年正月後に在り。

抽赤察阿歹斡歌歹三子に名じ右手軍を領す。

本紀に曰く十八年夏八魯鸞川に避暑す、皇子求赤察罕台窩闊台及び八剌兵來り會す、遂に

西域諸城を定む、達魯花赤を置いて之を監治す。

阿梅河を置ぐ

天史憲宗紀阿兒渾阿母河等處尙書省事を行ふ、則ち此の阿梅河の對音なり、又阿木河と作す、憲宗紀六年阿木河降民を以て諸王百官に分賜す、明世法錄に曰く迭里迷哈烈を去る二千餘里、撒馬兒罕西南に在り、東阿木河を距つ、河廣く舟に非ざれば渡らず、魚多し、河東の地撒馬兒罕に隷す、河西蘆林有り獅子多し、又暗木河と作す郭寶玉傳に曰く暗木河に次す敵十餘壘を築く、陳船河中俄かに風濤暴起す寶玉令して火箭を以て其船を射らしむ、一時延燒す、勝ちに乘じて直に前み護岸の兵五万を破る大將佐里を斬り遂に諸壘を屠る、馬里四城を收む、西域水道記に曰く阿母河は鐵門關の南に在り憲宗三行省、西域其二に居る別失八里行省西域左地を控制す、阿母河行省西域右地を控制す、世祖則位す、舊阿母河行省官司を立てず、西遊記跋に曰く阿母河は其水今西北流して騰吉思海に入る

兀籠格赤城に至りて下營す、

本紀に曰く十六年辛巳秋皇子求赤察合台窩闊台、玉龍傑赤等城を分攻し之を下す。

拖雷に命じ亦魯等城に往つて下營す。

本紀に曰く十六年辛巳冬皇子拖雷馬魯察葉可馬魯昔剌思等城に克つ、十七年壬午春拖雷徒思匿察兀兒城に克つ軍を還して木剌夷國を經大に之を掠す、捌捌闌河を渡り也里等城に克つ、遂に帝と會し兵を合して塔里寒寨を攻め之を拔く。

拙赤等兀籠格赤に至り下營す。

元史曷思麥里傳に曰く帝親征して辭迷思干に至る、其主札剌丁合と月亦心揭赤の地に戰ひ月亦心揭赤を敗る、按ずるに月亦心揭赤は當さに月戀揭赤と作す、戀は俗に書して戀と作す、即ち此の兀籠格赤也。通鑑輯覽註に曰く和闐回部所屬六城玉嚨哈什城有り蓋し即ち元時の所謂玉龍城也、西域水道記に曰く、和闐河西源を哈喇哈什河と曰ふ、東源を玉龍哈什河と曰ふ、太祖紀玉龍傑亦を分攻するとあるは是也、河玉良を產す、其餘哈喇什桑谷樹雅哈朗歸山四處、又新疆賦註に曰く張匡鄴行種記に載す、于闐玉河三其白玉河は即ち今の玉龍哈什河緣玉河は即ち今の哈喇哈什河、烏玉河は即ち今の早窪勒河なり。

人を差して來りて曰く今侯三人の內誰れに聽きて調遣せんと、太祖斡歌歹に聽きて調遣せしむ。

拙赤察阿歹相能からず、而して太宗能く之を服するを以て他日太祖崩じ諸王太宗を擁戴して位に即かしむ、蓋し亦此に根源す。

是に至り太祖兀都剌兒等城を得。

國朝陳履中河套志に曰く楡林府靖邊縣營宋の兀剌城也、延安遠く其南に在り、長城近く北に列る、明內地兵を撤し以て此を守る、其衝要を以てに非ざる乎、又曰く兀剌は宋築く所の城也、即ち今の哨馬營延安三百二十里に在り、大邊北一里に在り、明保安縣の兵を移して此に屯す、哨馬又之を范將軍馬營と謂ふ、文正公の舊跡也、本記に曰く十四年帝親征し遂に訛荅剌城を取る、訛荅剌は即ち兀都剌の對音なり、蓋し此城之を得る最も早し矣。

回回王夏を過したる阿勒壇豁兒桓山嶺に於て夏を過す、元史鎭海傳云ふ命じて阿魯歡立鎭海城に屯田し之を戍守す、案ずるに阿勒壇豁兒は今の黃河源稱して阿勒坦郭勒と爲す對音字なり桓字は即ち夸闌二字の合音猶ほ營盤と云ふが如き也、新疆賦註に曰く、羅布淖爾潛行する千五百里東南巴顏哈喇嶺の麓に至る、阿勒坦噶達素齊老と爲す、伏流始めて出づ、其地巨石有り高さ數丈岸壁皆土黃赤色を作す、壁上天地有り、流水百道皆黃金色、東南流して注いで阿勒坦郭勒と爲る、又東北流する三百里泉數百泓有り錯列星の如し鄂敦塔拉と爲す、即ち星宿海なり阿勒坦郭勒其中挾に入る、諸泉東北流す、是れを黃河と爲す西域傳補註に曰く蒙古語黃金を謂ふて阿勒坦と爲す、故に其地を名つけて阿勒坦と曰ふ也、羅布淖爾伏流湧出噴して百道を爲す、皆黃金色東南流して阿勒坦河と爲る、又東北

流する三百里鄂敦搭拉中に入る、則ち元史の火敦腦兒譯して星宿海と言ふ者也。

就ち巴剌を候つ。

札剌勒丁を欣都思に遣す故に其還るを待つ。

人を差して往つて拖雷に對して曰く天氣暑熱來つて我れと相合す可しと、此時拖雷已に亦魯等城を取る。

前註本紀云ふ所の也里城を引く卽ち亦魯の對音。

正に出黑扯連城を攻む。

出黑扯連は今印度の北、地有り西刻と名づく、卽ち出黑の對音也、海國圖志外國史畧を引くに畧曰く、印度西刻の地後藏南に在り、長七百六十里闊百三十里後藏交界と山嶺多く地江流遍し、乃ち印度の五支江派する所也、其都を拉合と曰ふ、其君常に此に至つて樂を縱にす、又雲勒悉城有り、王庫を藏するの處莫但城は乃ち絲緞を製造するの處屬する所の谷を加治彌耳と曰ふ、海面より高きこと五百八十丈環る所の峯最も高き者約一千七百丈冬夏積雪消わず、昔大蒙古の君夏時此に納涼す、加治彌耳は國の名勝地なり。

城破るるに至りて方に回り來り太祖と相合す。

本紀に曰く十九年帝東印度國角端に至り班師を見る。

拙赤察阿歹斡歌歹三人兀籠格赤城を得、百姓を分つ、曾つて太祖の處の分子を留めず、回るに及び太祖二日三子の入見を許さず、木合里等曰く。

本紀を按ずるに十三年木華黎西京より河東に入る十四年絳州を屠る、十五年眞定を徇へ東平を攻む、洺州に趨き河北を徇ふ、十六年河西に出で延安を攻む、十七年乾涇等州に克つ、鳳翔を攻む十八年春三月薨ず、未だ嘗つて西域を征せず。

服せざりし回回百姓已に屈服し、分れたる城地及分れたる兒子皆是れ皇帝のもの天地祐護既に回回百姓を屈服し我衆人皆歡喜するに皇帝何故に斯く怒る、兒子既に是ならざるを知り已に怕る、以後彼をして謹愼せしむ、彼をして來見せしむべしと、太祖怒り遂に少しく止む、拙赤等をして來見せしむ、太祖舊に依りて怪責す、三子恐懼流汗す、帶弓箭の晃孩晃塔合兒有り。

前文四卷の晃荅豁兒當に卽ち此人。

搠兒馬罕等三人前に曰く。

後文十四卷亦綽兒馬罕と作す。

三子初め謂習したる鷹雛の如し、出征するに方りて此の如く怪責す、恐らくは向後學ぶの心怠懶せん、今日出入する鷹皆是れ敵人、我を以て西番の狗の如く使ふ天若し祐護し敵人に

勝だば凡そ金銀匹帛都てを以て來り献せん、又曰く此の西邊巴里塔惕種の百姓合里伯王あり。

巴里塔は即ち巴達二字の對音、合里伯は則ち阿剌伯國なり、西使記に曰く報達國南北二千里其土を合法里と曰ふ、其城東西有り、城東大河有り、西城壁壘無し、東城之を固むるに甓を以てす、其國俗富庶西に冠たり、其國六百餘年四十主を傳ふ、土人相傳ふ報達諸胡の祖と、故に諸胡皆臣服す、諸蕃志白達と作す、趙汝适諸蕃志曰く白達國は大食諸國の一都會に係る麻囉拔國より約陸行する一百三十餘程三十餘州を過ぐ、乃ち到れば國極めて强大軍馬器甲甚だ盛干乃佛麻霞勿直ちに子孫をして傳位を相襲はしむ、今に至つて二十九代六七百年を經、大食諸國或は兵を用ひて相侵す、皆敢へて其境を犯さず。

城市衢陌民居豪侈寶物珍段多く米魚菜を少ふす、人餅肉酥酪を食す、金銀琉璃白越諸布を產す、國人好んで雪布を以て頭に纏ひ及び衣服と爲す、七日一次髮を削り爪甲を翦す、一日五次天に禮拜す、大食教に導ふ、故に諸國歸敬す、職方外紀に曰く百爾西亞西北諸國皆度爾格の拜する所たり、國有り亞剌比亞と曰ふ、中に大山あり西乃と名づく、上古の世天主訓を垂れて一聖人美瑟を此に召す、賜ふに十戒を以てし石服に著す云云、其百爾西亞と云ふは今の白西則ち古の波斯度爾格は今の土耳其の地なり、亞剌比亞は則ち阿剌伯又則ち秘

史の合里百の對音也、外紀に天啓初年と作す、此れに依るに則ち合里百萬歷以前土耳其に拜入する故自ら一國を爲さず今、西人爾する所乃ち故阯矣、瀛環志略に曰く、阿剌伯は回教初興の國也、北界東土耳其、東波斯及阿勒富海なり、東印度海を距り西勒爾西海に抵る長四千餘里廣三千餘里其地西南濱海帶腹壤中央戈壁、古の土夷散部なり、波斯に屬す、陳宣帝大建元年摩哈麥なる者有り二加に生る、少年商を爲し、西國に往來し富商の寡を聚る遂に大富を致す、字を識らざるも性聰敏、佛教偶象を拜するを以て非と爲し、別に教門を創めんと思ひ山に入りて讀書する數年、著書を可蘭と曰ふ、其教に入る者香を焚いて禮拜し經を念ず、豬肉を食するを禁ず、唐高祖武德四年難を麥地拿に避く、土人靡然として教に從ふ、徒黨日に衆し、教に入らざる者衆を率ゐて之を攻む、兵敗れ徒散ず、收合復起ち遂に大敵を滅す、阿剌伯全土に據る、鄰部皆畏れて之に從ふ、故に回教遂に西土に蔓延す。其盛時に當つて嘗つて波斯を翦滅し羅馬を蔫食し阿非の全境に據り、歐羅の西垂を裂く、縱橫三土義んぞ敵無し、後土耳其の攻むる所と爲り、屬藩盡く失す、日に衰微に就く卒に乃ち貢を土耳其に納れ藩國を稱す焉、西域摩哈麥を稱して派罕巴爾と爲す華言の天使也、其苗裔を和卓木と稱す、華言の神裔也、麥地拏は摩哈麥を葬る處たり斂するに錢棺を以てす、每歲諸回回兩地に來りて禮拜す、近者數千里遠き者數萬里、踵を接して膜拜す數

萬を以て計ふ阿剌伯地六部に分る古の條支國也、回教既に興り乃ち天方天堂等の名有り、其國波斯の西南に在り、前に明の時累次朝貢す多く西域陸路よりす、明初鄭和海道より西洋に使す、天方に至りて而して止む、稱して西洋盡くる處と爲す、彼れ蓋し印度海より紅海に駛入す、遂に以て海此に盡くと爲す、而して小西洋の外尙大西洋あるを知らざる也。

命じて彼處に出征すべしと、太祖是なりと言ひ怒遂に息む、昱塔合兒二人捌兒馬罕に命じ往いて合里伯王を征せしむ。

按ずるに元史憲宗三年記諸王旭烈兀及兀良合台に命じて西域哈里發八哈塔等國を征す、八年諸王旭烈兀回回哈里發を討つて之を平げ其王を擄にす、使を遣して來りて璧を献ず、則ち此役憲宗に至りて方に事を竣る、云ふ所の哈里發は直ち合里伯也、八哈塔は又即ち西使記の報德なり。

再び欣都思種。

此今の印度國にして官書溫都斯坦と稱す、又痕都斯坦と作す者也、乾隆府廳州縣志に曰く溫都斯坦は亦西域回國の大なる者葉爾羌西南行くこと六十日克什米爾に至り復西南行する四十餘日湯都斯坦に至る、水亦通す可く境內江河皆海洋に通ず、時に閩廣海航彼に到りて停泊する有り其東北は即ち克什米爾國瀛環志略に曰く緬甸の西兩藏の西南廣土南海に

將入するあり、形箕舌の如し所謂印度なる者也、漢書之を身毒と謂ふ、又天竺と稱す、六朝以後釋典皆印度と稱す、今溫都斯坦と稱す、一に痕都と作す、又忻都と作す、又典都と作す一音華文を以て之を譯すに遂に人人殊にす、凡う外國地名皆此に類す、印度五有り地形海に入るの處中南兩印度と爲す、東印度は東界緬甸北後藏に逮る、北印度は雪山拱抱し東は後藏の邊徼と爲す、西は西域の札布と爲す、卽ち布哈爾東南部落たり、西印度は印度河に跨り、西域の阿富汗俾哈芝と壤を接す、東西約五千餘里、南北約七千餘里、境內名水二東を安額河と曰ひを源、西北に發す、東南流して孟加拉に至る、雅魯藏布江東北より來りて之に會し海に入る、印度人稱して靈水と爲す佛書の所謂恒河なる者也、西を印度河と曰ふ、源を後藏の阿里に發す、西行して雪山の背を繞る、北印度の北界に至り轉じて南行す北印度諸水之に會す、信地に至りて海に入る、其地佛教出づる所たり、故に古より著名なり後漢より中國に通ず、唐時屢入貢す、趙宋の時回都の侵割する所と爲る、元北方に起り太祖西北印度を征服す、世傳ふ所の角端に遇ふて兵を迴す者なり、憲宗の朝に至り復中印度を征服す、宗王駙馬を以て分つて其地に土とす、東南諸部皆役屬に聽く、是より五印度蒙古の別部たり、元末駙馬帖木耳王撒馬兒罕威西域に行ふ印度諸國皆臣服す。

巴里塔惕種兩間阿魯等種有り巴黑塔惕種は。

即ち報達國なり、但し報達國東に大河有り今の阿勒富海たり、亦東紅海と名づく、紅海より以東今の彼斯國地爲り、又東は阿富汗及俾路芝地たり、俾路芝は一名忽魯謨斯其東を印度河と爲す印度と界を分つ、所謂欣都思也、元史を考するに欣都印度身毒等名雜出す、太祖本紀十九年帝東印度國に至り角端を見る、此れ印度也、憲宗本紀二年秋七月諸王禿兒花撒邱に命じて身毒を征す、此身毒也、三年夏六月塔々兒に命じ撒里土魯花等を帶び欣都思怯失迷兒等國を征す、此れ欣都思也、三名雜出す、而して本自ら對音總て是れ欣都思國也、此れ合里伯王今時の阿剌伯國たり、然るに元史亦二名雜出す、憲宗本紀三年夏六月諸王旭烈兀及兀良合台等に命じて師を帥ゐて西域哈里發八哈塔等國を征す、六年兀良合台白蠻等を討ち之に克つ、八年諸王旭烈兀回回哈里發を討ちて之を平ぐ、合里發と八哈塔を兩國と爲すに似たり、又白蠻の名多し秘史に讀まず知らず合里發は是れ合里伯と阿剌伯の對音なるやを知らず、此れ國名なり、八哈塔は是れ巴黑塔と報達の對音此れ種類爲り、今欣都思と巴黑塔兩種の間元時阿魯と名づく、即ち今の阿富汗及び忽魯謨斯と波斯三國也、瀛環志畧に曰く阿富汗は回部の大國也、北界布哈爾東界印度南界俾路芝、西界波斯東西二千餘里南北千餘里其國本波斯東境なり、明の正德の初巴卑爾なる者有り、自ら立ちて國を爲す、康熙中波斯衰亂の勢に乘じて其全土を幷す、越へて十七載波斯復興り

て阿富汗を滅す、阿富汗王子故土を收復す、仍ほ波斯と幷立す、俾路芝阿富汗の南に在り亦回部也、東東印度に接し西波斯に接す、南印度海に臨む、東西約一千七百里、南北約六七百里國王無し六部に分る、各酋長有り、其國を立つる自ら始まる所を知らず、明初鄭和西洋に使す、乃ち忽魯謨斯國あり、阿富汗俾路芝皆歸して波斯に入る回族分爭遂に別れて部落を成す耳、波斯は回部の大國東北沙漠に連る、布哈爾を界とす、東界阿富汗俾路芝西東土耳其に接す、北裏海を抱く俄羅斯と壤を接す、南阿勒富海に抵り、阿剌伯昆と連る、長約四千餘里廣約三千里雄富にして寶貨多し、中國と貿易最も早し、云ふ所の碧眼は波斯胡也唐初回教阿剌伯に興る、波斯之と鄰す、國奪ふ所と爲る、是れ由り回回大部と爲る、元末駙馬帖木兒撒馬兒罕に據る、富强敵する無し、今葱以西裏海以東諸回部皆撒馬兒罕所屬なり其子沙魯哈を遣して波斯に據る哈烈國と稱す、明の永樂間嘗つて入貢す、諸部の首後と爲る、土耳其部人の奪ふ所と爲る、傳ふること二百餘年衰亂して尋で阿富汗の幷する所と爲る康熙中故王裔舊土を恢復し地を十一部に分つ、唐初勒伯人摩哈麥回教創立す、因つて兵を起して阿剌伯を攻め其國を奪ふ、時に波斯衰弱し摩哈麥の幷す所と爲る、故に唐より以後波斯遂に回々國と爲る以上皆徐中承繼藩志畧の語、以て印度阿剌伯兩國中間の證と爲す可し、但し波斯一國今昔界を異にす元太祖時の回回國は本と是れ波斯にて其南界濱

海の地乃ち阿魯の部落なり、故に既にして回回國王を逐ふ、又此の阿魯部落を幷收する也

阿魯は即ち忽魯兀字の對音元史旭烈兀拔都等と馬札兒部に克つ、遂に留まりて西域に鎮し庭を忽里模子の地に建つ、元の忽里模子は即ち明の忽里謨斯惟ふに元代庭を建て明初に至りて尚は其號に沿ふ、鄭和を西洋に使して此國名有る所以而して唐宋に見はれず、良由元史太畧祇蛛絲馬迹有り以て尋ね求む可し、元人明人及び西人各見る所に就て之を述ぶ自ら免れざる所なり。

朶兒伯朶黑申に命じ往いて征進せしむ。

再び速別額台勇士に命じ迤北康鄰等十一部落を征す。

前文九卷篾兒乞的忽都合勒赤剌温康里欽察種を過ぎ行く、此に云ふ康鄰は則ち是れ康里里と鄰一聲の轉猶ほ脫斡鄰亦脫斡里と稱する如き也、元史地理志西北地錄欽察有りて康鄰無し、欽察の上阿蘭阿思有り或は阿蘭本と康鄰の對音或は則ち欽察と地を連ぬ而して欽察に統屬す、均しく臆解し難し、其十一部落を康鄰と曰ひ欽察と曰ふ。亦乞卜察と作す、曰く斡魯思曰く阿速、皆此れ祕史に見る、餘七部史明文無し、速不台傳丙子帝諸將を會し篾里乞部主霍都奔欽察を討つ、明年奏請して欽察を討つ、兵を引きて實田吉思海を繞り轉じて太和嶺に至り其部長玉里吉及塔塔兒に遇ふ、不祖河に聚るに方り衆潰走す、又

阿里吉河に至り斡羅斯部大小密赤思老と遇ふ、一戰して之を降す、大に阿速部を掠めて而して還る、此れ即ち太祖速別額台に命じ康鄰を征するの事也、曷思麥里傳に曰く帝使を遣して哲伯に趣き欽察を討つ、曷思麥里に命じて曲兒或失兒灣沙等の城の招諭するに悉く來り附す、谷兒只部及び阿速部に至るに皆敗れ降る、又黑林城を招下し進んで斡羅斯に鐵兒山に克つ、其國王密只思臘を獵諸を求赤太子に献じ之を誅す、尋で唐里を征し孛子八里城に至り其主霍脫思可汗と戰ひ又其軍を敗る、進んで欽察に至り、亦之を平ぐ、此れ皆太祖の朝迤北康鄰等十一部落を征するの事。

亦的勒札牙黑二水を渡る。

此れ今の俄羅斯國にして裏海に入る烏拉河及佛兒格河也、即ち此二水は前文九卷古出魯克忽都合勒赤剌温と金山より顏爾齊斯河を渡りて而して西す、元兵亦河を渡りて西す則ち必ず二水を渡り始めて俄羅斯の莫斯科窪に至る、此れ俄羅斯歷古建庭の地にして當に欽察國と爲す、康熙四十年始めて西彼得羅堡に遷る也、朔方備乘に曰く裏海は大地中央の巨澤也、葱嶺の西水皆西流す、最大なる者北を納林河と曰ひ南を阿母河と曰ふ、皆鹹海に注ぐ、即古雷翥海と稱する也、鹹海の西巨澤有り、裏海と曰ふ、蒙古語之を騰吉斯鄂模と謂ふ、鹹海を距る數百里に過ぎず、而して廣大數倍南北約三千餘里東西約千里西北諸國の

水を受け汪洋海に似たり、而も大海に通せず故に裏海と名づく、裏海を逾ゑて以西即ち俄羅斯東南境伊犂の北を哈薩克と曰ふ、其右部の北を北哈薩克と曰ふ、北哈薩克西北約四百里即ち烏拉河出づ焉、西南流する千數百里阿斯達拉罕東境に至り裏海に入る、佛兒格河一に窩爾可河と、東南流する七千餘里にして裏海に入る、河源倭斯瑪城の西北四百里外に在り、東南流し又西南流す、鄂嚕河西より來會す、又東流し喀柏河東北より來會す、又西南流し薩拉多傳城を逕又南流し始めて額集爾河と名づく、一に額濟勒河と作す又東南流し數派に分れ裏海に入る、今案ずるに先に亦的勒を渡故るに即ち烏拉河を知る、次で札牙黑を渡る故に即ち佛爾格河を知る也、揑古剌傳に曰く憲宗の朝也里牙阿速と三十人來り歸す、也里牙は即ち窩爾牙河に似たり、蓋し也字と額音近し、額兒齊斯河亦也兒的石河と云ふ、是れ其例也、阿速は即ち河なり、地理志に云ふ阿速は水を以て名と爲す也と。

直に乞瓦兒綿客兒綿等城に至る。

四裔年表に曰く、宋寧宗嘉定十四年元太祖蒙古より俄羅斯を伐つ、俄國志畧に曰く、宋理宗嘉定時蒙古人成吉思の子拖雷と名づくる者あり兵を率ゐて俄國西鹹海旁の地に至る後又兵を帶びて裏海に至る、繼で又尼泊河に至る、小國を征服する筭無し、俄國衆小郎

を率ゐて卡爾戛河の上りに戰ふ、該河阿薩夫海に入る、亦敗る所と爲る、案ずる尼泊河は則ち烏拉河亦則ち亦的勒水なり、卡爾戛河は則ち佛兒格河亦則ち札牙黑水也、乞瓦綿客兒綿は宅書に見にず、明代西洋人撰職方外紀に俄羅斯を稱して莫斯哥末亞と謂ふ、其地段を考するに即ち今の莫斯科窪の對音然らば則ち乞瓦綿客兒綿は當さに則ち其一なり故に直ちに至ると曰ふ也、蓋し直ちに其都に抵るなり。

太祖再び回々各城を取り人に命じて鎮守せしむ、忽魯木石と云ふ者あり。

蓋し即ち忽魯謨斯國の宗族、故に忽魯謨斯と云ふ、譯字同じからず、故に忽魯木石と作す也其他西域の中に在り、東身毒を按へ西大食拂に連る、故に元代庭を此に建て旭烈兀を以て之を領す、蓋し西域を征する時是人に建議す憲十に始らず矣、識方外紀に曰く百爾西亞西南嶋有り忽魯謨斯と曰ふ、赤道北二十七度に在り、其地悉く是れ鹽否らざれば即ち硫黄の屬なり、草木生せず鳥獸迹を絕つ、人皮履履を著け雨に遇へば履底一日にして輙ち敗る、地震多く氣候極めて熱し、須らく水中に坐臥すべし、又絕へて淡水無し、勺水亦海外より載せて至る、其類此くの如し、因つて其地三大州の中に居る、凡ろ亞細亞歐羅巴利未亞の富商大賈多く此地に聚る、百貨駢集人烟輻輳凡ろ海内珍奇の物之を取る寄するか如し、土人言ふ天下若し一戒指此地則戒指中の寶物也と、明王圻稗史彙編に曰く忽

忽魯謨斯國邊海山に倚る、各處番船雲集す、民皆富饒舉國皆回回教にして每日三次禮拜す、人青白魁偉衣冠濟楚妻を娶る則ち男家教を請ふ、飲食酥油を用ゆ、市に燒羊燒雞燒薄餅哈里撒一應麵食あり、銀鑄錢を以て底那兒と名づく國に酒館無し、酒を飲めば市に棄つ、土產各番寶物とす。

牙剌洼赤的と名づくる回回父子二人。

牙剌洼赤は元史昔班傳に闊里別斡赤と作す、對音字也、傳に云ふ、聞く太祖北征す兵を領して來り歸す歸々國を征し數功を立つ、自ら請ふて本國坤閫城達魯花赤と爲る之に從へば即ち其人也、坤閫即ち忽魯二子の轉聲、旭烈兀傳忽魯模子は則ち其地なり模子は蓋し城郭の稱也、元史阿剌瓦而思傳に曰く阿剌瓦而思は回鶻八瓦耳氏、其國に事へて千夫長と爲る。

太祖西域を征し八瓦耳の地に駐蹕す、部曲を率ゐて來降すと則ち其人也。

兀籠格赤城より來りて太祖に見ゆ。

太祖十六年玉龍傑赤城を下す時鐵門關に駐蹕す。

其の能く城池の緣故を知る故に因り遂に其子馬思忽惕に命じへ、鎭守官を與からしむ、一同不合兒等の城を管す。

乾隆府廳州縣志に曰く巴克達山葱嶺中南境に居る。漢時當さに烏托國地と爲す、國の西布哈爾等の回國あり。

又牙剌洼赤に命じて北平を管せしむ。

太宗紀十三年牙老瓦赤に命じて漢民公事を主管せしむ、憲宗紀元年牙剌瓦赤を以て燕京等處行尙書省事に充つ、世祖紀に云ふ、憲宗斷事官牙魯瓦赤をして天下の財賦を總べしめ燕に於て事を視ると。

太祖回回を征する七年。

本紀に十四年親征し二十年に至り行宮に還ると書す。

初め巴剌に命じて回國王を追ふ、札剌勒丁幷に篾力王に克つて追ふ、申河を過ぎ直ちに欣都思種地面に至る。

郭寶玉傳に曰く辛己可弗乂國唯算端罕乃滿國を破る兵を引ひて撫思干城に據る、帝將に至らんとするを聞き城を棄てて南に至る、鐵門に入り大雪山に屯す寶玉之を追ふ遂に印度に奔る、則ち此の回回王欣都思に至る事也、西遊記に曰く辛己十月荅剌速河に至る東夏使に逢ふて回る、使者曰く七月十二朝を辭す、帝兵を將て算端汗を追ふて印度に至る。

尋ねて見ず回り來る、則ち欣都思邊域百姓の駝羊を都べて擄す。

四裔年表嘉定十七年蒙古印度を伐つ、西使記に曰く印毒國中國を去る最も近し、軍民一千二百萬戸、民居るに蒲を以て屋と爲す、夏大熱人水中に處す、印度は即ち漢の身毒也。

是に移て太祖遂に因りて額兒的石地面に至り夏を過ぐ當さに十九年甲申に在り。

第七年鷄兒年秋。

太祖二十年乙酉是れ宋理宗寶慶元年とす。

回りて禿剌河黑林の舊營内に到る。

耶律楚材湛然居士集夏國新安縣を過ぐるの詩あり、丁亥九月望日に作る、詩に云ふ昔年今日度松關と、原註に云ふ西域陰山松關有り楚材を計るに、大祖に扈從して西域を征す、是れ太祖と同じく陰山を度る、當さに九月十五日に在り、其昔年と云ふ者丁亥年より逆つて乙酉九月望日を憶ふ也、楚材集辨邪論序に載す、稱す乙酉日南瀚海軍の高昌城に至るを叙す、則ち九月望日回りて松關に到ると九月末回りて和林に到る也、又楚材集從容庵錄序甲申中元序に云ふ、西城阿里馬城は楚材太祖に扈從す、則ち額兒的石水に近き者則ち阿里馬城也と今の伊犂の地是也、輟耕餘に曰く、太和皇帝師を西印度に駐す忽ち大獸あり其高さ數十丈一角犀牛の如し然して能く人語を作す云ふ此れ帝か世界に非ず宜しく速かに還るべしと、左右皆震攝す獨耶律文正王進んで曰く此れ角端と名づく、乃ち旄星の精也、聖人

位に在り則ち斯獸書を奉じて至る、且つ能く日に萬八千里を馳す、靈異鬼神の如く犯す可からざる也、と帝即ち回駅す、元文類耶律楚材碑に云ふ、上東印度國鐵門關に次す、侍衛の者一獸を見る、鹿頭馬尾綠色にして獨角能く人言を爲す、曰く汝君宜しく早く迴るべしと、上怪みて公に問ふ公曰く、此獸角端と名づく、日に一万八千里を行く、四夷語を解す、是れ惡んで之を殺すの象なり、蓋し上天之を遣して以て階下に告ぐ、願くば天心を承け此數國の人命を宥されよ、實は陛下無疆の福なりと、帝即日詔を班師に下すと、明張翼清賞錄第十一卷耶律楚材扈從西征記を引ひて曰く、北印度土人雪を識らず、歳二月麥盛ゆ、夏錫器を沙中に置く尋で即ち鎔鑠す馬糞地に墮ち之が爲めに沸溢すと、角端等事皆古今傳記に載せず。

元朝祕史卷十四

成吉思既にして住し冬を過ぐ、唐兀を征せんと欲す。

註前文五卷に見ゆ本紀に曰く二十一年丙戌帝西夏仇人赤嚕喝翔昆及び質子を遣はさざるを以て詔して親征す、按ずるに嚕喝翔昆は卽ち王罕の子桑昆亦剌合也、明人撰元史對音なるを知らず、故に錯出悟り難し。

新に軍馬を整點し狗兒年秋に至り。

太祖二十一年丙戌宋理宗寶慶二年也

往いて唐兀を征す、夫人也遂從ひ行く、冬間阿兒不合地面に於て圍獵す、成吉思一匹の紅沙馬に騎す、野馬の爲めに驚かされ成吉思墜馬跌傷す、就ち捌斡兒合惕地面に於て下營す。

西遊記に據るに太祖墜馬十八年癸未二月八日に在り、上東山の下に獵す、一大豕を射る馬踣き馭を失す、豕傍に立ちて敢へて前まず、左右馬を進む、遂に獵を罷め行宮に還る、自後兩月出獵せず、邱處機親しく西域に至り、進諫を目擊すと豈訛誤有らん、此文狗兒年秋と言ふ者乃ち是れ癸未年前預備の辭否らざれば則ち成吉思兩次墜馬方に通すべし、但し阿兒不合及び斡兒合兩地皆西域に在り、則ち歲月西遊記の確なるに如かざる也、阿兒不合は

即ち阿里馬城又直ち即里麻里城又即ち明の亦力把力也、西遊記に曰く九月二十日阿里馬城に至り西果園に宿す、土人果を呼んで阿里馬と爲す、蓋し地果實を多くす、是を以て其城に名づく、東歸の時吹沒輩海岸より阿里馬城西に至る百餘里大河を濟りて阿里馬城の東闕に至る、西使記に曰く、銕木兒懺察關に出で阿里に至る、市井皆流水交貫く、諸果有り唯瓜蒲葛石榴最も佳回紇漢民と雜居す、其俗漸く染んで頗る中國に似たり、元史地理志西北地附錄に曰く阿力麻里諸王海都の分地也、上都より西北行する六千里回鶻五城に至る、唐北庭都護府と號す、又西北行する四五千里阿力麻里に至る、此數說を按ずるに則ち其他は即ち今の伊犂、阿力麻里は即ち阿里麻里、阿里麻里は即ち阿里馬、而して阿里馬三字又即ち阿兒不合四字之を急讀されば對音也、捌斡兒合は即ち元史西北地附錄の撒麻耳干、吟散納傳に薛迷則干と作す、又即ち明史西域傳の撒馬兒罕又即ち太祖本記の薛迷思干又即ち西遊記の邪米思干又即ち西使記の掃思干也。

次日也遂夫人大王並に衆官人に對して曰く、皇帝今夜發熱甚し汝等商量すべしと、是に於て大王並に衆官人聚會す其中に脫侖議あり曰く。

元史伯八兒傳云ふ父脫侖闍里必、太祖に扈從して西域を征す、案ずるに闍里は必ず即ち前文十卷の扯兒必なり。

唐兀に是れ城池有る百姓なり稱動する能はず、今且らく回り皇帝安らかなるを待ちて再び來りて收取せんと衆人皆以て是と爲し、成吉思に奏知す、成吉思曰く、唐兀百姓我等の回るを見ば必ず我を以て非と爲さん且らく此處にて病を養ひ先づ人を差し唐兀の處に行き、彼れか如何の話をなすを見るべしと、遂に人を差はし唐兀主不兒罕に對して曰く。

本紀十三年西夏を伐ち其王城を圍む、夏主李遵頊出て〻西涼に走る、是時夏主乃ち孛睍也汝ぢ曾つて我等か右手を做さんことを言ふ、我が回回を取るに及び汝ぢ即ち從はず、又言を以て我を議諷す、今已に回回を取る、我汝ちと前言を折證せんと、不兒罕曰く議諷の言語我れ曾つて言はず、と阿沙敢不有り曰く是れ我れ言ひたり、我れ厮殺せんとする時汝賀蘭山に來りて戰へと。

賀蘭山は今蒙古札薩克轄する所の阿拉善旗是れ其對音也、種大昌北邊備對に曰く、賀蘭山は靈州保靜耳轄住り、山林木有り青白望むに駿馬の如し、北人駝馬を呼んで賀蘭と爲す河套志に曰く、賀蘭山は置夏府西六十里に在り、陽に西夏を蔽し陰に北處を阻す、延亙五百餘里邊境倚つて以て固きを爲す、上に廢時百餘有り元昊故官の遺址多し樹木青白望めば駿馬の如し、北人駿を呼んで賀蘭と爲す故に名づく、乾隆府廳州朝志に曰く、西套厄魯特二旗賀蘭山陰に駐牧す龍首山北に及び河套以西に在り、唐時河西節度使に屬す、廣德の

初西番に陷る、宋の景德中西夏に陷る、元甘肅行中書省に屬す、明邊外地と爲す、國朝初め蒙古阿拉善厄魯特部落套內に駐牧す、後噶爾丹强併せて奪西を滅す、其會近邊に逃竄す康熙二十五年上書して牧地を給せんことを求む、詔して實夏邊外に界を盡して之に給ふ賀蘭山種東に在り。

金銀緞疋を要する時汝ぢ西涼に往いて來り取れ。

乾隆府廳州縣志に曰く西奪厄魯特、晉前涼後涼北涼の所有爲り、元史拖理志に曰く、甘肅等處行中書省路七と爲す、永昌路は唐の涼州宋初西涼府爲り、景德中西夏に陷入す、元初仍ほ西涼府たり。

使臣回り前言を以て成吉思に告ぐ、成吉思曰く彼れ此の如き大言を爲す、我れ如何にしてか回るを得べき死すと雖も亦往いて彼に問ふべし、長生天知る者と遂に賀蘭山に到り阿沙敢不本敗る。

本紀に曰く二十一年二月甘肅等州を取る、秋西涼府綽羅和等縣を取る、遂に沙陀を踰へ黃河九渡に至る、雅爾等縣を取る、十一月帝靈州を攻む、丙寅河を渡つて夏師を擊ち之を敗る、二十二年丁亥帝兵を留めて夏王城を攻む、自ち師を率ゐて河を渡り積石州を攻む、二月臨洮府を破る、三月洮河西寧二州を破る。

走つて山寨に上る、咱軍彼の能く厮殺する男子並に馱々等の物を盡く殺擄す、其餘各人得る所に任ず、成吉思雪山に在りて往夏す。

案ずるに下文木合黎に財物を賞する語有り、則ち是時木華黎未だ卒せざる也、本紀に書す太師國王木華黎の薨ず太祖十八年に在り、則ち此時住する所の雪山は乃ち西域の雪山にして西夏の山に非ず、太祖師を西域に班す是れ十九年以後の事、其西夏を親征する又二十一年以後の事其年月を詳するに是時木華黎卒して四年矣、故に西域を征するの時住する所、雪山なるを知る也、漠北より西域に至る地に隨ふて皆雪山なり、太祖住する所の雪山は蓋し餘門關外千里に在り、輟耕錄に曰く邱處機壬午三月鐵門關を過ぐ四月行在所に達す、時に上雪山の陽に在りと、元史郭寶玉傳に曰く、辛巳可弗又國唯算罕乃滿國を破る兵を引ひて得思干に據る、帝將に至らんとするを聞き城を棄て南走錢門に入る、大雪山に屯す、寶玉之を追ふ、遂に印度に奔る、帝大雪山前に駐す時に谷中雪深さ二丈寶玉山川神に封せんことを請ふ壬午三月崑崙に封じて元極王と爲す、此の傳に依るに即ち崑崙なるを知る也、輟耕に曰く、朶甘思東北都大雪山有り、亦耳聞麻不莫剌と名づく、其山最も高し譯して騰吉里塔と言ふ、即ち崑崙山也、山腹より頂に至る、皆雪冬夏消へず、土人言ふ遠年成氷時六月之を見ると、新疆賦注に曰く和闐額里齊南城五百八十里大雪山爲り、名づけ

て呢蟒衣と曰ふ譯して雪と言ふ也

軍を謂して行き阿沙取と山に上る百姓を盡く虜す、孛斡兒出木合黎に財物を賞す、其取る所に儘す。

本紀十六年木華黎河西に出で叟綏德保安鄜坊舟等州に克ち延安を進攻す、云ふ所の軍を調する者即ち此役に在り。

又二人に對して曰く金國の百姓曾つて汝に分與せず、今金國の主因種有り。

輟耕錄氏族條元代漢人八種を叙す、曰く契丹曰く高麗曰く女眞曰く行因歹、是の女直と行因は塲しく元代稱する所の漢人種族の一竹因は即ち此の主因の對音但し秘史此文に云ふ金國の主因種其所以を究むるに主因と稱する者朱里眞三字の併文即ち前文七卷王罕用ゆる所の只兒斤部の轉聲又即ち大金國志の戾謂金國本と朱里眞と名づくる者訛して女眞と爲す者也。

汝二人均分し凡ろ好き兒子は汝ぢと擎鷹せしめ美なる女は妻となすべし。

蒙韃備錄に曰く太師國王の出師する多く妻孥を帶ぶ、我れ使して彼國に入り國王と相見ゆ、之に酒を命じ彼妻賴蠻公王及び諸姬夫人侍稱する者八人と皆共に坐す、所謂諸姬皆粲白美色四人乃ち金虜貴嬪の類又摩喉維と曰ふ、國王征伐して來り歸る每に諸夫人連日各

主禮を爲し酒饌を具して飲燕す。

己に前金主曾つて彼れに倚仗して近侍と做る、我等速速の祖宗を以て廢す。

速速は達達と作す字の誤也、前文一卷兀兒失温河塔塔兒種人俺巴孩を以て拏へ大金に送り與ふ、此れ則ち元代祖宗を廢殺するの事、今太祖此種人を以て兩人に分屬する也。

汝二人是れ我が近侍たり則ち彼を以て每に來り使換する者。

成吉思雪山より起種し。

西遊記を以て之を考するに太祖起種十八年癸未に在り、然るに邱處機既に同行せず、則ち扈衛折回の有の有無記未だ詳悉せず、本紀班師二十年に在り、行宮に還る二十一年に在り其西夏を親征するは則ち二十二年の事。

兀剌孩城を過ぐ。

元史地理志に曰く、兀良哈は紀を按ずるに畢城北兀良哈亞闌になり河西に入り西夏府將高公大祖四年公を獲克兀良哈城に克つ是れ此の兀良哈城本と西夏に屬す、山內外の兀良に非ざる也、姚燧牧牧菴集中書左兩李公家廟碑に曰く李氏家隴西成紀は實は秦將信諸の孫漢より六朝に至りて門閥甚だ峻唯崔盧鄭氏と姻し他族と連らず、唐李干西夏甚だ盛强、宋金兵をがふと雖も終に能く服する莫し、我か太祖始めて之を平ぐ、其宗兀納城を守る

者有り、獨り戰死して下らず、子惟忠尙少し、求めて父に從ふて死す云云、兀納は則ち秘史の兀剌孩、元史兀良哈の對音且つ碑に據るに則ち西夏李氏本相李唐、蒙古稱の而を唐の古惕と爲す者譯して唐國種と言ふ其說確なり矣輟錄柯九思撰黃河源志に曰く太祖皇帝二十有一年春正月西夏を征し甘肅等城を取る、秋西涼府を取る、遂に河西を過ぎ黃海九渡に至る、乾隆府廳州縣志に曰く科爾沁六旗喜峯口東北八百七十里に在り、明即福餘外衛を置く元の後兀良哈首領を以て都指揮と爲し衛事を掌る阿稱科泉泌は古北口東北一千一百里に在り明初巴良哈部長を以て術を置き外藩と爲す、巴林二旗古北に東北七百二十里に在り明初兀良哈北境と爲す、此れに據るに即ち秘史の兀剌孩城は今の喜峰古口以口の地也、則ち來りて靈州城を攻む。

元史相理志に曰く寧夏府靈州は唐の靈州たり、又靈武郡と爲す、宋初夏國に陷れられ、改めて翔慶軍と爲る、錢良擇出塞紀略に曰く、唐元和志豐州西南靈州に至る九百里靈州今の靈夏衛靈州也。

時に唐の兀惕主不兒罕金佛並に金銀器盃及び男女馬駝等の物を皆九九を以て數と爲し來り獻ず。

本紀に曰く二十二年六月夏主李睍降る、輟耕錄に曰く丙戌冬十一月耶律文正玉太祖に從

ふて、露武諸將を下す皆子女玉帛を掠む、王獨り書籍數部大黃兩駝を取る而已、既にして軍中病疫多し、惟ふに大黃を得て愈す可し活す所義萬人なるを知らず。

成吉思令して門外行禮を止む、行禮の間成吉思惡心す、第二日に至り不兒罕を以て失都兒忽と改め脫命に命じて殺す、脫命に對して曰く、初め唐兀を征する時我れ圍獵に因り墜馬す汝ぢ曾つて我が身體を愛惜し回らんことを勸む、敵人の言語不遊なるに因り來りて征する所以天の祐助を蒙り彼を取る、今不兒罕の行宮並に器皿有り汝持ち去るべしと。

成吉思既にして唐兀惕百姓を虜し其主不兒罕を殺し。

其父母子孫を減す、但し凡り飲食を進むる時須らく唐兀惕盡く絕つを言はしむ、初め唐兀惕言を踐まざるに因り故に兩次來りて經進す是に至り回り來り豬兒年に至り成吉思崩ずる後源流に曰く青吉思汗丁亥七月十二日を以乙剛爾畢格依城に殁す、年六十六、案ずるに是年宋理宗寶慶三年と爲す、金主守緒正大四年なり、輟耕錄に曰く太祖應天啓運聖武皇帝諱は鐵木眞國語に成吉思と曰ふ、宋開禧二年丙寅十二月斡難河に即位し自ら可汗と號す、宋寶慶三年丁亥七月己丑に至り薩里川に崩ず、在位二十二年壽六十六起輦谷に葬る又奉使俄羅斯行種錄に曰く、康熙二十七年五月十八日歸化城北に次す、蒙古語の庫庫河屯也、十九日入城す、觀命城碑記按ずるに歸化城は乃ち元の豐州二十日早發二十一日祁連山に入

る、土城廢址有り則ち碑の云ふ所の甸城なるやを疑ふ也、遠望すれば、石峯疊翠其中に入れは則ち羣阜蜿蜒相傳ふ、兀世帝后俱に此山に潛厝す而して陵墓を立てずと。

唐兀惕百姓を以て多く彼の也遂夫人に分與す。

元史兵志唐古衛有り河西三千人を領す。

成吉思既に崩ず。

本紀に曰く二十一年二月黑水等城を取る、夏渾垂山に避暑す、甘肅等州を取り秋西涼府綽羅和拉等の縣を取る、冬十一月靈州を攻む、夏威明を遣し公をして來援せしむ、帝河の渡り夏師を擊ちて之を敗る、遂に沙陀を踰へ黃河九渡に至る雅爾等縣を取る二十二年丁亥帝之を留めて夏玉城を收む、自ら師を率ゐて河を渡り積石州を攻む、二月臨洮府を破る、三月刷河西寧二州を破る、夏四月帝龍德に次し德順等州を拔く、閏月六盤山に避暑す、是月夏主李睨降る帝清水縣西江に次す、秋七月壬午不豫己丑薩里川哈老徒の行宮に崩ず、壽六十六、至元三年冬十月聖武皇帝と追謚ず、至大正二年冬十一月庚辰法天啓運聖武皇帝と加謚す、廟を太祖と號す。

鼠兒年右手大王察阿歹、巴禿、左手大王斡赤斤。

前文云ふ、祖回回を征し、弟斡赤斤に命じて居守す、西遊記邱處據ふ沙陀斡辰大王の帳下

に至る、相距る遠からず云云、斡辰は即ち斡赤斤蓋し斡赤斤蓋は是時當さに斡難河上舊營に在り。

同じく內に在り、拖雷等諸王駙馬並に万戶千戶等客魯連河濶迭兀阿剌勒地に行く。

元史太宗本紀に曰く、太宗英文皇帝諱は窩闊台、太祖第三子、元年己丑夏帝忽魯班雪不只の地に至る、皇帝拖雷來見す、秋八月己未諸王百官大に怯綠連河曲睢阿蘭の地に會す、太祖の遺詔を以て皇帝の位に庫鐵烏阿剌里に即く、今按ずるに阿剌勒は蒙古語の山也、西域水道記に曰く凡り山は蒙古語に鄂拉と曰ふ、鄂拉は即ち阿剌の對音、此山闊迭兀と名づく、即ち後文十五卷末稱する所の客魯連河也、本紀曲雕阿蘭は即ち是れ庫鐵烏阿剌の對音綠採る所一書に非ず、譯する所一人に非ず、故に其一地たるを悟らざる也、蓋し飜譯の學未だ精しからざる也、此闊迭兀は其客魯連河上に在るを知ると雖も然れども前文述ぶる所の客魯連河地名之を求むるも即ち此名無し、計るに當さに河の初源に在り、今の蒙古車臣汗中右後旗大肯特山東南なり矣。

大に聚會し成吉思の遺命に依り、斡歌歹を立てて皇帝と做す。

是れ太宗と爲す元史睿宗列傳に曰く、太祖崩ずる時に方つて太宗霍博の地を留む、國事屬する所無し拖雷、實に身之に任ず、己丑夏太宗京に還る、八月即位す。

酬吉思の原の宿街一万人並に衆百姓を即ち分付す、斡歌歹既に立ち兄察阿歹と商量し、成吉思皇帝父親留めて未だ完らざる百姓巴黒塔惕拖の王合里伯を曾つて綽兒馬罕に命じて征進す今再び斡豁禿兒蒙格禿兩個をして、後援と做して往て征せしむ。

蒙格禿憲宗と名を同ふす、憲宗に非ざるを知る、是時憲宗阿速南北異路を征す、此れ四卷十卷前文蒙格禿乞顏と同名にして一人に非ず、憲宗紀二年諸王を名所に分遷す、蒙哥都擴端居る所を地の西にがてすと即ち其人也、又九年諸王蒙哥都復渠州禮義山を攻む。

再び康里乞卜察等十一拖種池百姓あり、曾つて速別額台に命じて征進す、彼の城地攻拔し難き爲めに。

元史速不台傳に曰く乙未太宗諸王拔都に命じて西八赤蠻を征す、且つ曰く聞く八赤蠻は膽氣あり速不台亦胆勇あり以て之に勝つべしして、遂に命じて先鋒となし、纖で又令して太軍を統べしむ、八赤蠻速不台至るを聞き、大に懼れ逃れて海中に入る。

今再び各王長子巴禿不里古余克に命じ。

不里は後文に據るに察阿歹の子と爲す、古余克は即ち貴由二字の對音定宗は諱也「本紀に曰く定宗簡平皇帝諱は貴由太宗の長子也、母を六皇后尼瑪察氏と曰ふ、丙寅年帝を生む太宗諸王拔都に命じて西征す、阿速增に次し、木柵山察を攻圍す、三十餘人を以て戰に

興る、帝及憲宗興る焉、元史語解貴由を改めて庫裕克と作す、更に古余克三字と、對音太宗紀七年諸王拔都皇子貴由皇姪蒙哥を遣し西域を征す、八年詔して中原諸州氏戶を以て諸王貴戚に分賜す拔都は平陽府古興は大名府を賜る、拔都は即ち巴禿古興は亦即ち貴由也。

蒙格等後援と做りて往て征す。

蒙格は即ち蒙哥憲宗皇帝諱也、本紀に曰く憲宗桓肅皇帝諱は蒙哥、睿宗拖雷の長子也、母を莊獻皇后怯烈氏と曰ふ、歲戊十二月三日帝を生む、時に黃忽荅部に天象を知る者あり、帝後必ず大貴なるを言ふ故に蒙哥を以て名と爲す、蒙哥は華言の長生也、太宗潛邸に在り、養ふて以て子と爲す、之に部民を分つ睿宗薨するに及び乃ち命じて藩邸に歸す。

其諸王內巴禿をして長と爲す、內に任りては古余克を長と爲す、凡り征進の諸王駙馬萬千百戶亦都べて長子をして出征しむ、兄案阿歹長子をして出征せしむる緣故を言ふに長子をして出征せしめんか則ち人馬衆多、威勢益大聞くならく彼の敵人極めて剛硬と、我兄察阿歹謹愼する爲めに長子をして出征せしむる所以なり、其緣故此の如しと。

案ずるに此れ元後代議說と相反す、元史康里脫脫傳に曰く〻德五年武宗皇子を以て北鄙

を撫軍す、五年叛王海都邊を犯す、帥杭海に次す、武宗出でて戰はんと欲するに脫脫轡を執りて力諫す乃ち止む、大將朶兒答哈曰く太子軍中に在る、身首ある如く衣、飲あるが如し脫虞れざるあらば衆安くにか附せんと、脫脫の諫忠と謂ふ可し矣、此れ又一義也。

斡歌歹帝再び兄察阿歹の處に往き商量す、曰く我れ皇帝父親の大位子に坐す、何んの枝能か有らん、今金國未だ平かざる有り、我れ自ら往て彼を征せんと欲す以て如何と爲すと、察阿歹然るを曰ふ、但し老營內好人を委付すべし我れ此れより汝ぢか軍に添はんと、遂に帶弓箭の斡勒答合兒に委付して老營を留守せしむ。

兎兒の年斡歌歹皇帝金國を征す。

本紀に曰く二年秋七月帝自ら將に南伐せんとし皇弟拖雷皇姪蒙哥師を率ゐて從ふ。

者別に命じて頭哨と爲し遂に金兵を敗る。

本紀に曰く三年二月鳳翔に克つ、四年鈞州を攻め之に克つ遂に貂嵩汝陝洛許鄭陳亳潁壽睢永等州を下す、速不台等に命じて南京を圍む、元明善撰忠憲王碑に曰く太宗皇帝鳳翔を取る、兵を以て潼關を戍る、河中を攻めて守將を追斬す、戰に京師に從ふ、三峯山に於て四十萬人を破り行省完顏合達樞密移剌蒲兀を斬る。

居庸關を過ぎ斡歌歹軍を龍虎台に駐む、諸將に分命して各處城地を取る、斡歌歹忽ち疾を得

昏憒失音す師巫に命じて之を卜す、言ふ金國山川の神、軍馬人民を擄掠し城郭を毀壞する爲め此れを以て祟を爲すと、許すに人民財寶等の物を以て之に禳る卜の從はざる其病愈重し、ふ惟に親人を以て之に代ふれば則ち可、疾少間にして忽ち眼を開き水を崇めて飲み言ひて曰く、我れ如何にしたると、其巫曰く此れ金國山川の神祟を爲す、許すに諸物を以て之に讓るも皆從はず只親人を以て之に代ゆるを要すと、斡歌歹曰く今我が前に誰れか有ると、當に大王拖雷あり曰く洪福の父親、我等兄弟內より、汝を選みて皇帝と做す、我をして哥哥の前に在り忘れたるを言はしめ睡る時喚び醒さしむ、今如し皇帝哥々を、失はんか我れ誰れに向つて言ひ誰を喚び醒すべき、多くの達々百姓誰をしてか管せしめん、且つ金人の意を快ふせん、今我れ哥哥に代らんか、所有ゆる軍薛都べて我れ造り來らん、我れ又生れたるや好し以て神に事ふ可し師巫水を取りて汝を呪ふと、拖雷飲み畢り坐する間醉寐む曰く我醒む時我孤兒寡婦を寵愛し成人せしむべしと言ひ畢りて出で去り遂に死す、其綠故此の如し。

元史本紀に曰く四年九月拖雷薨ず、睿宗列傳に曰く憲宗の時睿宗皇帝と追謚す。

斡歌歹既にして金國を以て窮絕す、

金史袁宗紀に曰く天興元年三月壬寅大元兵汴城を攻む夏四月丁巳右部侍郎楊仁を遣して

詣大元の兵和を乞ふ、丁卯解嚴、九月皇京大に疫す、凡そ五十日死する者九十餘萬人閏十月詔して諸道軍を徵し十二月一日を以て入援す、十二月甲申詔して議して親出す、乙酉扈從及留守京城官を除く、庚子上南京を發し皇后皇后諸妃と別る、辛丑陳留に次す、壬寅杞縣に次す、癸卯黃城に次す、甲辰黃陵岡に次す、乙巳諸將請ふて、河朔に幸す、二年正月丙午朔河を濟る、丁未大元の兵海岸に追擊す、辛酉上婦德に入る、六月策を決して蔡に遷る、己亥上蔡州に入る九月辛亥、大元兵蔡城を圍む己未、蔡城の粟を括す、十一月、宋其將江海孟琪を遣し兵萬人を帥ゐ糧三十萬石を以て大元兵を助け蔡を攻む、十二月丁丑大元兵練江を決す、宋兵汝水を決す、己卯外城を破る、己丑西城を墮す、甲午上徵服夜東城に出づ、遁を謀つて果さず、三年正月戊申上百官を集め位を東面元帥內族承麟に傳ふ承麟讓固く讓る詔して曰く朕か肌體重肥鞍馬に便ならず、卿平日趫捷万一免るゝを得ば祚胤絕ゑず、此れ朕が志也と、己酉承麟即位す、帝自ら幽蘭軒に縊る、末帝群臣を率ゐて入りて哭す、謚して哀宗と曰ふ、哭奠未だ畢らす城潰ゆ、諸禁近火を爇げて之を焚く、御絳山に奉ず、骨瘞を汝水上に收む、末帝亂兵の爲めに害する所となり金亡ぶ。

其主を名づけて小廝と爲す。

本紀に曰く六年正月金主位を宗室子承麟に傳ふ、遂に自ら經而して焚く城拔く承麟を獲て之を殺す、宋兵金主の餘骨を取り以て婦る、金亡ぶ。

其金帛頭畜人口を掠めて以て歸る。

本紀に曰く五年速不台進んで青城に至る、金太后王氏后徒單氏及梁王、恪荆王守純に從ふて軍中に至る速不台を行在に遣送す。

計梁北平等處に於て探馬赤を立て以て之を鎭む。

兵志曰く軍十蒙古軍有り、探馬赤軍蒙古軍皆國人探馬赤軍は則ち諸部族也、

遂と回りて嶺北に至りて下營す。

地理志曰く、元行中書省十有一を立つ、嶺北等處行中書省和寧距總管府を統ぶ、始めて和林と名づく、西哈剌和林河有るを以て因以て城に名づく、太祖十五年河北諸郡を定め都を此に建つ初め元昌路を立つ、後轉運和林使司に改む、前後五朝都焉、世祖中統元年大興に遷都し和林に宣慰司都元帥府を置く、大德十一年和林等處行中書省を立つ、皇慶元年嶺北等處行中書省に改む、和林路を改めて和寧路と爲す、乾隆府廳州縣志に曰く喀爾喀四部七十四旗古の漠北の地元都を此に建つ、和林と名づく、皇慶元年嶺北等處行中書省を改む、明喀爾喀と號す。

本朝康熙二十八年噶爾丹其地を併せ遂に克魯倫河南に沿ふて牧す、三十五年親征して克

魯倫に至る盡く其衆を殲す、漠北悉く平ぐ。

綽兒馬罕巴黒塔惕種を征す、其種歸附す。

前文十三察合里伯國を稱して巴黒塔惕種と爲す、是れ此文巴黒塔は即ち合里伯國王也、此時合里伯國王是力屈暫らく服する後又命に叛す、故に憲宗の世に至り又皇弟旭烈兀に命じて之を征す、此と相去る十餘年の事なり、憲宗紀二年秋七月諸王乞都不花に命じて沒里奚を征す、旭烈兀西域素丹諸國を征す、三年諸王旭烈兀及び兀良合台等に命じ師を帥して西域哈里發八哈塔等國を征す、西使記曰く報達國王を合法皇王師と曰城下に至り一だび交戰し兵四十餘萬を破勝す、西城陷り皆盡く其民を屠る、東城六日にして而して破る、死者數十萬を以てす、合法里舸を以て走る、獲らる、其國傳ふる四十主合法里に至りて亡ぶ是れ綽兒馬罕合里伯を征し未だ全く歸附せず、後十數年旭烈兀等の先聲を爲す也。

斡歌歹其地面と產する所の物好きを以て。

西遊記に曰く路、征西人に逢ふて回る、多く珊瑚を獲五十株に近し、西使記に曰く報達國產する所大珠を太歲彈蘭石瑟と曰ふ、瑟は金剛鑽の類帶びて千金に直する者なり。

就ち綽兒馬罕等に令して、探馬赤官となし其他を鎭めしむ。

地理志に云ふ西北地撒麻耳干有り、即ち綽兒馬罕駐する所の地に似たり、其他本と尋思干

名づくる者也。

令して出づる所の金帛駝馬等の物を以て每年進貢す、再び速別額台の後援巴禿大王等其康里を降す。

剛方備乘に曰く康里は欽察の東に在り曷思麥里傳に曰く尋で康里を征し孛子八里城に至る、其主霍脫思罕と戰ひ又其軍を敗る、進んで欽察に至る則ち康里は孛子八里に近し、即ち地理志の別失八里也、西使記に言ふ別失八里と龍骨河南北と相直す、五百里に近し此れ則ち今の烏龍古河其河瀦海と爲る、奇薩爾巴思鄂模と名づく、元史郭德海傳乞則里八海を渡る者也、郭德海此を渡りて鐵山を攻む、其地今の俄羅斯國に在り、何氏謂ふ即塔喇斯科は則ち元初の康里部在る所に似たり。

乞卜察等三種。

元史地理志西北地附錄欽察下注に云ふ、太宗甲午年諸王拔都に命じて西域察阿速斡羅思等の國を征す、乙未亦憲宗に命じて往かしむ焉、前文九卷篾兒乞忽都合勒、康里欽察種を過ぎて行く、欽察乞察は一聲の轉即ち欽察也、速不台傳に曰く篾里乞部主霍都欽察に奔る、欽察を討つに及び兵を引ひて寬田吉思海を繞り轉じて太和嶺に至る、石を鑿して道を開く其部長玉里吉及び塔塔哈兒に遇ふ、不祖河に聚るに方り兵を縱つて奮擊す、衆潰走

走し遂に其境を收む、土哈哈傳に曰く欽察中國を去る三萬餘里曲出未破納を生む、破末納亦納思を生む世欽察國主と爲す、太祖篾兒乞を征す、其主火都欽察に奔る太祖遣を使し問ふて曰く、汝ぢ奚んぞ吾が負箭の麋に匿る亟かに以て相還れ然らずば禍且に及ばんと、會亦納思老い國亂る、其子忽魯速蠻歸順せんと欲す、太祖已に蒙哥に命じ師を帥ゐて其境に抵る、忽魯速蠻族を擧げて降る、虞集句容郡王燕帖木兒碑に曰く、歲丁酉欽察王亦納思の子忽魯速蠻自ら太宗に歸す、而して憲宗命を受け師を帥ゐて已に其國に及ぶ忽魯速蠻の子斑都察族を擧げて來り歸す、太宗本記に曰く九年春蒙哥欽察部を征し之を破る、其酋八赤蠻を生擒す、地理志に曰く歲丁酉師寬田吉思海傍に至る、欽察酋長八赤蠻海島中に逃避す、適大風海水を吹ひて去り而して乾す、八赤蠻を生禽す、憲宗本記に曰く嘗つて欽察部を攻む。其酋八赤蠻海島に逃る、帝聞き亟に師を進む適大風海水を刮して去る、其淺渡る可し、帝喜んで曰く、天我れを開く也と遂に八赤蠻を擒へ之に命じて跪かしむ、八赤蠻曰く我れ一國主爲り、豈に苟くも生を求めん且つ身馳に非ず、何を以て人に跪くを爲さんと、乃ち之を囚ふ八、赤蠻守る者に謂ふて曰く我れ海に竄入す、魚と何んぞ異らん天を擒ふるを見る也、水迴期して且つ至る軍宜しく早還すべしと、帝之を聞き即ち師を班す、後軍浮渡する者あり。

其斡魯思種城を破り悉く其人を殺虜す。

速不台傳に曰く、速不台阿里吉河に至る、斡羅思部大小密赤思老と遇ふ、一戰にして之を降す、乙未太宗諸王拔都及び皇子貴由皇姪蒙哥に命じて西域を征し、兀魯思部を討つ、禿里思哥城を圍み克たず、速不台を遣して往く、一戰にして其主、也烈班を得諸城皆下る、盡く部する所を取りて還る、憲宗紀に曰く諸王拔都と斡羅思部を征し也烈賛城に至る、躬自搏戰して之を破る、地理志に曰く遂に諸王拔都と斡羅思を征す、亦烈賛城に至り七日にして之を破る。

惟阿速惕等域の百姓虜し得るは虜し歸附し得るは歸附す。

曷思麥里傳に曰く太祖使を遣して哲別に趣き疾馳して欽察を討つ、谷兒只部及阿速部に至り、兵を以て敵を拒む、皆戰敗し始めて降る、又黑林城を招下し進んで斡羅思に克つ鐵兒山にて其國主密只思臘を獲、之を求赤太子に献じ之を誅す、尋で康里を征し進んで欽察に至る亦之を平ぐ、速不台傳に曰く、大に阿速部を掠めて而して還ると、太宗紀に曰く十一年冬十一月蒙哥師を率ゐて阿速篤法思城を圍み三月を閱して之を拔くと、定宗紀に曰く太宗諸王拔都に命じて西征す、阿速境に次し木柵山塞を攻圍す、三十餘人を以て與に戰ふ、帝及び憲宗與る焉、元地理史に曰く歲丁巳師を出して南征す、駙馬剌眞のの子乞紇

を以て達魯花赤と爲し斡羅思阿速を鎮守す、歳癸丑斡羅思阿速戸口を括す、明世法録に曰く阿速海中に在り大國と爲す、城山に倚り川に面す、川南流して海に入る、涼暄節に適ふ、魚監耕牧有り飢寒寇盜鮮し、撒馬兒罕天方諸國人多し、明史西域傳に曰く阿速國は天方撒馬兒罕に近し、幅員甚だ廣し、城山に倚り川に面す、川南流して海に入る、西域水道記に曰く、元史言ふ阿剌欽察と鄰を爲す、阿速は則ち哈薩克なるを疑ふ、曷思麥里西域より轉戰して而して北す、先に阿速而して斡羅思而して康里而して後欽察也、速不台傳に曰く欽察境を収め阿剌部を略すと、是れ先に欽察而して斡羅思而して阿速也、然るに曷思麥里傳先に言ふ帝哲伯に趣ひて疾馳し以て欽察を討つ、則ち欽察を征するに先に在り、曷思麥里西域諸城を徇へて而して北す、先づ阿速に至る、則ち阿速は欽察の南に在り阿速と哈薩克音亦相近き也、朔方備乗に曰く、案ずるに哈薩克は裏海の東北に在り、曷思麥里西域より阿速部を征す、是時元兵已に尋思干城を踰へて西す曷思麥里必ず更らに折れて東しせず繞つて裏海の北に出づる也、惟ふに布哈爾等國より西行し道を裏海の西黑海の東に取る以て俄羅斯を征す、則ち阿索富城正に孔道に當る、是れ阿速は則ち阿索富城なる疑ふ可き者無し、文田案ずるに徐何皆輿地に精し、未だ敢へて其是非を定めず。惟ふに富さに俄人撰述するを取りて以て之を、此書後に出づ、兩家皆未だ見るに及ばざるを恨む也、俄國志畧

に曰く宋嘉定時蒙古拖雷兵を率ゐて俄國西鹹海旁の地に至る、後又兵を帶びて裏海に至る、繼で又尼泊河に至る俄國衆小郡を率ゐて卡爾毫河の上りに戰ふ、此河阿薩夫海に入る亦敗るる所と爲る、十三年後に迨び蒙古王拔都と名づくるあり成吉思の孫なり、兵を以て俄を伐ち大に全勝を獲有ゆる人民盡く之を殺す、其老幼婦女掠められて殆んど盡く其時人國に主たる無し蒙古より刺を該處人に封じて王と爲す、馬司孤に遷りて都を作す其人勇謀兼備鄰邦小國皆附す焉、蒙古王馬賣其情形を知る、法を設けて以て之を制せんと謀る、傅諭して課説を倍加せんとす、該王允さず、兵を敦河に屯し以て之を守る、兼ねて傅敎神あり中より開導し兵士を壯にす、果して大勝を得是れより蒙古敢へて輕視せず、數年後蒙古復大隊の兵を起して來り戰ふ、馬司孤城を圍む、該王敵を禦ぐの策無し惟盟を城下に請ふ有り、明の洪武年間に至り、王卒す、俄人自ら言ふに據るに則ち寛田吉思海は則ち今の裏海而して鹹海裏海並に騰吉思湖の目あり田吉思三字原と即ち騰吉斯の對音又裏海較大故に大騰吉斯海子と稱す、此れ寛田吉思海の名由來する所也、尼泊河は即ち烏拉河卡爾毫河は即ち佛兒格河、兩河皆裏海に注ぐ、是裏海の寛田吉思海たる援古證今確手として拔けず、何氏額納噶泊を以て寞田吉思海に當てんと欲す、甚だ事實に非ず、何氏の意を揣るに徒らに元史に一俄羅斯地名を尋ねんと欲す、元代兵力遠く歐羅巴洲に及ぶの證據たり

故に强いて寛田吉思海を以て額納噶泊と爲す、又阿速の名を奪ひ而して畀の阿索富を專にす、其兼ねて哈薩克有り而して後己むを許さず而も其偏を知らざる也、元氏版章廓す矣、惜むらくは圖籍荒落するを、明代史官漠北の地名己に墻面を同ふす、其斡羅思地を狀す者祇夏夜極めて短かく日暫く沒して即ち出づと云ふ、又驛騎急行二百日にして至る可しと云ふ、是の如き而已、錫伯利部に在る者尙核實し難し、況んや據を歐羅巴の地に取らんと欲する乎蓋闕を知らず未だ責むるに是らざる也、今俄略の外再び一佳證を得、庚申外史亦元人撰也外史曰く元朝廷紅軍起るを聞き樞密院同知赫厮禿赤に命じ阿速軍六千並に各漢軍を領して紅軍を對つ、阿速は緣晴回回也、素精悍騎射を善くす云云、既に阿速と曰ふ又緣晴と曰ふ、則ち歐洲に非ざれば此種類なし、然らば則ち哈薩克以西彼得羅以東皆阿速也、借りて然らずと曰はん安んぞ緣晴回回あらん乎、太和嶺は當さに即ち烏拉嶺此れ則ち欽察の地、額爾斯西岸是れ康里なり、此れより漸西是れ阿速と爲す、而して阿速西より南ざ抱く直ちに裏海に襟す、此れ又彊域の約畧指す可き者、之を以て元史祕史を貫穿す有案察れぞるに庶からん耳。

答魯合臣を立つ。

即ち達魯花赤也、此れ定字無し、西游記に塔剌忽只あり、西域水道記に曰く卽ち達魯花赤

と元史兵志に曰く阿速衛至元九年達魯花赤を立つと。

探馬赤官鎭守回る、又先に女眞高麗の處に在り曾つて札剌亦兒台に命じて往いて征進せしむ。

元史抗忽思傳に曰く抗思忽阿速氏阿速國に主たり、太宗兵其境に至る、抗忽思衆を率ゐて來降す、名を拔都兒と賜ふ、賜ふに金符を以てす、命じて其土民を領し尋で旨を奉じ阿速軍千人及其長子阿塔赤を選し駕に扈して親征す、耶律留哥傳に曰く留哥の子斡闊太宗撒兒台に命じて東高麗東夏を往す、斡闊卒す子石剌佐諸王也苦及び札剌台高麗を控制す本紀に曰く太宗三年辛卯秋八月高麗使者を殺すを以て撒禮塔に命じ師を率ゐて之を討つ、四十餘城を取る、高麗王瞰其弟懷安公を遣し降を請ふ、撒禮塔制を承けて官を設け其地を分饌し乃ち還る、四年八月撒禮塔復高麗を征し失に中りて卒す、元史外夷高麗傳に曰く太宗三年八月薩里台に命じ其國を征す、四年八月流矢に中りて卒す、高麗王瞰達魯花赤七十二人を盡殺す。

是に至りて再び也速迭兒に命じて後援となし征進す、則ち探馬赤と爲し以て其地を鎭す。

東國史畧に曰く高麗王瞰十七年蒙古太宗二年に當る、其明年蒙古元帥撒里塔兵を以て、咸新鎭を攻む、又咸州を圍む、旣にして京城四門に分屯す、王閔議を遣して往いて犒ふ時元